

# 教化研究

2005年(平成17年)

No. 16

研究成果報告

「沖縄本島都市部における浄土宗寺院の現状  
と展望②」

浄土宗総合研究所



# 教化研究

2005年(平成17年)

No. 16



# 目次

## 研究成果報告

沖縄本島都市部における浄土宗寺院の現状と展望 ②……………総合研究 総合研究プロジェクト 開教……………2

## 平成16年研究活動報告

総合研究	総合研究プロジェクト	開教（国内開教・海外開教）	……………	22
総合研究	総合研究プロジェクト	仏教福祉	……………	26
総合研究	総合研究プロジェクト	生命倫理	……………	28
総合研究	総合研究プロジェクト	葬祭仏教	……………	32
総合研究	総合研究プロジェクト	国際対応	……………	35
基礎研究	教学的関連プロジェクト	浄土教比較論	……………	42
基礎研究	法式的関連プロジェクト	法事讀研究	……………	44
基礎研究	布教的関連プロジェクト	現代布教資料研究	……………	48
特別業務	特別	浄土宗善本叢書	……………	54
特別業務	特別	浄土宗典籍・版木の研究	……………	57
特別業務	大遠忌関連	法然上人二十五霊場研究	……………	62

特別業務 大遠忌関連	浄土宗大辞典	65
特別業務 大遠忌関連	浄土三部経	70
特別業務 大遠忌関連	四十八卷伝	74
<b>研究ノート</b>		
総合研究 総合研究プロジェクト 葬祭仏教	静岡教区調査結果	79
仏説無量寿経 卷下 (特別業務 大遠忌関連 浄土三部経)		121
四十八卷伝 (特別業務 大遠忌関連 四十八卷伝)		172
現代布教班資料 (基礎研究 布教的関連プロジェクト 現代布教資料研究)		180
The Amida Sutra		2
浄土宗総合研究所所員・嘱託 名簿		207
浄土宗総合研究所運営委員会委員名簿		210
平成十六年度行事報告		211
平成十七年度研究課題・担当者		216
編集後記		221

研  
究  
成  
果  
報  
告

# 研究成果報告

## 総合研究 総合研究プロジェクト 開教

### 沖縄本島都市部における浄土宗寺院の現状と展望 ②

はじめに

本研究プロジェクトは平成十五年に開始された。平成十六年度前半に行つた浄土宗寺院八ヶ寺の聞き取り調査の内容分析は、前号『教化研究』十五号に報告した。今回掲載した研究報告は、以降の平成十六年十二月と平成十七年三月に行つた三ヶ寺の調査の成果である。今回の調査によつて、調査協力のご理解をいただいた、浄土宗との包括・非包括、宗教法人の認証・未認証を含めた沖縄県における浄土宗系寺院のほぼすべての聞き取りを完了した。ちなみに未調査寺院は一ヶ寺である。

#### 三寺院の特徴

本稿以下に報告するように、沖縄本島の東林寺と浄土宗三宝寺沖縄布教所（善智庵）、宮古島の寶勝寺宮古島別院布教所は、ともに前回の報告で分析した浄土宗寺院の展開過程から見れば、近年になつて活動を開始した第三期に当たる寺院である（『教化研究』十五号参照）。

もつとも際だつ特徴は、三寺院ともに開教使が在家出身だということである。彼らは、人生のそれぞれの時期に宗教に関心を持ち、浄土宗の教えと出会い、佛敎大学の通信講座や少僧都養成講座、律師養成講座を経て敎師資格を獲得している。これも第三期の開教使に共通して



いる特徴であるといえる。とくに東林寺以外は、沖繩出身者である。

沖繩出身の二開教使に関しては、それまで培ってきた社会経験や友人関係、公務員などの職業を通じて形成された人間関係などを、布教活動に最大限に活用しているということである。詳しくは、個別寺院報告に譲るが、人生の円熟期に差し加かつて開教使となつて、人格的な信頼を布教活動の基礎としていることは、第三期の沖繩の開教使の多くに共通してみられる点である。寺院として、その社会のなかに歴史的に信頼関係が形成され受容されている本土の多くの寺院と異なつて、開教寺院に於いて最も重要なことは、開教使個人の持つさまざまな資質である。そのなかでも個人的な意欲や熱意とともに、さまざまな社会階層の人間関係や経験を豊富に持つていることは極めて優位なことである。

そうした優位性を梃子に、二人の開教使は敢えて沖繩では難しいと言われてきた檀信徒組織の構築を目指して、現段階で組織で基盤とした活動が行われ始めてい

ることも、大きな特徴である。宮古島、寶勝寺宮古島別院布教所は職業的経歴を中心に地域社会の有力な人たちを会員にしているし、浄土宗三宝寺沖繩布教所（善智庵）は学友、友人や女性特有の職業ネットワークなどを組織している。東林寺も、こうした先達たちの開教姿勢を指している。

もうひとつの特徴は、彼らの開教使としての独自性である。浄土宗三宝寺沖繩布教所（善智庵）の玉城師は尼僧という立場を最大限に活用した、沖繩の女性のための尼僧寺院の建立という明確な開教方針を打ち立てていることは注目に値する。女性の時代とも言われる今世紀にあつて、今後の浄土宗の寺院活動を考えるうえにも、重要な意味を持つているといえよう。

また、東林寺の佐藤師は山形県出身で、生まれ育つた山形県天童市と全く異なる風土と宗教性を持った沖繩の地域での開教を目指している。佐藤師にとっては沖繩出身開教使のような優位性はほとんどないに等しく、今後の開教の展開に注目していきたい。なぜなら、今後の多

くの地域での新たな開教は、地域に生まれ育った開教使が行うという僥倖は望めず、国内の多くの地域でも同様の開教のための厳しい努力が行われているからである。浄土宗にとっても、それぞれの開教使の活動は、すべてが貴重な具体例であり、参考資料なのである。

\*なお、本文中の浄土宗の寺院名・人名はすべて仮名である。

(武田道生)

# 浄土宗寶勝寺宮古島別院布教所

はじめに

浄土宗寶勝寺宮古島別院布教所（以下「寶勝寺布教所」）は、沖縄県の宮古島で最大の人口を抱える平良市で、一九八二（昭和五十七）年より活動を展開している寺院である。浄土宗兵庫教区の寶勝寺（二木良憲住職）の別院布教所であり、開山住職は二木良憲師、二代住職が前山憲弘師という形式をとっている。しかしながら、実際は前山師が活動を開始した寺院である。

## 1 歴史的経緯

前山師は、一九三八（昭和十三）年、宮古島の島尻町に生まれた。生家はサトウキビなどを栽培する農家であり、前山師は一人っ子であった。師の父親は、昭和十三年に徴兵され昭和二〇年七月に宮古で戦死したため、師

は父の顔を覚えていないという。宮古農林高校を卒業した後、昭和三十二年東京農業大学に入学をした。高校時代から「知的労働でなければ将来食べていけない」と考えていたことと、昭和三十一年に遺族年金が認定されたことから大学進学を決意したという。農芸化学を専攻したが、日々の実験や勉強が忙しくアルバイトもできなかったため、大学時代は金に困窮し実家の農地を売却して学費に充てたこともあった。

一九六二（昭和三十七）年に大学を卒業した後、宮古島にもどり精糖会社に就職し十年間勤務をした。昭和四十七年、師が三十三歳の時、本土復帰を前にして市長に頼まれ、課長として平良市役所に迎えられた。市役所には十三年間勤務をしたが、市役所を辞める時には政策担当をしており、観光客の誘致や各種イベントの企画も

手がけていたという。市役所を辞めた後には、農業協同組合の組合長を一期三年務め、その後十年ほど畜産業に携わった。

市役所で議会対策を担当していたとき、なかなか理解しがたい腹立たしい内容も多かったという。このことは前山師に「これまで自分の専門であった科学では解決できないものがある」との思いを生じさせた。「人の心を知るためには哲学の勉強するのがよいであろう」と思い調べていくうちに、仏教を勉強するのもっとも良いとの考えにいたった。仕事を続けながら仏教を勉強でき、しかも卒業論文を書く必要もないという理由で、一九八七（昭和五十三）年に佛教大学文学部仏教学（通信教育課程）に三年編入をし、勉強をした。加行人行のための単位を取得したので「せつかくだから」と、昭和五十六年知恩院で加行を受け、翌年に少僧都を叙任され教師資格を取得した。師僧は佛教大学の教師である二木良憲師になつてもらい、名前も師僧の名前から一字もらつて和弘から憲弘に改名した。

教師資格を取得した後は、知り合いに頼まれ葬儀を行うなど、すぐに法務を開始した。法務開始とともに、師僧の寺院の布教所として「浄土宗兵庫教区寶勝寺布教所」と名づけ、自宅に看板を出した。仕事を続けながら法務をおこなうという生活を十七年ほど送っていたが、徐々に法務が忙しくなり、また畜産業に携わる余裕がなくなつてきたため、平成十年ごろには畜産業をやめ法務に専念するようになった。平成十三年に自宅を改造し本堂とし、寶勝寺役員、近隣住民ほか三百名を招待しての開式を行うとともに、寺名を「浄土宗寶勝寺宮古島別院布教所」とあらためた。

## 2 寺院組織と規模

住職である前山憲弘師のほかに、師の次男にあたる前山憲裕師が副住職として法務に携わっている。

二階建ての建物の一階部分約三十畳を本堂として使用しており、二階には副住職が生活している。住職夫婦は隣接する別棟に生活をしている。本堂内陣横には四十基

ほどが収まる納骨棚がある。納骨棚は年間二万円の「一時預かり」が基本であり、現在二十ほどの遺骨を預かっている。永代で預かっているものもあるが、なるべく断るようになっているという。遺骨を預ける理由はそれぞれだが、宮古本島で働いている離島出身者で、離島で暮らす親が亡くなったため、宮古本島に墓を作るまで預けておくという人もいるとのことである。

檀信徒組織として平成十三年に開始した「寶勝寺友の会」がある。現在会員は十五名で、月一回の食事会、年一度のグランドゴルフ大会を開催して親睦を図っている。会員は社長や議員、校長などの有力者が中心であり、それぞれの会員は宮古島内のさまざまな地区に住んでいるので、寶勝寺布教所の布教活動に有益な役割を果たしてくれている。

### 3 宗教活動の特徴

#### ① 葬儀・法要

葬儀は年間約百五十件である。宮古島にはまだ葬祭場はなく、ほとんどは自宅での葬儀であり、寺での葬儀は年間四〜五件程度である。葬儀社を介しての依頼が多いが、その中で寶勝寺別院を指名してくる人も多い。製糖会社、市役所、農業協同組合など、これまでの仕事のなかで培ってきた前山師の人脈と、市役所職員で保育関係の仕事をしている住職夫人の人脈が強く役立っているのではないかとのことである。

宮古島の平良市には長い歴史をもつ臨濟宗妙心寺派の祥雲寺があり、かつては宮古島における唯一の仏教寺院であった。現在でも寺院の格式にこだわる人は祥雲寺に依頼する人が多いという。なお、現在宮古島にはJA葬祭センター、中央葬儀社、宮古葬儀社という三社の葬儀社があるが、平成元年ごろ営業を開始し、現在最も広く活動しているJA葬祭センターは、営業開始にあたり前山師に相談をしたとのことである。

宮古島の多くの地域では昔から僧侶が葬儀を執行していたが、離島などでは僧侶を介さずに葬儀を行なってきた

た。たとえば多良間島・水納島では今でも葬儀は地域住民がおこなう。しかしながら、そうした地域の中でも、近年になって僧侶が葬儀を執行するようになった地域もある。たとえば池間島では平成四年に宮古本島と結ぶ橋が架かってから僧侶が葬儀を行うようになった。そのような地域の多くは前山師が葬儀を執行している。

宮古島では沖繩本島と同様、通夜はほとんどおこなわれない。午前中に出棺して火葬場に行き、午後に葬式をおこなうのが通常である。参列者は二百名程度が一般的である、千人以上参列する葬儀も多い。参列者は焼香を済ますと帰ってしまう人がほとんどなので、葬儀式の前に喪主が挨拶を行なう。読経は一時間程度行なうが、これは前山師の「焼香が終わるまで読経をやる」という考えに基づいている。

年回法要は月六十件ほどで、ほぼ自宅で営まれる。法事は曜日に関係なく行われるという。法要は、四十九日忌、百ヶ日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、三十三回忌と行なわれる。最近は

四十九日に納骨する人が増えており、四十九日まではほぼ100%の人が法要を行なう。寺から法要の案内は出しておらず、電話で申し込みを受ける。年回法要は宮古の人に浸透しているもので、寺から連絡を出さなくても大丈夫とのことである。

前山師は、法話に地域の話題を積極的に取り入れるようにしている。身近な話題から仏教に馴染んでほしいと思っているからである。また農業・畜産業の知識が豊富であるため、法要の後、農業や畜産の相談を受けることも多い。

年回法要以外の法要は、地鎮式、起工式、船やトラックター、ハーベスター（刈取機）のお払いなどを行っている。また、前山師は遺族会の青年部長をしていたこともあり、六月二十三日には戦没者の供養をおこなっている。各種法要は浄土宗のやりかたに則り勤めているが、法要に伴う沖繩の風習は否定しないという。たとえば、紙銭を焼く風習、沖繩独自の法要の際の飾りつけなどについても、止めるように指導することはしないという。

## ② その他の活動

寺が主催する年中行事は特にないが、大晦日に十五人ほどが料理を持って集まり、焼香をした後に会食をするということを経年行なっている。特に呼びかけているわけではないが、自然と人々が集まるのだという。

前山師は地域での活動を非常に盛んにおこなっている。地域での講演会の講師を頼まれることも多く、医者、学校職員、地元の老人会、JA職員などを対象に、食品、農業問題、心の問題などに関する講演を行なっているという。また、地域の俳句の会副会長、市長の後援会の副会長も務め、平良市で書道の世界大会が開催されたときには実行副委員長も務めた。ほかに、「三日会」という地元有力者の集まりにも参加し、旧跡めぐりなどを行なっているという。前山師は、地元で様々な活動を展開しているため、宮古島で知らない人がいないほどの有名人である。

前山師は「開かれたお寺」を目指しており、「癒して・和ませて・安心させる」をキャッチフレーズとしている。

夏は本堂に冷房を利かせ新聞を置いておくので。お寺にきて新聞を読んで帰っていく人もいる。沖繩本島からの旅行者が、寺ならば無料だからという理由で宿泊にすることもある。普段から本堂玄関には来訪者ノートが置いてあり、不在時には氏名・用件を記入し任職が後ほど電話をするシステムをとっている。人生相談やその他位牌の相談などをはじめとする宗教的相談をうけることも多く、ユタの紹介で相談に来る人もいるという。

## 4 今後の展望

兵庫の寶勝寺の檀信徒との交流を図りたいと考えている。また、実現可能かわからないが、現在所有している土地に自然体験センターを作り、子供たちが自然にかえり農業などを体験できるように施設を作りたいと考えている。

沖繩の人は仏教についてまったく知らないという状況なので、教えを伝えるということは難しいものであると感じている。そのために布教に際しては、僧侶であるま

えに、信頼される一人の人間としての資質を磨くことが大切であり、そのうえで今後も人とのつながりを大切に  
して布教活動を行なっていきたいと考えている。

おわりに

前山師は、師がこれまで携わってきた仕事や地元での  
人脈、また住職夫人の持つ人脈を十分に活かし、その上  
で宮古島内での強固なネットワークを構築している。前  
山師はいわば地元での「名士」であり、それゆえ地元で  
求められる役割も多い。このことが、現在の活発な布教  
につながっていることは間違いなく、今後一層の展開が  
期待できる寺院である。

\*なお、本文中の浄土宗の寺院名・人名はすべて仮名で  
ある。

(名和清隆)



# 浄土宗三宝寺沖繩布教所（善智庵）

はじめに

浄土宗三宝寺沖繩布教所（通称善智庵）は、沖繩県那覇市から約二十五キロ北上した沖繩市安慶田<sup>あけだ</sup>に位置する、尼僧である玉城善智師によって開設された布教所である。一九九一（平成三）年六月四日に浄土宗長崎教区三宝寺住職・岡田光和師によって開眼法要が行われた「三宝寺念仏道場」を前身としている。

浄土宗三宝寺沖繩布教所は、二〇〇四（平成十六）年十二月と二〇〇五（平成十七）年五月の間取りの時点では、浄土宗への寺院設立申請および包括関係の申請を目指し、活動する段階であった。そのため、以下では開創までの歴史的経緯や今後の宗教活動への展望を中心に記述する。

## 1 歴史的経緯

玉城善智師は、一九四八（昭和二三）年、沖繩県島尻郡南風原町の砂川家に五男二女の長女として生まれた。父は仏教徒、母はキリスト教徒であり、師は十歳の頃に教会で洗礼を受けている。砂川家は、師が十三才の時に沖繩市安慶田に移住する。中学卒業後の師は、家業であった豆腐製造販売業を手伝うなどして生活していた。

一九六九年、二十一才の時に結婚し、二年後に長男、翌年長女が誕生したものの、性格の不一致から二十七才の時には別居し、二十九才で離婚している。師は、離婚後も家業を手伝って暮らしていた。離婚によって、行き来はできるものの子供達と別居せねばならず、師はつらい思いをする。そして、その満たされぬ思いから宗教へ

の関心が強まっていった。この時期、日蓮正宗光明寺（那覇市識名）に半年間毎朝通い、その関係から本山大石寺にも参詣している。しかし、師は理由を明確にしていな  
いが、ほどなくして通うのを止めたという。その後は、  
道元や親鸞に関心を持ち、関連書籍を読み、二人の言葉  
を筆写したりしていた。

師の精神的にも経済的にも苦しい生活は続いた。そして一九八四年以降、不思議な夢を見はじめた。ある時、翌日に東の窓から阿弥陀三尊が入ってくるという夢見をした。そのため、阿弥陀三尊とは何か知りたくなり、那覇市首里に行けば知ることができると思い、行くことを決意する。だが財布を開くと往復のバス賃しかなかった。しかし偶然にもその翌朝、隣に住む小母さんが師のもとを訪れ、「師に良いことがあるという夢を見た」と言い、五万円を貸してくれたという。そして、たまたま臨済宗妙心寺派西来院（那覇市）に赴くと、その本尊が偶然にも阿弥陀三尊像であった。西来院で小さな阿弥陀三尊像を購入し開眼供養してもらおうと、その代金は凶らずも

五万円であったという。

以後、阿弥陀像に念仏を称える暮らしが始まる。だが、念仏を称えても師の生活は物質的にも精神的にも変わらなかった。この頃、再び不思議な夢を見た。それは、船に乗った人物から「浄土門に帰依せよ」と告げられるという夢であった。当時、念仏を称えても現状が変わらないことから、念仏に対して疑問を感じ始めていた師は、不可解な夢を見させる阿弥陀像に怒りを感じたという。そして、このことを契機として阿弥陀像へ念仏を称えることを止めてしまう。

一九九〇（平成二）年のある日、豆腐の引き売りをして  
いた師は、臨済宗妙心寺派龍福寺（沖縄市）の住職と親しくなり、座禅を組み、法話を聞くようになる。やがて禅宗に強い関心を持った師は、雑誌で見て憧れた東京の尼僧に会うため、家出同然で上京する。この頃、尼僧が白衣と数珠を渡し「あなたは沖縄で尼僧としてやっていくのですよ」と言う夢を見ており、漠然と尼僧になりたいと思いはじめていた。もうひとつの上京の目的として、

祈っていた阿弥陀像を沖繩ではどうしても捨てる決意が  
つかなかつたので、東京で捨てようと思い立つたことも  
あった。

だが上京した師は、なぜか尼僧へ会いに行く気が失せ、  
沖繩の着物販売会でたまたま電話番号を交換した長崎教  
区三宝寺の檀家である人物にふと電話をする。すぐに来  
いと言われた師は、電車を乗り継いで博多に向つた。そ  
の人物に三宝寺に案内され、住職である岡田光和師に阿  
弥陀像や禅宗について相談すると、師は浄土宗の本尊が  
阿弥陀仏であることを教えてくれた。玉城師は、岡田師  
と出会うまでのこれまでの長い道のりに涙したという。

この後、師は本当に尼僧としてやっていけるのかを確  
かめるため、法然上人に縁のある寺院を巡つた。その当  
時の心境について「頭では禅宗をやりたい、禅宗に行き  
たいのに、導かれて浄土宗にたどりつきました」と師は  
述べている。そして、岡山県の誕生寺に参拝して法然上  
人像を拝した際に、決意が生まれ、尼僧になることを誓  
つたという。これ以降は、「頭で考えなくなつた」と師

は言い、家族や生活に関する世俗的な心配が無くなつた  
という。

阿弥陀仏への信仰と尼僧になりたいという気持ちが確  
かなものとなり、玉城師は一九九一年、再び岡田師を訪  
問し、得度した。一九九一年六月には岡田師が開眼法要  
を行つて、「三宝寺念仏道場」を安慶田に開設した。そ  
の後、一九九三年八月、律師養成講座を受講、一九九四  
年十二月、伝宗伝戒道場を成満し、先輩や同期生から影  
響を受けて更に勉強を続けなくなった玉城師は引き続き  
布教師養成講座を受講している。そして、講座で勉強を  
するうちに、布教することが法然上人への恩返しである  
と考えるようになり、本格的な布教を志すようになる。  
師は、一九九七（平成九）年二月布教師養成講座上級を  
受講修了し、一九九八年十月総本山知恩院布教師を拝命  
しているが、「もしも、布教師養成講座を受講していな  
かつたなら、布教をしようとは思っていませんでした」  
と語っている。

現在、浄土宗三宝寺沖繩布教所は浄土宗との間に

包括関係はなく、宗教法人として認証されていない。  
二〇〇五年、浄土宗と包括関係が結ばれる予定である。

## 2 寺院組織と規模

代表役員は玉城善智師、責任役員は師僧である岡田光和師と玉城師の中学校の同級生であった女性二名である。

念仏道場を開いた頃から知人・友人らの賛同を得始め、人から人へ広まった結果、現在信徒会として、名簿に約百名が登録されている。知人へ唐突に「信徒になつてほしい」と声をかけても恐がられるだけなので、まず沖繩に女性のための寺院を建てることに協力して欲しいと説明し、その趣旨に賛同した人々を信徒としている。会費は徴収していない。

信徒会は地域別に北部組（石川市以北）、中部組（石川市・宜野湾市）、南部組（宜野湾市以南）に分かれ、それぞれの組に一人の組長（世話人）を置いている。例えば南部組では、那覇市にいる師のいとこが深く関わっ

ている、女性中心の家政婦会やデイケア団体が核となっている。また、北部組は、理髪店を営んでいる組長と、三味線の師匠などの芸能者のグループが中心であるという。

玉城師は家族信徒に子供がいる場合、0歳から高校生までを子供会に所属しているとみなしており、二〇〇五（平成十六）年五月現在約三十名が所属している。子供達の入学式、十三祝や花祭りなどの際に、催しを行っている。浄土宗児童教化連盟が主催する第二十四回全国青少年奉納書道展に五名の子供達が作品を出展した。

## 3 宗教活動の特徴

### ①葬儀・法要

沖繩では女性の僧侶に対して違和感を持たれる場合があるので、女性の僧侶でも良いという喪家の依頼のみを受けている。従って、自然に評判が伝わると思い、特に宣伝は行っていないため。葬儀、年忌法要ともに信徒

や知人からの依頼が多いという。ここ数年は年間で約五件の葬儀を行っている。

葬儀や法要において、仏壇の飾り方やお供えに関する沖繩の習俗に詳しい点と、沖繩生まれで地域の人々を良く知っている点が強みであるという。葬儀では方言を使用していない。

## ②年間行事

修正会、御忌会、春季・秋季彼岸会、花祭り、お盆、棚経、十夜法要などを計画している。その際にお茶会を催し、時には沖繩そば、ぜんざい、牛乳粥などを振舞う予定である。師は、定期的に念仏講を行なっているが、施設が手狭なこともあって参加人数は概ね五名ほどである。今後は特に、信徒を集めて百万遍のお数珠繰りを行いたいという。

## ③個別活動

師は、浄土宗の宗定法要に無い依頼の場合、念仏を入

れる他に、方言を使用することで対応している。例えば、火の神（ヒヌカン）の儀礼は、特に十二月二十四日頃に依頼が多く、台所で方言を使用し執行している。他の沖繩独自の依頼として、墓を移動する儀礼では、七夕の時期にお骨を移すことが多く、墓で儀礼を行う。墓を造る際の儀礼や屋敷のお祓いの依頼もある。

師は、特に女性から相談を受けることが多いという。主な相談内容は、離婚・結婚問題、ユタ買いなどの宗教に関する問題、不妊の問題などについてである。

## ④その他

二〇〇五年から「善智庵たより」を発行しており、二〇〇五年五月現在で第二号まで発刊されている。発行部数は約二百部で、個人信徒向けは約七〇部、残りは家族信徒に対して配布している。また、信徒にはならないが読むことを希望する一〇名ほどの他宗派信徒にも配布している。今後、一年に四号ずつ発行していく予定であるという。

#### 4 今後の展望

師は沖繩生まれであるため、ユタになる人の心境も、ユタに頼る人の心境も理解したうえで布教することができるといふ。「ユタは金を目的としており、心から相談者の悩みを解決しようという気持ちを持っていない。問題が起きた人がユタを頼る前に、その人を理解してユタへの依頼を止め、良くしてあげられることが、沖繩で浄土宗を布教する良い点の一つだと思えます。」と師は述べている。沖繩ではユタや民間信仰がかなりの影響力を持つが、念仏の道に人々を導く際に、そのようなことは全く問題にならないという。

今後、沖繩に女性のための寺院を開創することが師の目標である。その理由としてはまず、過去の沖繩女性を弔うためである。沖繩に教訓としてある「イナグヤユーヌフカサヌ」(女は三世の業が深い)という言葉からわかるように、沖繩では女性の立場が弱かった。例えば沖繩の遊女たちの墓(ジェリ墓)に関する女性の悩みや無念を真に理解できるのは女性だけであると師は言う。将来的には過去の沖繩女性の供養のために慰霊碑を建立したいという。

次に、寺院で仏壇の使い方や法事の作法などの仏教的な教養を教えることで、現代の若い女性たちに道を誤らせないようにするためである。「仏様に任せ、法然上人に従って人生を歩むという仏教的な教養が備わっていれば、苦境に陥つた際に道を誤ることはない」と師は言う。現在、沖繩では内地の人との結婚が増え、それに関する抵抗も減少している。師は、仮に外国に嫁いても、「I am Buddhist」と言える国際的に通用する「根底の力」を若い人に身につけさせたいという。師が目指す女性のための尼僧寺院とは、浄土宗を広めるための後継者である尼僧を育成していくという意味と、法然上人に従って人生を歩む女性信徒を育てるという意味をもった言葉なのである。

二〇〇五(十六)年四月、玉城善智師は浄土宗開教委員会において国内開教使に認定された。一般に沖繩において檀信徒関係は無いとされてきたが、師の活動は沖繩での新しい可能性と独自性を秘めているだろう。

\*なお、本文中の浄土宗の寺院名・人名はすべて仮名である。

(中村憲司)

# 東林寺

はじめに

東林寺は沖繩本島北部（那覇より車で約二時間半）の本部町に、佐藤賢樹師によって二〇〇五（平成十六）年に開創された新しい寺院である。沖繩海洋博覧会が開催された会場に程近く、美しい海まで徒歩でいける場所にある。桂林寺は開創されたばかりで、浄土宗への寺院設立申請、および包括関係の申請をしている最中（平成十六年十二月現在）という状況で、本格的な宗教活動はこれからという寺院であるので、ここでは東林寺が開創されるにいたるまでの経緯、および今後の展望を中心に記述する。

## 1 佐藤師のライフヒストリーと歴史的経緯

佐藤師は一九五一（昭和二六）年、山形県天童市に生ま

れた。山形県内の高校を卒業後、昭和四五年に拓殖大学政経学部政治学科に入学したが、当時の学生運動全盛期の影響を受け、親から資金援助を受けて大学に在学していることが我慢できずに大学三年生で退学をした。退学後は一時期山形市に戻り就職をするが、二年後には再び上京し就職をした。

一九八〇（昭和五五）年、佐藤師が二十九歳の頃、父が脳溢血が原因で死亡する。父の葬儀を機に、佐藤師は菩提寺である山形県天童市にある無量寺と、佐藤家の当主の立場として付き合いをするようになる。佐藤家の本家は代々無量寺の総代を務める家柄であったという。

父が亡くなった二年後には、母が脳内出血で闘病生活を余儀なくされる。それに伴い、母の看病のために東京の会社を退社し山形県に戻った。仕事のかたわら母の看

病をしなければならぬため、自ら小荷物の配達業を開始し、以後十二年間続けた。

一九八四（昭和五十九）年、佐藤師三十三歳の頃、菩提寺である無量寺が「無量寺青壮年会」を組織するに伴い、佐藤師も参加する。お盆、お彼岸、開山忌、除夜の鐘などの行事に際しての清掃、準備などの手伝いを行うことが主な活動であった。佐藤師はすぐに事務局長を任せられ、会が主体の様々なイベントを企画するなど積極的に活動を展開した。無量寺青壮年会の活動のほかにも、自ら念仏の実践を行い、また寺が主催する法話会にも参加するうちに仏教への興味がわき、より深く仏教の勉強をしたいと思うようになった。大学を中退していたこともあり「いつか大学でもう一度勉強したい」との思いもあったという。そのような折、偶然新聞の折込チラシで佛敎大学の通信教育制度を知り、一九八五（昭和六〇）年四月に佛敎大学文学部仏敎学科に入学をした。以後、通信教育・スクーリングによって仏教を八年間勉強する。

佐藤師は三十代後半の頃から僧侶になりたいとの思い

を漠然と抱くようになった。仏教に対する関心のほかに、自分の仕事、母の介護など見えない将来に対する不安がその理由の一つとしてあったという。一九九四（平成六）年、師が四十三歳の頃、無量寺住職石井賢徳師に「僧侶になりたい」との思いを告げたところ、「僧侶というのは職業ではなく、立場なのです。自分の思うとおりにしなさい」との言葉を受けた。石井師に師僧となつてもらい、翌年に得度をし、同年より少僧都養成講座を受講し始めた。平成九年に養成講座第三期を修了し、同年十二月増上寺で加行を満行、翌年二月に少僧都を叙任された。

佐藤師は、僧侶になるとの決意を固め得度を受けるとともに運送業をやめ、作務を中心とした無量寺の手伝いをするという生活を送るようになっていた。教師資格を得得からも無量寺の作務を続けていたが、葬儀や法事、その他の宗教活動は行っていなかった。「自分も自分なりの布教活動がしたい」と様々な手立てを探していたところ、浄土宗の『宗報』で浄土宗国内開教使制度、および沖繩での開教の実態を知り、自らも沖繩での開教を志



すようになつた。沖繩での開教を志すようになった理由は、仏教があまり浸透していない地において教えを広げていく、ということに魅力を感じたからだという。師僧に相談をし申請を行い、二〇〇四（平成十六）年四月に浄土宗国内開教使の認定を受けた。

沖繩での布教地区を定めるために、沖繩での宗教事情を調べた結果、人口に対して仏教寺院の少ない北部地域、特に具志川市で布教を開始しようと決意した。しかし布教所に適した物件が無いなどの諸事情によつて、本部町で布教を開始することとなつた。寺名は、江戸時代初頭に沖繩に来琉し浄土宗を広めた袋中上人が、当時琉球で住持した寺院名にちなんで「東林寺」と命名した。

## 2 寺院組織と規模

一軒家を賃借し、その一室の約八畳を本堂として使用している。本尊である阿弥陀如来立像は、同じ国内開教使である沖繩市の極楽寺比嘉師（\*『教化研究』十五号参照）から譲り受け、ほか登高座などの仏具も他の寺院

から譲り受けて用いている。所属僧侶は佐藤師のみで、現在のところ檀信徒組織はない。

## 3 宗教活動の特徴

開創されて間もないということもあり、本格的な宗教活動はこれからという状況である。現在は沖繩県内にある他の浄土宗寺院からの依頼により葬儀を行う、また寺院への法要出仕をするという方法で、沖繩の風習や宗教事情について学んでいる最中である。

法話会などの宗教行事もこれから行なつていくという段階であるが、これまで沖繩で知り合った人々に浄土宗の宝曆やカレンダーを無料配布したり、地域の公民館の行事に参加し地域の人々との交流を図るなど、布教のための基盤を作るよう努めている。

## 4 今後の展望

佐藤師の目指すことは、東林寺を人々が集まる念仏道場とし、沖繩の地に法然上人の教えをひろめることであ

る。まずは寺の存在を地域に認知してもらうため、浄土宗との包括関係が認められた際には、地元のエイサーなどを呼び開山法要を開いて、地域に認知されるようにしたいと考えている。

布教活動として、月に一度程度の法話会、除夜の鐘などの行事を開催したいと考えている。しかしながら、沖繩の人々は仏教に馴染みがなく宗教行事だけでは人は集まらないので、イベント性の高い行事を催して人々を集めたいという。たとえば海が近いという立地条件を生かし、海でのイベントを開催するなどである。

布教は、地元の人々を中心としながらも本土からの移住者も対象として行いたいと考えている。そのために、本土から移住してきた人も入りたいと思うような合祀墓を作り、出来るだけ移住者が寺との機縁を持てるようにしたいという。また、沖繩の人々は仏教そのものに対して馴染みが薄いので、お葬式の機会に喪家の人々に数珠をプレゼントするなどし、仏教に馴染みやすいような工夫をしたいと考えている。

また宗教活動以外に社会活動を積極的に行いたいと考えている。自らが母の看護を長い間行っていたという経験を活かして、地域の老人福祉ボランティアに積極的に関わっていききたいという。

佐藤師は、沖繩という地で浄土宗の教えを伝えるということの難しさも認識している。そのため、沖繩での布教は一代ではなしえないと考えており、後の布教者のための「布教の礎」を築きたいと考えている。

\*本文中の寺院名・人名はすべて仮名である。

(名和清隆)

平成  
16  
年度

研  
究  
活  
動  
報  
告

# 総合研究 総合研究プロジェクト 開教 (国内開教・海外開教)

## 国内開教

本年度、国内開教研究では、

### 一、沖繩寺院調査

二、国内開教情報システム(PC)の進化と有効活用について 以上の2つの研究を実施した。

### 一、沖繩寺院調査

## 研究目的

本研究は、近年、仏教寺院の極端に少なかった沖繩において、本格的に開始されたばかりの開教の現状と課題を把握することによって、国内、海外を含めた人口過密地域などの浄土宗未開教地への展開を考えるうえでの示

唆をえるための調査研究である。

## 研究内容

一 昨年度は沖繩における浄土宗寺院、沖繩県仏教会所属の他宗派寺院の調査を行った。今年度は昨年度の研究を継続し、浄土宗関係では、平成十七年度より新たに浄土宗開教寺院となった寺院、包括関係は結んでいないものの盛んに活動している寺院、また他地域でも例を見ない尼僧寺院をはじめ、他宗派寺院に対する調査を行なった。現地調査は平成十六年十二月十九―二十二日、平成十七年三月六―九日の二回にわたり実施した。二回の調査では、それぞれ浄土宗を中心とした寺院に対する聞き取り調査を行うとともに、葬儀社、墓石業者への調査も併せて行い、各寺院が開教において直面している状況を総合

的に把握した。

## 研究会開催

二回の現地調査のほかに、十回の研究会を開催し、基礎的情報の収集を行った。

## 関連報告

以上の浄土宗寺院の活動の詳細に関しては、別稿「研究ノート」に報告した。

二、国内開教情報システム（PCC）の進化と有効活用に向けて

## 研究目的

国内開教情報システムは、具体的には全国各地域での寺院の分布状況（過疎・過密状況）、全国市町村の人口数の推移、今後三十年間の将来人口予測数などを図示し、人口数と寺院数を掛け合わせて偏差値化し、日本国内の各地域の寺院が置かれている状況を明らかにする機能を

備えたシステムである。これらの機能により新たな開教候補地を選定するための情報、および全国各地の寺院の今後の運営方針を考えるための情報を提供してきた。このシステムの進化と有効活用を進めることが研究の目的である。

## 研究内容

今年度は、既存のシステムのさらなる進化と有効活用を目指して、研究会と業者との折衝を重ねた。具体的には、日蓮宗の開教担当者と浄土宗・日蓮宗両宗における国内開教の現状と課題についての情報交換、本宗の国内開教情報システム活用の可能性についての討論を行った。その上で研究員とシステム会社との検討を重ね、既存のシステムに「世帯数データ」を加える形でのバージョンアップを行った。これにより各地の人口数と同時に世帯数を把握することができ、より正確な開教候補地の選定が可能となった。また、世帯構成の情報も加わったことよって、該当地域の世帯の特徴（たとえば六十五

歳以上の一人暮らしが多い地域、三世代の同居家族が多い地域、など)を把握できるようになり、全国各地の寺院が今後「具体的にどのように寺院運営をしていくか」、「具体的にどのような布教を展開していくか」を考えるうえで、の有益な情報を提供できるようになった。

#### 実施研究会

六回実施

### 海外開教

#### 研究目的

海外開教研究は、他教団の海外開教に関する情報収集を行い、本宗の海外開教施策の基礎的研究とすることを目的としている。

#### 研究内容

昨年度、仏教伝統教団を中心とする海外開教担当者を

招聘し、海外開教意見交換会を実施した(平成十六年三月九日)。今年度は、その成果をうけ更に発展させるために、意見交換会に参加しなかった教団、および参加した教団の中でさらなる情報提供を期待する教団の海外開教担当者を招聘し研究会を開催した。

研究会では事前に提示した質問事項に則る形での講義をしてもらい、その後に質疑応答をする形式をとった。主な内容は次の通りであった。

- ・ 現在までの開教施策に関する歴史的経緯
- ・ 開教区の教団組織の規模について(寺院数、開教使(師)の数、メンバーの数)
- ・ 開教区と日本の教団組織との関係
- ・ 信者の入信の動機と宗教的要請
- ・ 開教施策の特徴

#### 研究開催日及び講師参加者

第一回研究会 平成十六年五月一〇日 午後五時半～七時半講師 日蓮宗宗務院伝道局伝道部 国際課長 今

井真行師 参加者 水谷浩志、島恭裕、名和清隆

春近敬（研究スタッフ／大正大学大学院）

第二回研究会 平成十六年六月一〇日 午後二時～四

時 講師 曹洞宗宗務庁 教化部国際課 課長 伊東俊

文責者 主務／専任研究員 武田道生

彦師 参加者 水谷浩志、武田道生、戸松義晴、藤木雅雄、名和清隆

第三回研究会 平成十七年三月一〇日 午後二時半～四

時半 講師 浄土真宗本願寺派 国際部部长 林安明師  
参加者 水谷浩志、戸松義晴、島恭裕

#### 研究スタッフ一覧

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

武田道生（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

戸松義晴（浄土宗総合研究所専任研究員）

水谷浩志（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

名和清隆（浄土宗総合研究所研究助手）

江島尚俊（研究スタッフ／大正大学大学院）

大澤広嗣（研究スタッフ／大正大学大学院）

中村憲司（研究スタッフ／大正大学大学院）

# 総合研究 総合研究プロジェクト

## 仏教福祉

### 研究目的

今日の日本社会は、高齢化の進展や自然環境破壊の危機が叫ばれ、様々な状況の中において、成熟した福祉社会の構築が強く求められている。浄土宗の歴史を見ても、日本文化の形成や日本人の精神生活に多大な影響を及ぼしてきたことは否定できない事実であるし、こと慈善救済や社会事業、福祉活動などの社会実践に常に関わってきた経過がある。本研究においては、まずこれらの歴史を再検証し、研究誌『仏教福祉』を刊行する。

これと並行して、浄土宗内外の福祉事業・活動を調査するためアンケート調査を実施する。

### 作業大綱

浄土宗、時宗、融通念仏宗における社会福祉活動の現

状について、アンケート調査を実施、アンケート結果をデータベース化し分析をおこなった。

#### 1. 浄土宗寺院アンケート調査実施状況

全寺院数 7057

(正住 5655、兼務 1235、代務11、

無住154、その他2)

対象実数 5485

(全寺院数から兼務寺院等及び宛先不明で返送され

た170を引いた数)

返送数 3558

(対象実数比 64.9%、全寺院比 50.4%)

#### 2. アンケート内容をデータシートに転記し、データ

ベース化。



研究開催日及びシンポジウム、検討内容

平成十六年

五月十七日 研究会 浄土宗宗勢調査結果の分析。

七月五日研究会 時宗・融通念仏宗調査打ち合わせ。

九月十三日 研究会 浄土宗アンケート項目の検討。

十一月一日 研究会 浄土宗アンケート項目の検討、

シンポジウム打ち合わせ

十一月二十二日 公開シンポジウム

「仏教教団の社会福祉活動の現状と課題

― 宗団としての取り組みとその理念 ―

パネラー

山口幸照氏 (高野山大学・真言宗)

石川到覚氏 (大正大学・浄土宗)

佐賀枝夏文氏 (大谷大学・真宗大谷派)

清水海隆氏 (立正大学・日蓮宗)

コーディネーター

長谷川匡俊 (研究代表・浄土宗総合研究所客員教授)

十二月六日 研究会 アンケート進捗状況報告

平成十七年

二月七日、二月二十五日 アンケート集計作業

研究スタッフ一覧

長谷川匡俊 (研究代表 / 浄土宗総合研究所客員教授)

坂上雅翁 (主務 / 浄土宗総合研究所研究員)

福西賢兆 (浄土宗総合研究所主任研究員)

曾根宣雄 (浄土宗総合研究所研究員)

上田千年 (浄土宗総合研究所研究員)

曾田俊宏 (浄土宗総合研究所研究員)

鷲見宗信 (研究スタッフ)

藤森雄介 (研究スタッフ)

関 徳子 (研究スタッフ)

野田隆生 (研究スタッフ)

文責者 主務 / 研究員 坂上雅翁

# 総合研究 総合研究プロジェクト

## 生命倫理

### 研究目的

平成四年九月に浄土宗総合研究所が作成した「脳死・臓器移植問題に対する答申」において指摘されているように、科学技術の発展は生命倫理を問いただす様々な課題を提示している。特に昨今の生殖医療や再生医療分野での技術革新は急速に進展しており、宗教界に対しても適用の可否についての倫理的な面からの見解が求められている。

生命倫理とは生命そのものの意味を問いかけるものである。脳死問題においては生命の終わりをどの様に見えるかが焦点であったが、近年これに加えて生命の始まりを人為的に操作する技術が進展し生命操作の範囲が広がって来た。つまり、生命に対する人為的な関与がどこまで許されるのかといった新しい倫理問題が出現する

に至った。これが生命倫理である。本調査研究の目的は、この生命倫理の分野において注目される諸問題を抽出し、これらの問題に対して浄土教団としての考え方の方向性を明らかにすることである。

### 研究内容

- (1) 生命倫理に関する諸問題の抽出
- (2) 生殖医療や再生医療分野での技術革新の把握
- (3) 国内公的諸機関での生命倫理問題に関する調査研究状況の把握
- (4) 国内他教団、他宗派における生命倫理問題に関する動向の把握
- (5) 海外における生命倫理問題に関する動向の把握
- (6) 宗学、仏教学、宗教学からの生命倫理問題へのア

ブローチ

(7) 浄土教団としての見解

平成十六年度は情報収集が主たる目標であり、各自担当分野の研究成果を概ね一月に一回の研究会を開催し、研究方向や討議を行った。

研究会実施日及び検討内容

第一回研究会 平成十六年五月十日開催。平成十六年度研究計画および研究担当を検討した。

第二回研究会 平成十六年五月三十一日開催。今岡研究員担当の「関連する科学技術動向の把握」の報告及び質疑が行われた。

第三回研究会 平成十六年六月二十四日開催。武田研究員担当の「他教団、他宗派の動向把握」として曹洞宗総合研究センター専任研究員竹内弘道師から曹洞宗における脳死の考え方について報告が行われた（講演録有り）。

第四回研究会 平成十六年七月二十四日開催。坂上（雅）研究員担当の「政府・公的機関の動向把握」の報告および

び質疑が行われた。

第五回研究会 平成十六年八月三十日開催。戸松研究員担当の「海外の動向」としてカトリック中央協議会の資料を中心に、キリスト教における生命倫理の取り組みについての見解、社会活動等に関する報告が行われた。

第六回研究会 平成十六年十月四日開催。福西研究員担当で自然科学研究機構基礎生物学研究所長勝木元也氏より総合科学技術会議生命倫理専門調査会の動向についてお話を伺った。（講演録有り）。

第七回研究会 平成十六年十一月一日開催。今岡研究員担当から宗教倫理学会や中外日報での浄土系教団の生命倫理に対する見解、米国大統領選挙に関連して生命倫理の諸問題が政治化していることなど最近の動向が報告された。

第八回研究会 平成十六年十二月六日開催。平成十七年度研究計画、研究予算について検討を行った。この中で平成十七年度には当該テーマで公開シンポジウムを開催し、その成果を冊子とすることが合意された。今後の研

究会の方向性については、生命倫理の諸問題について浄土宗として発言することの意味、その場合に検討すべき要件について検討を行った。

第九回研究会 平成十七年十二月二十日開催。水谷浩志研究員から、海外の宗教団体の生命倫理問題に関する主張を調査する前提としての、海外における主要国政府の政策動向（特にクローン技術とヒトES細胞の問題）についての概略報告が行われた。今後の海外動向に関しては、戸松研究員にキリスト教に関する報告を、水谷研究員はイスラム、その他の宗教を中心に報告するとの提案があった。

第十回研究会 平成十七年一月二十日開催。大正大学名誉教授の藤井正雄氏を講師に招き、総合研究所が提示した生命倫理の諸問題に関する質問事項に沿うかたちで、生命倫理研究の現状とあり方についてお話をいただいた（講演録有り）。

第十一回研究会 平成十七年二月二十一日開催。生命倫理関連活動（1）浄土宗総合研究所の研究計画

（2）浄土宗総合学術大会（3）教団付置研究所懇話会生命倫理・研究部会等について今後の研究方向についての打ち合わせを行った。また関連学会活動の状況、他宗派の活動状況についての報告が行われた。

第十二回研究会 平成十七年三月二十八日開催。平成十七年度の活動方向の検討及び教団付置研究所懇話会第一回生命倫理・研究部会での発表内容について検討を行った。

#### 研究スタッフ一覧

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

今岡達雄（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

武田道生（浄土宗総合研究所専任研究員）

戸松義晴（浄土宗総合研究所専任研究員）

袖山榮輝（浄土宗総合研究所専任研究員）

坂上雅翁（浄土宗総合研究所研究員）

林田康順（浄土宗総合研究所研究員）

水谷浩志（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

文責者 主務／専任研究員 今岡達雄

# 総合研究 総合研究プロジェクト 葬祭仏教

## 研究目的

葬祭仏教研究班は、静岡教区の寺院檀信徒を対象に「お葬式に関するアンケート調査」を実施した。平成一三年度では静岡教区全寺院の住職に対して、葬送儀礼の現状に関するアンケート調査を行ない、昨年度では同教区の都市部・農村部・漁村部のそれぞれ所在する六カ寺の寺院に対し、葬送習俗及び葬送儀礼についての現地聞き取り調査を行なってきた。同じ教区内でも地域によってさまざまな葬送習俗があり、また変化の形態も異なるため、葬儀の実態を全体的に捉えることは難しい。この調査で得た各々の事例と葬送習俗の変遷から、各々の葬儀観の変容を考察する上での貴重な研究となった。

近年、散骨・家族葬など、葬儀に関する実態・意識が著しく変化している。そのためにはアンケート調査を

実施し、檀信徒の葬儀に関する意識の変化を把握することが重要である。今回のアンケート調査の目的は、葬儀に関する意識調査として、その骨格をなしている葬儀の実態・葬儀の意義・戒名の意義・他界観・靈魂観・先祖観の項目を入れて問うものである。このアンケート調査によって、現実に行なわれている新しい葬制・墓制に対応しての対応を考え、浄土宗の法式・教学に対応した新しい葬祭のあり方を探求することも研究目的のひとつとなっている。

## 作業大綱

当研究班より出版した『葬祭仏教 その歴史と課題』（一九九七年刊行）の「アンケート調査原票」をもとに、

静岡教区の現地調査報告等を踏まえて新たに調査票を作

成した。

平成一六年七月、静岡教区の正住職寺院・一二四箇寺にアンケート用紙（調査票）を一〇票づつ郵送し、各寺院住職に対して、平成元年以降に葬儀を行なった檀信徒一〇名にアンケート用紙の配布するようお願いをした。回収方法は、アンケート回答者が浄土宗総合研究所に直接郵送していただく方法をとった。回収した調査票は、入力フォーマットを作成して回答結果を入力した。その後、回答票が有効無効であるかという回答項目の検討を行い、回答の分析（他の質問項目とのクロス分析を含む）を行った。

御協力いただいた静岡教区の寺院住職・副住職、並びに檀信徒の方々にここで御礼申し上げます。次年度は、一地域ではなく、全国規模で調査を行なう予定です。

アンケート回収数・有効回答数

配布数 一二四〇数

回収数 四四三票 回収率 三・五・六%

有効回答数 四〇二票 無効票 四一票

研究会

アンケート調査票作成

四月・二回、五月・三回、六月・二回、七月・四回。

結果入力

月より十一月の間随時

回答結果検討

九月・一回、十一月・二回、一月・一回、二月・二回。

結果分析

三月・三回。

研究スタッフ一覧

伊藤唯真（浄土宗総合研究所客員教授）

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

西城宗隆（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

大蔵健司（浄土宗総合研究所専任研究員）

武田道生（浄土宗総合研究所専任研究員）

名和清隆（浄土宗総合研究所研究助手）

島 恭裕（浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員）

佐藤良文（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

熊井康雄（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

細田芳光（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

鷲見定信（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

文責者 主務／専任研究員 西城宗隆



# 総合研究 総合研究プロジェクト 国際対応

## 研究目的

国際対応プロジェクトは「浄土宗21世紀劈頭宣言」にある「世界に共生を」の教えを実現するため、法然上人の教えのもとで世界平和に寄与する国際交流を行うことを目的としている。また研究者との交流・意見交換をすることによって国際的視点から法然浄土教を問い直し、浄土宗の聖典を浄土宗教義に基づいて翻訳し、編集委員会にて検討・確認作業を行っている。具体的には、海外開教における布教資料のための法然上人ご法語の英訳、信者を対象とした英訳書の浄土宗 (Jodo Shu Press) からの出版物などを通じて法然浄土教を世界に広く知らしめ、また同時に、学者を対象とした聖典の英訳も研究所のホームページに掲載し、一般信者と研究者の両方のレベルから世界に向けて法然上人の教えを発信し、世界に

開かれた浄土教を目指している。

## 研究内容

平成十六年度の研究内容は以下のとおりである。

- (1) 浄土宗の聖典の英訳作業
- (2) 海外の仏教研究者の受け入れ
- (3) 国際学会への参加
- (4) 外国の一般読者向けの英訳本の作成・編集
- (5) 英語版ホームページの運営
- (6) 聖典英訳編集及び国際交流に関する研究会

(1)の聖典英訳作業では、担当者を定めて英訳した上で、田丸徳善先生を中心とする研究スタッフの先生方が参加する英訳聖典編集研究会で検討を積み重ねている。

そして年度内に英訳をした各聖典と担当者は以下のとおりである。

①『無量寿経』巻上

担当：Karen Mack

②『和語燈録』『浄土宗略抄』

担当：戸松義晴、Mark Blum

③同「念仏大意」

担当：戸松義晴、Mark Blum

④『観経疏』

担当：Mark Blum

協力：袖山栄輝、柴田泰山

(2) 海外の仏教研究者の受け入れは、海外の仏教研究者の人脈の発掘などを目的の一つとしているが、平成十六年度は主に海外の仏教団体の方々に海外の現状や活動状況を報告していただいた。

① Dharmachari Lokanitra 氏・Dharmachari

Maitreynath 氏・Mangesh Dahiwalé 氏

日時：平成十六年十月八日

団体：Jambudvipa Trust (インド)

テーマ：インドの新仏教について

なお、Jambudvipa Trust はインドの不可触民の解放運動を指導していたアンベードカル博士の意志を継いだ活動をしている団体である。

② Dharmavidya David Brazier 氏

日時：平成十七年一月三十日

団体：Amida Order & Trust (イギリス)

テーマ：悲劇的な苦悩に直面した人々への仏の教えによる援助について。

なお、Amida Order & Trust で指導的立場にある Brazier 氏は精神療法士としても活動している。

③ Clyde Whitworth 氏

日時：平成十七年三月二十八日

団体：Project Dana (米国ハワイ州)

テーマ：アメリカにおける仏教の現状について

なお、Project Dana はハワイで仏教精神にもとづく老人福祉活動をしている団体である。

また、受け入れ形態や目的は異なるが、本年度も欧米における法然浄土教研究の第一人者であるニューヨーク州立大学アルバニー校東洋学科教授の Mark Blum 氏を六月初旬から七月初旬にかけての約一ヶ月間と、平成十七年一月中と三月中の二回にわたってそれぞれ数日ずつ研究所に招聘した。そして戸松義晴とともに『和語燈録』と『観経疏』の英訳作業に従事した。なお、一回目の来日時に「浄土宗略抄」の、二回目に『観経疏』の、三回目に「念仏大意」の英訳作業を行った。

(3) の国際学会への参加に関しては以下のとおりである。

① The Issei Buddhism Conference

日時：平成十六年九月三日～五日

会場：University of California, Irvine

(カリフォルニア州アーヴァイン)

テーマ：Pioneer Buddhists and the Establishment of Buddhist Temples

「先駆的仏教徒と仏教寺院の設立」

この学会は日本人の海外移民、特にハワイ・北米・南米の日系一世の移民が、自分たちで設立した寺院を中心にどのような信仰生活を送ったのか、また人々の日常生活の中で寺院はどのような役割を担っていたのかを研究することを目的とする。さらに太平洋戦争時の日系移民の強制収容所収監・財産没収などが二世・三世、しいては現在の開教寺院にどのような影響を与えたかを議論し、その成果を開教の施策に生かすことを目的としている。なお、この学会には戸松義晴、Jonathan Watts、ならびに浄土宗総合研究所嘱託研究員の鷲見定信氏が参加した。

② International Association for the History of Religions (IAHR)

(第十九回国際宗教学宗教史会議世界大会)

日時：平成十七年三月二十四日～三十日

会場：高輪プリンスホテル

テーマ：Religion: Conflict and Peace

「宗教―相克と平和」

世界中の宗教学者たちが参加する最大規模の学会であるIAHRに参加することによって、浄土宗や総合研究所の、Socially Engaged Buddhism への取り組み方を考える契機となった。そして Japanese Engaged Buddhism のパネルに、戸松義晴、Jonathan Watts がパネリストとして出席して、日本における仏教の社会参加・NGO 活動の歴史・現状・問題点について発表し、また議論をした。

(4) 外国の一般読者向けの英訳本の作成・編集としては、平成十五年度に引き続き、Harper Havelock Coates と石塚竜学とが翻訳した英語版の四十八巻伝『Honen : the Buddhist Saint』の再編集作業を行なった。

外国の一般読者が読みやすいように、構成を再編成し、『法然上人行状絵図』の写真を多く取り入れて、

『Traversing the Pure Land Path』という書名で浄土宗 (Jodo Shu Press) から出版するための作業を行った。

この作業には Jonathan Watts と戸松義晴が中心となって取り組んでいる。

(5) 英語版ホームページの運営であるが、平成15年度までは「英語によるホームページ運営」という独立した研究プロジェクトであったが、平成十六年度より国際対応プロジェクトの活動に組み込まれている。

年度内の活動としては、ホームページ上では更新した部分はなかったものの、Honen Shonin や Pure Land Buddhism などの項目で新たな情報を加えるべく、その内容の作成・検討作業に従事した。法然上人の生涯や教え、浄土教の相承などについて、新たな項目を作って平成十七年度中に紹介する予定である。

なお、この作業には Jonathan Watts と戸松義晴が中心となって取り組んでいる。

最後に(6)の聖典英訳編集及び国際交流に関する研究会を平成十六年度は二十二回行なった。研究会で扱った検討内容と開催日については次項に列挙する。

#### 研究開催日および検討内容

平成十六年

四月五日 平成十六年度研究計画の確認

四月十九日 『阿弥陀経』英訳の研究と検討

四月二十六日 『阿弥陀経』英訳の研究と検討

Dharma Book 『四十八巻伝』の英文検討

五月十七日 『阿弥陀経』英訳の最終確認

Dharma Book 『四十八巻伝』の英文検討

五月三十一日 Dharma Book 『四十八巻伝』の英文

検討 『和語燈録』「念仏往生要義抄」英訳検討

六月十六日 『和語燈録』「念仏往生要義抄」英訳検討

六月二十八日 『和語燈録』「念仏往生要義抄」英訳検討

七月十二日 Dharma Book 『四十八巻伝』の英文検討

七月二十六日 Dharma Book 『四十八巻伝』の英文

#### 検討

八月四日 Dharma Book 『四十八巻伝』の英文検討

九月十四日 Dharma Book 『四十八巻伝』の英文検討

九月二十七日 『無量寿経』巻上の英文検討

十月二十七日 Dharma Book 『四十八巻伝』英文の

最終稿検討 『無量寿経』巻上の英文検討

十一月八日 『無量寿経』巻上の英文検討

十一月二十四日 『無量寿経』巻上の英文検討

十二月六日 『無量寿経』巻上の英文検討

十二月十三日 『無量寿経』巻上の英文検討

平成十七年

一月十一日 『無量寿経』巻上の英文検討

一月二十四日 『無量寿経』巻上の英文検討

二月七日 『無量寿経』巻上の英文検討

二月二十一日 『無量寿経』巻上の英文検討

三月十七日 『無量寿経』巻上の英文検討

また、Mark Blum 氏を招聘しての集中研究会開催日

は以下のとおりである。

平成十六年

六月三日～七月九日 『和語燈録』『浄土宗略抄』の英訳

平成十七年

一月十日～一月十四日 『観経疏』の英訳

三月二十三日～三月二十五日 『和語燈録』『念仏大意』

の英訳

以上が平成十六年度の「国際交流」研究班の活動概要であるが、平成十七年度に継続しているプロジェクトも多くあり、この報告をご一読いただいた方々のご意見、ご指導をいただいた上で、より良い成果を出せるように努力していく所存である。

#### 関連報告

また上記の活動報告とは別に、平成十五年度に英訳した『阿弥陀経』が今号の研究ノートに掲載してあるので、ご覧いただければ幸甚である。

#### 研究スタッフ一覧

田丸徳善（研究代表／浄土宗総合研究所客員教授）

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

戸松義晴（研究主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

生野善応（研究スタッフ）

岩田斎肇（研究スタッフ）

小林正道（研究スタッフ）

佐藤堅正（研究スタッフ）

佐藤良純（研究スタッフ）

袖山榮真（研究スタッフ）

服部正穂（研究スタッフ）

藤木雅雄（研究スタッフ）

松涛弘道（研究スタッフ）

松涛誠達（研究スタッフ）

Karen Mack（研究スタッフ）

Mark Blum（研究スタッフ）

水谷浩志（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

島 恭裕（浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員）

Jonathan Watts (浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員)

(敬称略、五十音・アルファベット順)

文責者 主務／専任研究員 戸松義晴

# 基礎研究 教学的関連プロジェクト

## 浄土教比較論

### 研究目的

本研究班では、「日本浄土教のなかにおける浄土宗」という視点より、現在の浄土各宗各派を代表する諸先生をお迎えし、それぞれの宗派の特色について意見交換を行ない、それぞれの宗派の特色及び独自性を確認し、またそこから自宗派の様々な面における発展に何らかの力になれることを目指し、浄土各宗各派間における情報収集を研究会において行なっている。

### 研究内容

浄土宗の先生の他、浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・

真宗高田派・西山浄土宗・浄土宗西山禅林寺派・時宗のそれぞれの先生より、約一時間半の御講義を頂き、これまでの先学による研究成果から、現在の研究状況等にい

たるまで、それぞれの諸先生方のご意見等を参考に、現在における研究の状況について情報交換を行なつて来た。その内容も特に仏身論・実践論・諸行論・本尊論などのテーマを念頭においてご発表を頂いている。さらにその後、質疑応答の時間を設け、それぞれの宗派による捉え方の違い等の比較検討を行い、各宗派の特色を浮き彫りにしていく一方で、法然浄土教がその後どのような経緯で今日の状態にまで変遷していったのかを検討するようにしている。

### これまでの経緯

平成十四年に総研叢書『法然上人とその門流―聖光・証空・親鸞・一遍―』を上梓し、報告を行なつた。その後、ご執筆頂いた諸先生を中心に、ご発表頂き、さらに検



討を行なってきた。本年度は浄土宗・真宗大谷派・浄土宗西山深草派・時宗の諸先生を中心に、ご発表頂き、研究をかさねた。

#### 研究会開催日および検討内容

平成十六年五月十九日・長島尚道「一遍上人の賦算」

(第七回)

平成十六年七月二日・郡嶋昭示「聖光『浄土宗要集』に

おける西山批判」(第八回)

平成十六年十一月十九日・田代俊孝「親鸞聖人の三経理

解について」(第九回)

平成十七年一月十八日・柴田泰山「善導『観経疏』研究

から見た鎌倉浄土教」(第十回)

平成十七年三月七日・吉良潤「『選択集』の編集過程に

ついて」(第十一回)

#### 研究スタッフ一覧

梶村昇(浄土宗／研究代表)

福西賢兆(浄土宗総合研究所主任研究員)

柴田泰山(主務／浄土宗総合研究所研究員)

林田康順(浄土宗総合研究所研究員)

和田典善(浄土宗総合研究所研究員)

郡嶋昭示(浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員)

#### 講師一覧

浅井成海(浄土真宗本願寺派)

安達俊英(浄土宗)

大塚靈雲(浄土宗西山禅林寺派)

栗原広海(真宗高田派)

田代俊孝(真宗大谷派)

長島尚道(時宗)

中西随功(西山浄土宗)

廣川堯敏(浄土宗)

湯谷祐義(浄土宗西山深草派)

文責者 主務／研究員 柴田泰山

# 基礎研究 法式的関連プロジェクト 法事讃研究

## 研究目的

本研究は、平成十六、十七年の二年間にわたり、善導大師「法事讃」について、教学、法式両面からアプローチし、現在、知恩院、増上寺において修せられている「法事讃法要」を比較検討するものである。

## 研究内容

伝承儀礼研究班の研究項目は以下の三点であるが、十六年度は①と②の研究会が催された。

①現在、知恩院、増上寺で修せられている「法事讃」の法要を収録する。

②教学面から考察した「法事讃」と現在、法要として修せられている「法事讃」の比較検討。

③収録したビデオを検討し、法式・教学両面からアプ

ローチした「法事讃」を提案する。

さらに、公開講座を視野に入れ、研究成果を東京・京都において発表する。

## 研究開催日および検討内容

第一回 平成十六年五月二十一日

この研究会では、柴田研究員に、善導大師「法事讃」の概要を講義していただいた。現在、増上寺では、「法事讃」の法要は、毎年四月に行われる御忌においてのみ勤められている。また、知恩院では、三月の善導忌を六月に移し、そこで勤められている。

特に増上寺では、法要自体の時間があらかじめ一時間程度に制約されているため、極略化されているのが現状である。

柴田研究員の講義内容は以下である。

- ① 「法事讃」の成立
- ② 「法事讃」の全体像
- ③ 「法事讃」の内容
- ④ 「法事讃」と「選択集」

研究会に出席したスタッフは、御忌で勤められる儀式化された「法事讃」法要と比較して、量的にも内容的にもその違いに一同非常に驚かされた。

柴田研究員の講義の中で、筆者が注目した箇所を抽出してみた。

善導はいつ、どこで「法事讃」を作成したのであるうか。現在の研究ではこのことはまったく解明されておらず、また巻上と巻下とが同時に成立したものが否かなのかさえ明らかとは言いがたい。——中略——

善導の著作全体から「法事讃」を見ると、「法事讃」は部分的ながら「往生礼讃」・「般舟讃」との使用語句及び内容的にも一致が見受けられ、善導の著作活動において中期から後期にかけての述作ではないか

と考える。

さらに柴田研究員の「法事讃の全体像」の中から、法式面などから注目すべき箇所を何箇所か挙げることにする。

まず、法事讃上巻の題号は「転経行道願往生浄土法事讃」、下巻は「安楽行堂転経願往生浄土法事讃」とある。法事讃法要においては、法要の開始に上巻の題号を唱え、法要の結びに下巻の題号を唱えている。

また、在家者を下座、出家者を上座に位置させ、「讃文」において上座、下座が交互に問答を繰り返すようになってい

る。現在、知恩院、増上寺において、勤められている法要でも同様の形態がとられている。但し、法要に在家者が出仕することはなく、すべて、僧侶が出仕している。

例えば、「召請の為の讃文」においては、

(上座) 般舟三昧楽 (下座) 願往生

(上座) 大衆、同心に三界を厭え。 (下座) 無量衆

のように、さらに、「願往生讃文」では、「下座、高を接

して讀じて、「云へ」と文題にあり、讀文が連続する。

また、上巻においては、行道の方法についても、記されており、十三番目の讀文の後に、「行道七偏すべし」とし、「行道に際する讀梵の偈文」中に散華行道を行うようにしている。この様式は、周回数こそ異なるが、知恩院、増上寺で勤められる法要に踏襲されている。

さらに、現在、修せられている法要では削除されているが、柴田研究員は、上巻の「地獄の描写」を特徴として指摘している。すなわち、上巻最後部分において、

「地獄經」（觀仏三昧海經）の引用があり、地獄を克明に描写している。儀式面からではなく、内容構成の面から見ると、地獄の描写から懺悔を繰り返しながら、また、地獄と浄土を対比しながら人々の願往生心を固めようとしたと推測される。

下巻は、「阿弥陀經」を十七段に分け、各引用文の後に讀文をつけている。柴田研究員は、「經典・讀文のセツト構成並びに經典読誦と行道を組み合わせた構成は善導が創出した儀礼であろう」と述べている。

さらに、この研究会で、柴田研究員は、「法事讚と選択集」まで言及し、法然が「法事讚」をどのようにとらえていたかを述べているが、このことについては、明年の発表に譲りたい。

## 第二回研究会 六月十日

福西主任、坂上、西城研究員が、知恩院に出張し、式衆会が勤める「法事讚」法要を取材した。本来、善導忌は三月であるが、祖山の行事等の事情により、六月上旬に勤められている。左右脇導師、左右召請人の諸役は、増上寺と同じであるが、内容は、故石田典正法儀司が編纂された経本をほぼ、忠実に再現していた。したがって、法要の時間は、正味一時間を越えるものとなっていた。

筆者の受けた印象は、祖山の「法事讚」は、経本に対して忠実であるが、縁山の「法事讚」は、御忌中の儀式として、多分に演出効果が高い法要になっている。例えば、召請の為の讀文では、祖山は、節がなく、音の高低のみだが、縁山は、故津田徳翁法儀司のお作りになった

独特の節で称えられている。

明年度の研究については、縁山の法事讃法要は、すでに御忌大会中に勤められている為、ビデオもすでにあり、記録として残っている。祖山の法要については、あらためて、平成十七年度の善導忌において、専門の業者に依頼して、一座の法要全部を記録することになっている。その上で、研究会を招集し、総合研究所として、新たな「法事讃」を発表する予定である。また、教学面からアプローチした講演と、研究所の発表した「法事讃」を実際に勤める法要をドッキングさせた公開講座を開催し、研究所独自の視点に立った「法事讃」研究を提案する。

#### 研究スタッフ一覧

福西賢兆（研究代表／浄土宗総合研究所主任研究員）

坂上典翁（研究主務／浄土宗総合研究所研究員）

西城宗隆（浄土宗総合研究所専任研究員）

柴田泰山（浄土宗総合研究所研究員）

熊井康雄（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

清水秀浩（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

田中勝道（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

広本栄康（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

山本晴雄（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

文責者 主務／研究員 坂上典翁

# 基礎研究 布教的関連プロジェクト 現代布教資料研究

## 研究目的

当研究班では各種布教活動に役立つ資料をジャンル別に収集し、現代にマッチした活用方法を研究することを目的とする。その目的にそって三部門の研究テーマを定め、それぞれ担当の研究員が中心となり研究を進めている。

## 研究内容

- ①和歌・道詠の収集・整理とその活用方法について  
和歌・道詠を中心にした資料集作成を目標とする。（布教の現場で使えるもの。詩、川柳なども参考にする）
- ②イラスト・漫画・ビデオ等、視覚的布教資料の収集・検討、およびパネルシアター・プロジェクト等を使用した新しい布教方法の模索。

- ③一般書籍の布教利用と、その利用方法について

布教資料収集（各宗派信者向け発行者、一般書籍）。

各宗発行物の比較検討。法話、布教に使える本（絵本、童話など）リスト作成を検討

これまでの経緯

①については佐藤研究員が担当し、具体的な方向として五重相伝の「勸誡録」の中に活用される和歌・道詠を中心に収集・整理をすすめている。

\* 『白道を歩む』（総本山知恩院布教師会 昭和五十四年四月一日）

\* 『五重勸誡』（藤堂俊章師 昭和六十一年一月二十五日）

\* 『撰取の風光』（総本山知恩院布教道場・二記会 平成七年六月十六日）

\* 『ひとすじの道』（羽田恵三師 平成九年一月一日）

\* 『歓喜の音』（民谷隆誠師 平成十一年五月二十八日）

作業にあたり五重勸誠資料の一覧を作成した。資料検討にあたり、西城宗隆研究員に多大なご協力をいただいた。なお、大半が現在絶版となっており、入手は困難である。（研究ノート：別表1参照）一八〇頁

また、浄土宗学術大会において下記の通り、研究発表を行った。

■平成十六年九月八日～九日（仏教大学）

講題「和歌・道詠の研究」―月影のうたについて―

浄土宗総合研究所専任研究員 佐藤 晴輝

さらに、後藤研究員とともに千葉教区布教師会研修会に参加し講義を聴講した。

■平成十六年十二月十日（木更津・正行寺）

講題「法話の心得―法然上人のお歌を活かして―」

講師 慶野 匡文師 神奈川教区教化団副団長（光雲寺）

②については後藤研究員が担当し、既成仏教教団における布教資料より漫画・ビデオ等、視覚的効果の高い資料

および、著作権フリーの仏教イラスト集などを収集、その内容を検討した。（研究ノート：別表2参照）一八一頁

また新しい布教方法として、パネルシアターやプロジェクター等を使用した法話を模索中である。その一環として浄土宗教師でありパネルシアター考案者として知られる古宇田亮順師にご教示をいただき、今年度は『観無量寿経』をモチーフにした「パネル法話・王舎城の悲劇（原作・柴田泰山研究員）」を作成、下記の公開講座にて発表をした。

■平成十六年九月二十七日（月）午後二時～四時

講 題…「パネルシアターを活用した布教の研究」

講 師…古宇田 亮順師

（実演『くもの糸』『二河白道』その他）

…武智 公英師（実演『明日があるさ』その他）

…後藤 眞法研究員

（実演『パネル法話・王舎城の悲劇』）

会 場…大本山増上寺「三縁ホール」

参加人数…六十六名

また、パネルシアター、プロジェクト布教の調査目的で下記を取材した。

■平成十六年七月二十三日(金) 日本仏教保育協会「夏期保育講習会」

会場…大本山増上寺「三縁ホール」

内容…古宇田亮順師「小さなパネルで大きな夢を！」

— 仏教説話と共に —

■平成十六年七月三十日(金)「フェスタ デ テンプル 2004」

会場…総本山知恩院・お寺コーナー

内容…つきかげ堂・レトロ紙芝居(『木魚の秘密』、『法蔵菩薩の物語』) 神田真晃師・バーチャル紙芝居

■平成十六年八月一日(日)「フェスタ デ テンプル 2004」

会場…大本山増上寺・お寺コーナー

内容…でんでん虫・パネルシアター(ビデオ撮影)

また来年度は、ひきつづき『無量寿経』をモチーフとしたパネル法話の検討・作成を予定している。その目的の

ために、関西方面で新しい教化活動を展開されている団体「つきかげ堂」の事務局長、笹脇昌恵師に協力を頂戴する。

③については宮入研究助手が担当し、各宗派の一般信者向け発行物及び一般書籍を布教資料として収集した。(研究ノート…別表2参照) 一八一頁

絵本については、近年、「いのち」や「死」といったテーマを扱うものが、子ども達への「デス・エデュケーション(死の授業)」等に利用されている。また、大人にも深い影響を与えうる媒体として注目されている現状を調査し、法話への利用を検討している。

下記の日程にて、布教資料の収集検討を行った。

■平成十六年五月二十八日(水) 各宗本山・宗務所にて布教資料収集

訪問地…真言宗智山派、真言宗豊山派、高野山真言宗、

曹洞宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派

■平成十六年六月十日(木) 上野国際子ども図書館にて



児童書（絵本）の調査

■平成十六年十月十四日（木）池上本門寺にて布教資料

の収集

■平成十七年一月二十九・三十日（土・日）ブックドクター「朗

天狗」主催にここにこの会参加

講演者：筑紫哲也氏、矢崎泰久氏、中山千夏氏、長谷

川義史氏

来年度は、収集検討した資料をもとにリストを作成す

る（利用しやすいようテーマ別に分類）。また、絵本の

利用法として、読み聞かせやブックトーク、ストーリー

リング等の活動について検討する。

研究会等開催記録

平成十六年

四月十二日（月）年間スケジュール検討

四月二十三日（金）和歌・道詠の収集・整理／パネル

シアター／布教資料収集

五月七日（金）和歌・道詠の収集・整理／パネルシア

ター／各宗出版物検討

五月二十六日（水）各宗布教資料の収集

五月二十八日（金）和歌・道詠の収集・整理／視覚的

布教資料・書籍の収集

六月四日（金）公開講座企画立案／視覚的布教資料・

書籍の収集

六月十日（木）一般書籍の布教利用について

六月十八日（金）公開講座について

六月二十五日（金）公開講座について／視覚的布教資

料・書籍の収集と整理検討

七月二日（金）各研究進行状況確認／学術大会につい

て（和歌・道詠の研究）

七月九日（金）公開講座について

七月二十三日（金）公開講座について／日仏保夏期講

習会取材（パネルシアター）／

布教資料収集とその利用法

七月三十日（金）総本山知恩院「フェスタ デ テン

ブル2004」お寺コーナー取材／

布教資料の収集

理／一般書籍の布教利用

八月一日(日) 大本山増上寺「フェスタ デ テンプ

ル2004」お寺コーナー取材

八月六日(金) 公開講座について／布教資料整理／和

歌について

八月二十日(金) 公開講座について

九月十日(金) 公開講座について

九月十七日(金) 公開講座について／和歌・道詠の収

集・整理

九月二十四日(金) 公開講座について

九月二十八日(火) 公開講座について

十月十四日(木) 布教資料の収集

十月十五日(金) 和歌、道詠の研究／布教資料の収集

と検討

十月二十二日(金) 視覚的布教資料の研究／和歌・道

詠の研究／一般書籍の布教利用

十一月十九日(金) 和歌「月かげ」のおうた)につ

いて／視覚的布教資料の収集と整

十二月三日(金) 布教書籍の収集と検討

十二月十日(金) 千葉教区布教師会研修会参加

十二月十七日(金) 各種布教資料の検討

平成十七年

一月二十八日(金) パネルシアター『無量寿経』作成

／各種布教資料の検討

一月十五日(土) 仏教文化研究講座「仏教芸能の世界」

聴講

一月二十九・三十日(土・日) 一般書籍の布教利用につ

いて(ブックドクター「朗天狗」

主催会聴講)

二月四日(金) パネルシアター『無量寿経』作成

二月十九日(土) 仏教文化研究講座「仏教芸能の世界」

聴講

二月二十五日(金) 和歌・道詠の収集・整理と活用方法

三月四日(金) 和歌・道詠の収集・整理と活用方法／

パネルシアターを活用した布教法

三月五日（土） 仏教文化研究講座「仏教芸能の世界」

聴講

三月十一日（金） パネルシアター（花まつり）の検

同 所内勉強会「和歌・道詠を布教に活かして」

講師…八木季生客員教授

研究班メンバー

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

佐藤晴輝（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

後藤真法（浄土宗総合研究所研究員）

郡嶋昭示（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

正村瑛明（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

宮入良光（浄土宗総合研究所研究助手）

八木英哉（研究スタッフ）

文責者 主務／専任研究員 佐藤晴輝

## 特別業務 特別

## 浄土宗善本叢書

### 研究目的

前回の『教化研究』報告で述べたように、浄土宗には良質の資料が少ないといわれる。確かに天台宗や真言宗と比べると多少とも見劣りすることはあろう。しかしそれは網羅的な調査をしないまま、漠然とそう思ってしまうっている面もある。丹念に調査してゆけば、浄土宗にも貴重な史料が結講残つてることが判明してくるのではなかろうか。本班では、そのような状況をかんがみながら、浄土宗の重要典籍を写真版で公開出版していくことを目的としている。

問題はなにを出版していくかである。なんの方針もななくただ古い写本類を並べて出版しても意味はない。一定の方針のもとに編集し、まとまりあるものとしなければならぬ。いろいろと思索した結果、これも前回述べた

とおり、『黒谷上人語灯録』の写本集成を刊行していくこととなった。

法然上人の有力な語録集である『黒谷上人語灯録』は、あらためて言うまでもなく、法然上人の思想研究の一次資料である。元亨版『和語灯録』については、龍谷大学善本叢書として写真公開されているが、それ以外の『漢語灯録』、『和語灯録』の写本は、これまで一部を除き公開されていない。そこで各所に所蔵される写本を調査撮影し、叢書としてまとめた形で出版していくことには大きな意義があると思われる。

### 研究内容

平成十五年度は千葉県市川市善照寺に所蔵される古本『漢語灯録』を調査・撮影を完了した。そして平成十六

年度は、総本山知恩院に所蔵される『円光大師語灯録』の調査・撮影を実施した。この史料について少し説明しておく。

江戸時代に浄土宗で流布した『黒谷上人語灯録』は、義山が宝永・正徳年間に刊行したものであり、その活字本は『浄土宗全書』九巻に収録されている。本書の跋文等から知られるところでは、義山は知恩院白誓至心秀道の指示によって、写本を収集し本文を校訂して刊行している。その校訂のあり方は結果としてみると、転写されてきた本文をただしていくというのみにとどまらず、語句の修辭や補足、漢文としての整理、さらには義山の意図がどういうものであつたにせよ、当時の浄土宗教学の立場からの改変が加えられている。このことは早くから指摘されてきたことであり、そのため現在のわれわれは、この義山刊行の『黒谷上人語灯録』を法然の思想研究の一次史料としては用いてはいない。つまり法然思想の根本史料として論文に引用するのは、『浄土宗全書』本ではなく、古本『漢語灯録』や元亨版『和語灯録』を底本

とする『昭和新修法然上人全集』のほうである。しかしかつて浄土宗で広く流布したものであり、当時の浄土宗僧侶はこれを読んで法然を理解したのであるから古典的価値はあるはずである。

刊本を出版する前、義山は校訂が終了した清書写本を白誓に献呈している。知恩院蔵の『円光大師語灯録』はまさにそれにあたるものである。この史料が知恩院に所蔵されることは、これまでまったく知られていなかったようである。かつて藤堂祐範氏は、知恩院の宝庫を詳しく調査されているが、養鷗徹定師の収集になる古写経類を中心としたものであつたためか、この史料には何ら言及されていない。『国書総目録』をはじめとするどの目録類にも記載されていないし、誰かが論文でこの史料の存在に少しでも触れたということも聞かない。筆者は数年前に偶然その存在を知りえたが、これだけの史料がなぜこれまで手つかずのまま埋もれてきたのか不思議でならなかった。現在においては義山版『黒谷上人語灯録』刊行前の清書写本として価値ある史料となるはずである。

## 調査日および検討内容

平成十六年十月に解題を担当いただく岸一英先生、および佛教大学大学院生関係者数名とともに予備調査を行った。書誌事項を記録し、写真カット数などを調べた。そして撮影業者に依頼し、十二月上旬、三日をかけて撮影した。全部で七五〇カットほどにもなり分量が多かったため、はたして順調に全部を撮影できるかどうか心配ではあったが、撮影業者の努力で無事に終了することができた。また写真版出版にあたり、知恩院文化財事務局にもご快諾いただいた。

### 研究班メンバー

善 裕昭 (主務/浄土宗総合研究所研究員)

伊藤真宏 (研究スタッフ)

松島吉和 (研究スタッフ)

文責者 主務/研究員 善 裕昭

# 特別業務 特別

## 浄土宗典籍・版木の研究

### 研究目的

寺院で、その寺の住職さえ自坊に何が所蔵されているのか知らないまま、また、什物帳で所蔵していることは知っていても蔵の中にあつて一度も見ることがないまま、徹や虫食いによつて損傷していく文献類がある。また中には、本堂や庫裏の新築・改築などで、その寺院所蔵の文献類が廃品として処分されたりする例もある。しかしこれらの中には貴重な文献が存在することもあり、また学術的な史料といえなくても、その寺院にとつてはその寺の歴史を物語る貴重な文献というものもある。よつて、これらの文献類を調査整理し、各所蔵寺院にその存在価値を認識してもらい、保存し後世に伝えていくことがこのプロジェクト研究の目的である。

### 研究内容

#### 一、調査について

調査は簡易目録を作成し所蔵寺院にわたすことでその寺院の調査を一応の終了とする。

寺院での調査は以下の手順をとる。

- ・ 保管現状の記録（写真などで記録する）。
- ・ 全文献類の大まかな分類・並べかえ。
- ・ 上記分類に基づき、通番（仮番号）を付した付箋を全文献類に挟む。

・ 番号順にパソコンに入力（データベース化）。但し場合によつてはカードでとることもある。この時、書名・著者・編者・編者・奥付等を記録。必要あれば順番の並べかえも行う。※十四年度からは直接デジタルカメラで題名等を撮影、パソコンに入力し、研究所

で整理する方法も取り入れた。

・再度の並べかえ。

・通番（正式なもの・目録番号）をパソコン入力。

・条件により通番ラベルを添付。

・保管場所に目録番号順に収蔵。（防虫剤を置くこと

もあり）

○調査対象寺院の文献類は悉皆調査を原則とする。

二、内容の判別について

重要文献は所蔵寺院の許可を得て写真・デジタルカメラに撮り、調査研究する。

また、古文書・掛け軸・版木等は何が書かれているのか所蔵寺院でも判明していないものがあり、これらは所蔵寺院の許可を得て写真・デジタルカメラに撮り研究所で解読、または専門の研究者に解読を依頼する。

これまでの経過

本プロジェクトは佛敎大学に部屋を借用している浄土宗総合研究所分室の研究室が中心となり、平成五年十月

より計画され、平成六年四月より調査研究活動に入った。

まず、既存の情報を調査整理するため、浄土宗宗務庁

の許可を得、『浄土宗寺院名鑑』掲載の全浄土宗寺院の

データ及び昭和四十三年の浄土宗勢調査記載の寺院什

物（掛け軸・古文書・記録等）を、浄土宗総合研究所分

室のパソコンに全て入力した。これによりどの寺院にと

のような文献があるかが前もって把握できることになっ

た。（データ漏れを防ぐためこれらは嚴重に分室で保管

している。）次に平成六年九月と平成八年六月に『宗報』

にアンケート（「浄土宗典籍・版木の研究」へのご協力

のお願い―お寺の古文書古書籍の保存状況をお知らせ下

さい―）を載せ、回答のあつた寺院及びその後研究所へ

の依頼のあつた寺院より十四箇寺をまず、準備調査した。

このうち一箇寺は文献類を他へ譲渡されたので、対象寺

院は十三箇寺となった。平成十五年度でこれら十三箇寺

すべての調査は終了し、平成十六年度末までに二箇寺は

目録が完成、製本して所蔵寺院に渡し、四箇寺は目録完

成して製本の段階、一箇寺は目録の校正段階、一箇寺は



文書一点なのでその文書の内容を調査中、残り五箇寺も現在データを整理し目録を作成中である。

○平成十七年三月現在までの調査状況

現在までに調査した寺院の調査状況は以下の通りである。(寺院名などは所蔵者の管理上のこともありここでは伏せておく)

京都教区 古書籍五六七冊 調査終了簡易目録作成完了

新潟教区 古書籍六六八冊 大蔵経一部 古文書

調査終了 簡易目録作成完了

鳥取教区 古書籍一〇七九冊 調査終了

簡易目録ほぼ完成

富山教区 古書籍二〇〇三冊 調査終了

簡易目録ほぼ完成

長野教区 古書籍三四四部 調査終了

簡易目録ほぼ完成

岐阜教区 古書籍約二四五冊 古文書 調査終了

簡易目録ほぼ完成

静岡教区 古書籍約五〇〇冊 大蔵経一部 調査終了

簡易目録ほぼ完成

滋賀教区 鎌倉期紙背文書一点 写真撮影終了

大阪教区 古書籍一八一五部

卷子本及び古軸類二六〇点

大蔵経 古文書 調査終了 目録作成中

埼玉教区 版木約三〇点 古文書 調査終了

目録作成中

京都教区 古書籍約四二〇冊 古軸類十点 調査終了

目録作成中

京都教区 古書籍約一〇八二冊 調査終了 目録作成中

尾張教区 古書籍約七九五冊 古文書 調査終了

目録作成中

研究開催日および検討内容

現地調査が一応平成十五年度で終了したため、当プロジェクトのスタッフは、平成十六年度は、それぞれ担当を決めて、随時現地でデジタルカメラで撮影した写真を見て、古書籍の題名・著者名や写本の奥書等を判読しパ

パソコンに入力する作業をした。またパソコン入力にはアルバイトにも手伝ってもらっており、それぞれの分担分の作業をすすめることを第一としていた。よつて特に特定の研究開催日は決めていない。ただし、目録の原稿ができあがったところで研究主務が目録をチェックし、不明な点があれば、もう一度現地へ行き再調査する。平成十六年度は九月二十六、二十七日に鳥取教区寺院へ行き再調査をした。

#### 今後の実施計画

長期にわたつて続けてきたこのプロジェクト研究も一応平成十七年三月で終了することが研究所会議で決められた。しかし目録作成というのは時間がかかり、しかもこのプロジェクトでは、対象の文献が古書籍だけで合計一万冊を超える。そのほか大蔵経・版本・古軸・古文書があり、目録の訂正作業等にさらにもう一年、平成十七年度末までの研究延長を願い出、運営委員会です承された。

平成十七年度ですべての調査が終了させ、その結果報告及び研究成果を所蔵寺院の許可を得て発表する。その後の調査資料の保管等については分室での保管を現在検討している。将来にわたつて役立つ形で残していきたい。

この調査は、一寺院文献類全調査を基本としており、たいへんな時間と労力がかかっている。限られた範囲での活動であつたため、アンケート回答寺院の中で調査できなかつたところもあつた。今後浄土宗として、継続して文献類さらには文化財全般を調査していく機関を設けることが重要と思われる。

#### 関連報告の有無

研究ノート等の発表は、所蔵寺院の許可が必要なので平成十六年度はしていない。過去には、天清院文書の『看坊記』についての報告を、所蔵寺院の承諾を得て、『教化研究』に発表している。

研究班メンバー

竹内真道（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

伊藤茂樹（浄土宗総合研究所研究員）

齊藤舜健（浄土宗総合研究所研究員）

曾田俊弘（浄土宗総合研究所研究員）

井野周隆（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

文責者 主務／専任研究員 竹内真道

## 特別業務 特別

### 法然上人二十五霊場研究

#### 研究目的

弘法大師四国八十八箇所のお砂ふみと同じく、各地域に法然上人二十五霊場が設置されている。宗祖八百年大遠忌に向けて、各地の法然上人二十五霊場の現況を調査・紹介し、宗祖への仰慕喚起の一翼を担うことを目的とする。

#### 研究内容

##### ○現地調査

各教区より提出されたアンケート及び霊場研究者より示された史料から判明した各地の霊場寺院へ行き、二十五霊場用のための案内書・朱印・朱印帳・ご詠歌・ご詠歌の額・霊場に関する事物（砂・掛け軸等）・宗祖の像または画像・標石・道標等の有無及び現況を調査す

る。

##### ○調査整理

調査したデータを整理する。

##### ○紹介

一地域の二十五霊場調査が完了した段階で、調査寺院の了解のもとに『宗報』等に紹介する。

##### これまでの経緯

平成十五年に浄土宗総合研究所より各教区教務所宛に、地域の二十五霊場について、その有無・設立時期・現在の状況について尋ねるアンケートを実施した。その結果及び霊場研究者より示された史料をもとに、二十五霊場が過去にあったか現在もあるとされる教区は以下のようになった。

一、地域の二十五箇寺にある二十五霊場

茨城・東京・千葉・富山・三河・尾張・伊勢・伊賀・福井・  
京都・奈良・大阪・兵庫・南海・福岡・佐賀

二、一箇寺の境内にある二十五霊場

栃木・伊勢

これらの教区以外でも、さらに現地調査すれば過去にあった教区もあると思われるが、とりあえず右の十八教区を調査の対象にした。

平成十六年度は、京都分室の研究員で、明和五年刊『円光大師京都廿五処巡拝記』（山本博子氏「京都の法然上人二十五霊場」『印度学仏教学研究』二〇〇三年十二月号掲載をもとにする）に記されている二十五箇寺を調査した。また、東京の浄土宗総合研究所の研究員で、栃木・茨城・千葉の教区を調査した。

このうち、京都廿五処は明和五年（西暦一七六八年）刊行の史料によるもので、現在広く知られている二十五霊場が宝暦年中の金谷道人撰『法然上人御画伝略讚』（『浄土宗大辞典』(3)一一七頁）によるものと比較しても、そ

の設置時期は二十五霊場としてはたいへん古いものである。よつてこの京都廿五処にある二十五箇寺のうち、現在その寺院に記録が残っているのは一箇寺だけであり、残り二十四箇寺は伝承も何の形跡もみられなかった。このことから現地調査をする前に対象寺院に、次年度よりアンケートを送り、その寺院に霊場に関しての何らかの記録・情報があるかを尋ねてから、現地調査に移ることにした。

研究開催日および検討内容

○研究開催日について

現地調査及び打ち合わせの会議は京都分室だけで十五回しており、東京の研究員の現地調査や会議も含めると二十回以上になる。（詳細については繁雑になるので略す）

○検討内容

栃木の寺院のように一箇寺の境内に二十五霊場を設置されているところは別として、現在忘れられている霊場、

また知られていても活動していない霊場もあり、これらを『宗報』等に掲載し紹介した場合、それを見て来る参拝者の応対に困る寺院もでてくる。これらの寺院は『宗報』の掲載は断られるであろうし、また調査自体も拒否されるところもあるかもしれない。今回のこの報告も、この点を考慮して寺院名はあげなかつた。調査結果の公表については今後検討を要する。

関連報告等の有無

平成十六年度は最初の調査の段階であり、報告論文等は次年度から発表する予定である。

研究班メンバー

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

竹内真道（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

佐藤晴輝（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

伊藤茂樹（浄土宗総合研究所研究員）

上田千年（浄土宗総合研究所研究員）

齊藤舜健（浄土宗総合研究所研究員）

斎藤隆尚（浄土宗総合研究所研究員）

坂上典翁（浄土宗総合研究所研究員）

曾田俊弘（浄土宗総合研究所研究員）

宮入良光（浄土宗総合研究所研究助手）

清水秀浩（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

井野周隆（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

山本博子（研究スタッフ）

文責者 主務／専任研究員 竹内真道

# 特別業務 大遠忌関連

## 浄土宗大辞典

研究目的

―プロジェクト編成の経緯―

平成二十三年に厳修される宗祖法然上人八〇〇年大遠忌を控え、浄土宗ではさまざま大遠忌記念事業が立案・計画され、順次実施されている。多くの記念事業の中、宗務当局から総合研究所へ諮問された事業の一つに、かねてよりの懸案である『(仮)新纂浄土宗大辞典』の編集があった。そこで、平成十四年度から二年間、その基礎作業として総合研究所の「浄土教比較論」中に、これを組み入れ、スタッフを編成し、『浄土宗大辞典』の点検作業を進めてきた。そして、平成十六年度から総合研究所内でも大遠忌に関連するプロジェクトを一括することとなり、本研究班も「浄土教比較論」を離れ、大遠忌関連事業に移行し、その名称も『(仮)新纂浄土宗

大辞典』の編集プロジェクトへと変更した。

昭和四十九年、浄土宗大辞典編纂委員会編『浄土宗大辞典』(以下、『大辞典』と記す)初版第一巻が発行されて以来、およそ四半世紀が経過した(昭和五十一年・第二巻発行、昭和五十五年・第三巻発行、昭和五十七年・第四(別)巻発行)。その後、浄土宗学・仏教学・史学をはじめとする学問研究は長足の進展を示し、あるいは、宗宝や各種文化財の指定(解除も含め)、新出資料の発見、市町村合併に伴う住居表示の変更など、『大辞典』記載事項に改訂・増補を望む声は日増しに高まり、かつ、多岐に及んでいる。本プロジェクトは、それら多方面からの声を踏まえ、『新纂浄土宗大辞典』(以下、『新纂大辞典』と記す)の編集・発刊を目指している。無論、現今の出

版を取り巻く環境、頒布・販売・検索の便宜などを鑑み、『新纂大辞典』の電子化も視野に入れて作業を進めていることは言うまでもない。『新纂大辞典』の発刊は、一層の教学振興を促し、布教施策の一助となるであろう。

ただ、『大辞典』が存在するとはいえ、それを全面的に改訂・増補し、加えて、『新纂大辞典』を発刊・販売するという一連の膨大な作業が、短期間で完了するはずもなく、一宗を挙げての綿密な調査、慎重な討議、複雑な事務が必要となることは言うまでもない。

そうしたことから、平成十六年二月二十七日、浄土宗内の学識経験者が招聘され、『新纂浄土宗大辞典』編纂準備委員会が開催され、有益な討議が交わされた。その結果、同年四月一日（平成十六年度）付けで、宗務当局から、『新纂浄土宗大辞典』編纂委員会（委員長・石上善應、副委員長・伊藤唯真）と『同』編纂実行委員会（実行委員長・林田康順、実行副委員長・安達俊英）が委嘱される運びとなり、その際、これまで『大辞典』の点検作業に携わってきた当プロジェクト研究員がそのまま編

纂実行委員として委嘱されることとなった。ここに、宗務当局との共同作業のもと、当プロジェクトが『新纂大辞典』の実質的編集作業に着手する方向性の大綱が定まったのである。

#### 研究内容

平成十六年度の作業としては、細かい部分での改良点は多々あるものの、原則として平成十四・十五年度の作業を踏襲している。その詳細は『教化研究』第十四・十五号所収の当プロジェクトの活動報告をご覧いただければ幸いである。

なお研究所での点検作業を踏まえ、平成十六年十一月二十二日付で、「あ」行中の約五〇〇項目についての『新纂浄土宗大辞典』項目執筆のご依頼」を八十名を超える先生方宛に発送した。その後、執筆の承諾をいただいた先生方を対象とした説明会を、同十二月八日（京都）と十日（東京）の二回にわたって東西宗務庁において開催し、多くの先生方から建設的なご意見を頂戴した。それらを



研究所に持ち帰り、スタッフで討議を重ねた結果、平成十七年一月十二日付で、①『執筆要綱』（A五版・本文三二頁）、②項目別指針、③著作権委譲承諾書、④原稿送付時送り状、⑤返信用封筒、⑥担当者名簿の六点を再整理して、『新纂浄土宗大辞典』原稿執筆のお願いを全執筆者宛に発送した。同三月末日の締め切りに向け、先生方からの原稿をお待ちしているのが現状である。

#### 研究開催日

原則として全体会を毎週月曜日に開催し、必要に応じて少人数での研究会を行ってきた。

#### 研究スタッフ一覧

総合研究所長・石上善応研究代表以下、平成十六年度の本プロジェクト研究スタッフの構成とその担当分野は以下の通りである。なお、本年度からスタッフの増員が許され、作業の充実が図られることとなった。

また、本プロジェクトは膨大なデータをより効率的に

処理する必要があり、コンピューターによる高度な編集技術が要求されることから、発足当初から当研究所編集主務・大蔵健司専任研究員をチーフとする編集班との共同プロジェクトとし、データの作成・保存などの情報処理作業を進めているので、重複するがその構成も付記しておく。

石上善応（研究代表／浄土宗総合研究所所長）

福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）

東部スタッフ

林田康順（主務／浄土宗総合研究所研究員）

伝法

西城宗隆（浄土宗総合研究所専任研究員）

法式

大蔵健司（浄土宗総合研究所専任研究員）

宗制・哲学・成句

袖山栄輝（浄土宗総合研究所専任研究員）

一般仏教語

石川琢道（浄土宗総合研究所研究員）

人名

柴田泰山（浄土宗総合研究所研究員）

一般仏教語

曾根宣雄（浄土宗総合研究所研究員） 宗学

吉田淳雄（浄土宗総合研究所研究員） 宗史・歴史・地名

和田典善（浄土宗総合研究所研究員） 典籍

名和清隆（浄土宗総合研究所研究助手） 宗教・民俗

宮入良光（浄土宗総合研究所研究助手） 布教・仏教美術

郡嶋昭示（浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員） 典籍

村田洋一（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

寺院・詠唱・組織

西部スタッフ

竹内真道（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

善 裕昭（浄土宗総合研究所研究員）

安達俊英（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

清水秀浩（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

米澤実江子（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

大沢亮我（研究スタッフ）

編集担当（東部）

大蔵健司（編集主務／浄土宗総合研究所専任研究員）

吉田淳雄（編集担当／浄土宗総合研究所研究員）

石川琢道（編集担当／浄土宗総合研究所研究員）

郡嶋昭示（編集担当／浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員）

なお、本年度からスタッフの増員が認められたとはいえず、実際の編集作業に取り組むにあたっては、必ずしも十分な体制とはいえない。今後もスタッフの充実を図らねばならないし、多くの先生方にご執筆の手をわずらわせることとなるのは言うまでもない。

おわりに―お願いにかえて―

以上、私たち「〔仮〕新纂浄土宗大辞典」の編集プロジェクト」研究スタッフは、かつて『大辞典』刊行にかわられた編纂委員の先生方やご執筆された先生方をはじめとする実に膨大な先学諸賢のご尽力に常に敬意を払い、また、『新纂浄土宗大辞典』編纂委員会の先生方

の指導を仰ぎつつ、『新纂大辞典』刊行に向けた編集作業を営為進めていく所存である。

なお、その際、各項目に記載される内容の確認はもとより、各寺院の什物・諸大徳の写真などの図版掲載許可や撮影依頼のため、直接・間接に、各スタッフが書面や電話を通じて各寺院宛に連絡をとらせていただくことが多くなると思われる。本報告をこ一読いただいた大方の諸賢には、本プロジェクトへのご理解をいただき、広くご協力を賜れるよう伏してお願い申し上げる次第である。あわせて当プロジェクトへのご指導・ご鞭撻をお願い申し上げ、報告にかえさせていただきます。

合掌

文責者 主務／研究員 林田康順

# 特別業務 大遠忌関連

## 浄土三部経

### 研究目的

本研究の目的は『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の浄土三部経に現代語訳を施すことにより、浄土教の根幹となる教説を分かりやすく、親しみやすく提示することにある。この試みは『四十八巻伝』の現代語訳化や『浄土宗大辞典』の改訂作業、「法然上人二十五霊場」の調査などととも、宗祖法然上人八百年大御遠忌記念事業の一環に位置付けられる研究プロジェクトであり、布教化の一助ならんことはもとより、浄土宗が浄土教の教えを広く世に示す新たな契機にしようとするものである。

本平成十六年度、当研究班では主に『無量寿経』下巻の現代語訳化に取り組んだ。

### 研究内容

一つの研究を達成するためには、その目的に添った実験や調査による基礎データの収集、データに基づく考察、そして結論を導くといった過程を経るであろう。こうした場合、研究内容と言えば、実験や調査の方法、そしてそれらの結果が示されねばならない。

本研究の場合、本来は、漢訳原典からの訓読書き下し文作成作業が基礎データの収集に相当するはずである。しかし、これについてはすでに『浄土宗聖典』第一巻収載の「浄土三部経訓読書き下し文」（底本…大雲校訂本）を採用する編集方針が定められている。

大雲点校訂本は観徹『三部経合讚』の解釈に基づき、点が打たれたという。そこで我々に課させられた作業は、つねに『合讚』を参照しながら、すでに確定している訓

読文に対して研究目的に沿った現代語訳を施せばそれでよい、ということになる。

さて『無量寿経』下巻における実際の現代語訳化作業は、まず袖山研究員が叩き台となる下訳を施し、齊藤(瞬)・林田の両研究員に助言を求めつつ柴田・袖山の両研究員にて第一次訳を作成、次いで柴田・袖山が第一次訳を査読しながら推敲を重ね、引き続き第二次訳を作成した。

ただ『無量寿経』に限って言えば、上下巻ともに、合讀を参照してもなお理解の及ばない箇所、あるいは主語や動作者、述語や目的語が不明確であったり、行間を補わなければ文脈の整合性が読み取りにくい箇所も存在する。そうした際は、助言を求める作業と平行して、

①了慧の『無量寿経鈔』、義山の『無量寿経随聞講録』  
参照

②漢訳異訳本、梵本と対照

③あらためて原典と訓読書き下し文を精読

などといった基本的な作業にいったん立ち返った上で現

代語訳を施している。

翻訳という性格上、原文とは文節の順序を入れ替えた  
り、逐語訳を避け日本語として読みやすい表現に変えた  
場合もあるものの、少なくとも当研究班としては大雲点  
から逸脱した文章理解を示したつもりはない。ただし本  
研究は浄土宗基本典籍の英訳化プロジェクトと連動して  
いる。主語、述語、目的語などを補いつつ行間を読み込  
まざるを得ない場合もある。その場合、現代語訳担当者  
の見解が前面に出してしまうことは止む得ぬこととご理解  
いただきたい。

これまでの経緯

本プロジェクトでは、すでに本書の研究ノートとして  
第十四号に『阿弥陀経』(訳注を含む)、第十五号に『無  
量寿経』上巻の現代語訳を発表している。平成十六年度  
の研究課題としては①『無量寿経』下巻の現代語訳完成  
と、②上下巻の訳注完成、③八相成道や五悪段の挿入、  
弥勒の役割など『無量寿経』編纂意図の解明、④『観無

量寿経』の現代語訳化着手、⑤『観経疏』現代語訳化準備作業着手、などを予定したが、①の実現が精一杯であった。

その①についても、③において未だ十分な成果を見出せないでいる現況にある以上、今後、改善されうる余力を多分に残している。力不足を痛感しているところである。いずれにしても今後は②の作業を早急に進め、④以下の進捗を図っていききたい。

研究班としては、今回、下巻第二次訳を『教化研究』に発表し、その評価を問いたいと考えている。

#### 研究会開催日と検討内容

平成十六年度、当研究会の開催は日別にして計四十六回であった。

月毎の内訳は四月七回、五月一回、六月三回、七月三回、八月一回、九月二回、十月四回、十一月四回、十二月四回、一月七回、二月五回、三月五回。

このうち十二月までに『無量寿経』下巻の第一次訳を

終了。この間さらに、『教化研究』第十五号掲載の研究ノート（『無量寿経』上巻現代語訳）の校正作業も行い、一月から新年度四月までに下巻第二次訳を終了した。

また七月、二月、三月の計三回、齊藤・柴田・袖山にて前項③の作業を集中的に行つた。また基本典籍英訳化作業と関連して、一月の計二回、柴田とニューヨーク州立大学のマーク・ブラム氏（当研究所研究スタッフ）によつて、英訳化を念頭に置いた⑤の打ち合わせ作業を行つている。

#### 関連報告

本プロジェクト研究の一環として、本号「研究ノート」に『無量寿経』下巻現代語訳（第二次訳）を掲載したが、より完成度の高い現代語訳が求められる。ファックス、電子メールなどにてご意見を頂戴できれば参考にしたいと思う。

また平成十六年度の研究課題③『無量寿経』編纂意図の解明の一環として、浄土宗総合学術大会に於いて袖山

が『大阿弥陀經』に於ける光明と聞我名字ノ無量壽經研究の一視座として、柴田が『無量壽經』所説の「普賢之徳」について」と題して発表（『仏教論叢』第49号掲載）。さらに袖山が『無量壽經』第三十五願考察の一視座ノ前後する諸願の連続性」と題する論文（高橋弘次先生古希記念論集『浄土学佛教学論叢』収載）を発表した。

#### 研究班メンバー

- 石上善應（研究代表／浄土宗総合研究所所長）
- 福西賢兆（浄土宗総合研究所主任研究員）
- 袖山榮輝（主務／浄土宗総合研究所専任研究員）
- 柴田泰山（浄土宗総合研究所研究員）
- 齊藤舜健（浄土宗総合研究所研究員）
- 林田康順（浄土宗総合研究所研究員）
- 石田一裕（研究スタッフ）

文責者 主務／専任研究員 袖山榮輝

# 特別業務 大遠忌関連

## 四十八巻伝

### 研究目的

本班は、浄土宗において江戸時代から法然伝の標として広く読まれてきた『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の現代語訳の作成を目的に編成された。浄土宗の布教では、法然の生涯を説明する場合、『四十八巻伝』のつとつて話すことが多い。それだけに、わかりやすい現代語訳を望む声は少なくない。本班はその希望にできるだけ応えるため、『四十八巻伝』全体の現代語訳を提供しようというものである。

### 研究内容

通常、史料を現代語訳していく場合、まず誰かが下訳を作成し、それをスタッフ全員で検討・修正していくという手順をとることが多いと思う。本班でも、基本的に

この仕方で作業を進めている。作業をはじめた最初のころは、スタッフはまだ手探り状態の中、いろいろと細かい問題をクリアーしながら、ともかくも訳文を仕上げていることに精一杯であった。最近では手順も固まってきたので、作業自体は順当にすすんでいる。

昨年度の報告でも記したとおり、これまでの『四十八巻伝』の現代語訳には

- ① 早田哲雄『昭和更編校注 勅修法然上人御伝全講』  
全十巻（西念寺 昭和三九〜四七年）
- ② 村瀬秀雄『全訳 法然上人勅修御伝』（常念寺、昭和五七年）
- ③ 大橋俊雄『法然上人伝』法然全集別巻 全二巻（春秋社 平成六年）

の三書がある。このなか本班でもっとも依用しているの



は①である。これは初の現代語訳でありながら完成度はたいへん高い。古文を正確に理解した上での訳文であること、仏教語についてもおおむね十分な理解がなされていることなど、信頼して参照できる。『四十八巻伝』原文を読んで意味がつかみにくいときこれを読めば、なるほどそういうことかとひととおりわかつてしまう。本書の後書きによれば、全部で十冊の本書が順次刊行されたとき、なかなか売れないで資金繰りに困ったようである。このような手堅く基礎的な本は、刊行当初は売れ行きはもうひとつかもしれないが、年数の経過とともに評価がじわじわと高まってくる。今の時点で思うに、『四十八巻伝』全体にわたってこれ以上の完成度をもつ現代語訳は、おそらく今後あらわれることはないのではなからうか。作業を進めていくたびにこのように思ってしまうのである。ただ訳文が綿密すぎてすつきりしないところもある。本級の現代語訳は、より簡明でわかりやすい形にしあげていくことを心がけている。

これまでの経緯

これまで巻一から巻四までの訳文を『教化研究』に掲載してきた。平成十六年度は三年目になる。作業手順は基本的に昨年と変わらない。ただ昨年度の報告でも述べたように、メンバーが多忙なため日程調整がつきにくく、進捗状況は必ずしもよいとはいえない。一月に二回は集合するように心がけてはいるが、それもままならないときもある。

研究開催日および検討内容

十六年度の研究会開催日は次のとおり。

平成十六年

四月十二日(月)

四月二十七日(火)

五月十一日(火)

五月二十五日(火)

六月十五日(火)

六月二十九日(火)

七月十四日(火)

七月二十七日(火)

平成十七年

二月一日(火)

二月十七日(木)

三月四日(金)

三月二十五日(金)

三月二十八日(月)

十六年度は巻五を中心に訳文を作成していったが、こ  
こはなかなか難解な内容を含むところであった。法然が  
建仁二年に談義したという『秘密曼荼羅十住心論』につ  
いての見解、宗と一切経の見解など、いずれも教理的に  
かなり高度な知識が要求されるところである。

既に述べたように、①の訳文は大変すぐれたものだが、  
時折、誤訳かと思われるところがある。そこでその点を  
本班の訳文と対比しながら指摘しておきたい。

五卷第三段は、法然が中の川実範阿闍梨から真言を伝

受されたという話である。原文は次のとおり。

上人は、もと天台の真言をならひ給へり。しかる

を中川の阿闍梨実範、ふかく上人の法器を感じて、

許可灌頂をさづけ、宗の大事のこりなくこれをつた

ふ。

実範は興福寺の学僧で戒律を復興し真言密教にも詳しく  
つた。しかし法然が実範から教えを伝受されたというの  
は、ご承知のように早くから事実でない指摘されてい  
る。というのも実範が没したのは『台記』によれば天養  
元年(一一四四)であり、このとき法然は十二歳にしか  
なっておらず、美作国にいていまだ比叡山にも登って  
ないのである。だから創作話にすぎないが、しかしこ  
こは現代語訳作業である。内容自体が創作であっても、原  
文どおり忠実に訳さねばならない。

①の訳は次のとおり。

さて法然上人は、元來台密と言われて天台宗に伝  
える密教を学習なされたのである。所が、大和の国

中の川に住して、中の川少将の上人と言われた

実範阿闍梨は、法然上人の出家修道者としての人物

にひどく心を動かして、法水を頂にそそいで律を伝  
法し律宗の要点を余す所なく伝受した。：

「許可灌頂」や「宗の大事」を律宗の伝受と理解され

ている。確かに実範は戒律でも有名であつたが、許可灌  
頂とは密教儀礼であるし、ここの話の流れは、法然はも  
ともと天台密教を学んだけれども実範から真言密教をも  
伝受された、ということである。したがつて律宗の伝受  
ではなく、真言密教の伝受と理解すべきであろう。そこ  
で本班では次のように訳した。

法然上人は、はじめは天台密教（台密）を学ばれ  
ていた。ところが中の川実範阿闍梨は、上人の仏教  
を受容する器量に深く感心して、自分の弟子と認め  
て灌頂を授け、真言宗の要点を残すところなく伝受  
した。：

#### 関連報告

今回の『教化研究』には、巻五の訳文を研究ノートに  
掲載した。

研究班メンバー

伊藤唯真（浄土宗総合研究所客員教授）

善 裕昭（主務／浄土宗総合研究所研究員）

真柄和人（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

千古利恵子（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

文責者 主務／研究員 善 裕昭

研究ノト

# 総合研究 総合研究プロジェクト 葬祭仏教 静岡教区調査結果

平成十三年度より始まった「葬祭仏教―葬儀の実体的研究」は、現代、とくに一九九〇年代以降に大きく変容しつつある葬祭の実態的研究を旨指している。「教化研究」14、15号の各研究班の「活動報告」に報告されているように、十四年度と十五年度は、葬祭の主たる担い手である寺院住職と紹介を受けた檀家への聞き取り調査を行い、当該地域の葬祭の特徴とその変容についての理解を深めた。調査該当寺院と地域は、静岡教区の中でも特徴的な、山村農村部の東駿組、御殿場市大乘寺、漁村部の南豆組、南伊豆町西林寺、大都市部並びに都市近郊の西遠組、浜松市の法林寺、法永寺、法光院、法蔵寺である。

今回の研究ノートは、まずそれらの聞き取りから得ら

れた各地域における葬祭についての特長的事例の概略報告を行い次に、「お葬式に関するアンケート調査」の一次分析」において分析を行った。

まず聞き取り調査を行ったこれら三地域は、産業構造や地形や文化背景が大きく異なっている。それは浜松市中央部と周辺地域でも同様のことがいえる。こうした地域特性は葬送文化に大きく影響を与えてきたことが明らかである。また、同一地域でも、主導する住職の関わり方によっても大きく異なってくることもわかった。しかし、もう一方の担い手である喪家や葬式組の変容の実態については、住職への聞き取りだけでは不十分であることも明らかになった。一九七〇年代を頂点とする高度

経済成長期を経て、各地域の産業構造の変化や住民の移動、経済変化などによる日本人の葬祭に関する意識も大きく変わってきた。その流れの中に葬祭業者への比重の増加も見えて取れる。

今回の基礎調査を経て、十六年度の静岡教区浄土宗寺院檀徒への葬祭に関する意識調査を実施することになったのである。その意識調査は、今回同時に掲載した別稿「研究ノート」「お葬式に関するアンケート調査」の一次分析」において分析を行った。

#### 御殿場調査報告

#### 概要

平成十四年度は前年度の基礎研究としての、静岡教区を対象としてアンケートによる調査・分析をうけ、同年六月十二日に第一回目の現地調査を行った。対象地域を山間農村部の、同県御殿場市の古くからの地域習慣や儀礼が残っている板妻地域の葬祭儀礼に対する聞き取り調

査を行った。

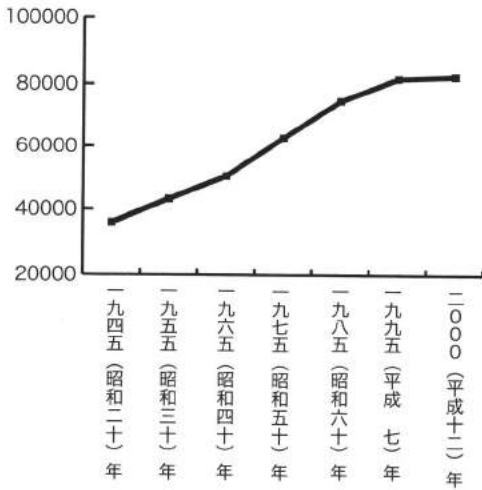
静岡教区東駿組大乘寺のご協力をいただき同地域居住の檀信徒に大乘寺におあつまりいただき、過去および現在の葬送の実体、および習俗習慣等についての質問を行い聞き取り調査を行った。

#### 地域の特徴

御殿場市は富士山と箱根山系に挟まれた場所であり、一八八九（明治二十二）年には東海道本線が開通し交通の要所となる。それによつて富士山への観光客で栄えてきた、一九〇九（明治四十二）年には陸軍の演習場が作られた。一九三四（昭和九年）に丹那トンネルが完成すると、東海道本線から経由する御殿場線になる。わずかな地場産業と、農業・観光が主であったが、その後昭和四十四年東名高速道路の開通により多くの工場が誘致され、市の産業形態も大きく変化した。

人口は、一九四五（昭和二十）年三五、九四四人、一九五五（昭和三十）年四三、一六一人、一九六五（昭和四十）年五〇、二六七人、一九七五（昭和五十）年

六二、七三二人一九八五（昭和六十）年七四、八二二人一九九五（平成七）年八一、八〇八人、二千（平成十二）年八二、五三三人（以上国勢調査より）二千五（平成十七）年八四、八七六人三〇、七六八世帯（平成十七年四月現在御殿場市調べ）となつており、一九六五（昭和四十）年から一九八五（昭和六十）年まで人口が急増し以降緩やかな増加がみられる。



静岡県では中規模の都市で。市内には現在自衛隊関連施設が多く存在し、地域の約三分の一を占めている。

今回檀信徒に対しての聞き取り調査をおこなった板妻地区は大乗寺の檀家が多く、同一姓の世帯が多い。主たる産業は基本的に農林業で、特産物とうもろこしやさつまいも。穀類と自家用米で。昔はいわゆる小作農が多かった、現在地域の周辺部では養鶏・養豚・酪農がおこなわれている。地域には神社（鎮守）が多くお寺が少ない。地区の隣接には自衛隊の駐屯地がある、また近くに進出してきた工場に勤務する人も多い。

#### 調査結果

今回の調査では特に古くからの葬送習慣に対する聞き取りを行った。近年葬祭業者の進出などにより同地域独自性がうすれてきた。その為戦前戦後の葬送の習慣の聞き取りをおこなった。調査対象者は二人とも昭和3年生まれで、地元で継続して生活をしている。

葬祭に関してはいわゆる葬式組が組織されており隣組

の連絡は、亡くなった時に組長がみんなを招集する、「ユイツギ」と言う連絡網が組織されていた。戦前は葬祭に関わる棺桶・位牌・仏具などの用品一切を集落の者が役割分担によりすべて手作りした、位牌が既製品になったのは昭和三十年代後半であった。葬儀の配役としては墓の準備をする「アナツポリ」や棺桶を運搬する「ロクシヤク（陸尺）」は重要な役割とされていた。古くは僧侶を呼んでの通夜式は行われていなかった。

自宅からの出棺時には念仏のかけ声がかげられた。出棺後は目かごを転がした。黒喪服を着始めたのは、終戦後の四十年ごろから、黒腕章ですごしたのではないかとのことである。また朝出棺火葬葬儀の順なので葬儀の前に「キチュウ」と呼ばれる食事をした大乘寺の先代のころ葬儀ではロクシヤク（陸尺）が四天王といって、下り向きにすわっていた、やりにくくてしょうがなく、横にいつてもらった、いまは下座にいるお棺は正面においてあった、会葬者の方をむいていた、ロクシヤクが一番えらかった家族と同等であった。

近代的な火葬場が建設される以前は土葬であったが伝染病死の場合などは三味場で火葬がなされていた、最後の土葬は昭和五十一年頃であった。祭壇は地域の小さいお堂「法鏡院」にかれてあつて、共有していた。また天蓋も使用されていた。

御殿場で多く見られる精進落としての風習であるハマオリは同地域ではあまり行われないが家によつては川にお膳をおいていて石をぶつけて流すハマオリが行われた。四十九日の団子花はわらにさしてあつた、一つの串に五コか六コだった。初七日と言う言葉は使わない、帰ってきたら食事をするだけであつた。以上のように御殿場でも地域の結びつきの強い同地域は地域社会で行う葬儀の習慣風俗がきちんとおこなわれていた。葬儀社が葬儀に介在してきたのは戦後からである。調査時点では菩提寺住職の指導もあり同じ御殿場市内の檀家と同じような葬送形態に変化してきているが、現在でも葬儀の場合住職が「大幡」「小幡」書くなど古い習慣が残っている。

（大蔵健司）



## 静岡教区西林寺聞取り調査

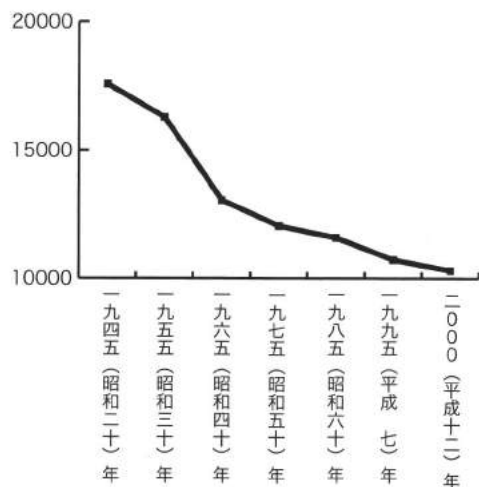
### 調査概要

二〇〇三（平成十五）年六月二四・二五日、加茂郡南伊豆町子浦西林寺の住職と同檀信徒の男性三名（七十歳代）と女性三名（六十歳代）に、漁村における葬祭に関する儀礼と習俗の変遷についての聞き取り調査を行なった。

### 南伊豆町子浦の概要

南伊豆町子浦は伊豆半島の最南端に位置し、伊豆急下田駅から車で一時間程の遠隔地で、過疎化している漁村地域である。三方を山に囲まれた湾に面しており、江戸時代は風待ち港として船宿・廻船問屋などで栄えていた。風待港としての役割を失ってからは過疎化が進み、現在でも人口減少が進んでいる地域である。

国勢調査によれば、南伊豆町の近年の人口動態は以下



の通りである。一九四五年には一七六二〇人、五五年には一六三三七人、六五年には一三〇一三人、七五年には一二〇一七人、八五年には一一五七三人、九五年には一〇七二五人、二〇〇〇年には一〇三〇四人、〇四年は一〇二八九人である。現在人口増加率は、マイナス〇・六四％であり、少子高齢化が進んでいる。『平成十六年版南伊豆町勢要覧』（十二月）では、世代別人口は、〇～一四歳は一一・三％、一五～二九歳は一〇・一％、

三〇〜四四歳は一三・三%、四五〜五九歳は二五・三%、六〇〜七四歳は二四・〇%、七五歳以上は一五・二%である。西林寺のある西子浦地区の世帯数は一〇一、人口、男一一六人、女一一四人である。

この西子浦は入り江に面していて農耕に適していない地域であり、主にいか釣漁・民宿などが営まれている。

### 葬儀の変遷

子浦は近隣に浄土宗の寺院がないので、他宗派の僧侶と葬儀を行なうなど、地域性の強い葬送習俗が見られる。また、現在も屋号で呼び合うなどする伝統的地域であるが、高齢化に伴い、地域や血縁共同体が弱体化している。聞き取り調査の結果、以下の葬送の変遷がみられた。

この地域の伝統的な葬儀の担い手は、念仏講（組長を什長〔ジッチョウ〕と呼ぶ）と古親戚・内どうし（何代か前の親戚）である。これらが中心となつて、喪家の以前の葬儀の記録が記された香典帳を参考にして、親戚・地域が主導する葬儀が行われた。

死の直後には仏壇封じ（四十九日間）が行なわれ、枕経

と通夜には念仏講が枕念仏を行なつた。昭和三〇年代に現住職が東京から戻つてきたことをきっかけに、僧侶が通夜を行うようになった。僧侶の誂経後には枕念仏が行なわれていた。

迎え葬は自宅で僧侶が出棺のお経をあげ、ついで「呼び出し」（組長）が故人との血縁関係によつて葬具を指示し、寺へと「行列」（葬列）を組んだ。葬儀は本堂において外陣で行なわれた。葬儀後は行列を組まず、棺は伝馬船に乗せ、大谷小谷おおやこやと呼ばれる浜に運び、岩窟で茶毘にふした。この地域は、昔から火葬を行う習慣であつた。荒天の時は、念仏講の人が山越えをして茶毘所まで運んだという。遺族は茶毘所には行かず、海辺で手を清める「浜おり」をした。枕団子・枕飯は海に流し、茶碗は墓所に置いた。翌日、取骨し納骨をした。

こうした形での葬送が変化したのは、一九六〇年代に霊柩車が普及したことにより、下田の火葬場まで遺体を運び火葬することが一般的になつたことによる。大谷小谷の浜での火葬は一九六四年十二月まで行なわれていた

が、霊柩車で下田の火葬場まで行けるようになり、茶毘等に際しての利便性から大谷小谷での火葬は行なわれなくなった。

火葬の場所が変化したことにより、葬儀の流れに変化が生じた。大谷小谷で火葬を行っていた頃は、自宅で迎え葬を行った後、寺まで遺体を入れた棺を中心とした葬列を組んだ。寺では遺体を前に葬儀を行い、葬儀終了後に火葬場へと向った。一九六〇年代に下田の火葬場へ変わってからは、自宅で迎え葬をした後にすぐに火葬場に行くようになった。火葬終了後にはいったん自宅に戻り、自宅から寺までの間、遺骨を乗せた輿を持って葬列をして、本堂で遺骨を前に葬儀を行うという形式になった。自宅から本堂へ遺骨を入れた輿を中心として葬列を組む、という風習は、一九七〇から七五年頃まで行われていたが、やがて行われなくなった。葬列が行なわれなくなった理由は、地域・血縁共同体が弱体化してきたことにより葬列が組めなくなった、また親戚の濃さを表わす

葬列の必要性自体がなくなってきたことによる。また、当時の生活改善運動の影響もあったという。

二〇〇〇年、書院の竣工に伴って、住職が祭壇・白木位牌・棺などを書院内に常置し、檀信徒が利用できるようになった。これは葬儀に際して、檀信徒の経済的負担を軽減するためである。また葬祭業者主導の葬儀にならないようにとの考えの表れでもある。

子浦においては、交通手段の変化、地域・血縁共同体の弱体化、また住職の主導などの要因によって、火葬場所、葬儀の場所、葬儀の流れに変化が生じ、葬列が消滅した。しかしながら、いまだに葬儀の主な担い手は古親戚・地域であり、通夜には念仏講の枕念仏が行なわれている、など変化が生じていないことも多い。また葬送に関する子浦独特の風習も続けられている。たとえば、四十九日の間、毎朝墓所におまいりをする「朝参り」、三年間新盆の行事をする「三年間新盆」、新盆の間、精霊を迎えるための「四十八塔」を寺の境内地に作る事が現在でも行なわれている。

これらのことから、子浦地域は共同体が弱体化しているにも関わらず、葬送行事はまだまだ共同体により支えられている部分が多いということが出来よう。

(西城宗隆)

## 浜松寺院聞き取り調査

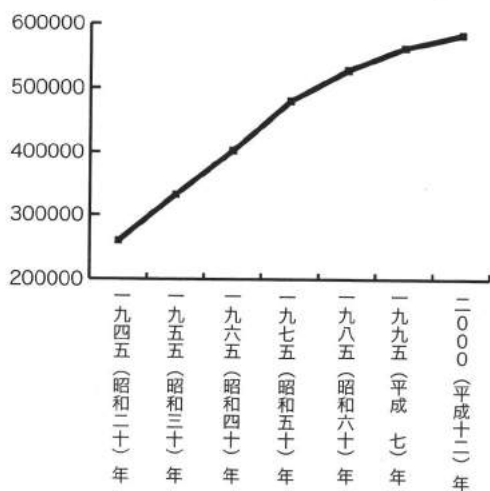
### 調査概要

二〇〇四(平成十六)年二月十七日、十八日の両日に浜松市内にある四ヶ寺に対して、質問用紙表を用いての聞き取り調査を行った。調査の目的は葬祭儀礼の変遷を把握することであった。調査寺院は、浜松市成子町の法林寺(話者…住職、七十歳代)、同市笠井町の法永寺(話者…副住職、四十歳代)、同市笠井新田町(話者…住職、八十歳代)の法光院、同市白羽町の法蔵寺(話者…住職、八十歳代)であり、それぞれ二時間三十分程度の時間を頂戴しお話を伺った。

### 調査地の概要

浜松市は静岡県南西部に位置する産業都市で、楽器工業、オートバイ工業が盛んである。一九五五(昭和三十)年頃までは織物産業も盛んであった。現在の人口は約五十八万人である。一九四五(昭和二十)年には二五九、四二一人であった人口が、一九五五(昭和三十)年に三三二、四五二人、一九六五(昭和四十)年に四〇二、四六三人、一九七五(昭和五十)年に四八〇、三七六人、一九八五(昭和六十)年に五二七、二四六人、一九九五(平成七)年に五六一、六〇六人、二〇〇〇(平成十二)年に五八二、〇九五(以上『国勢調査』より)という増加を示しているように、高度成長期に外部から多くの人口が流入し、人口が増加した。また、外国人人口が最近二十年で急増し、現在では人口の4%(外国人登録をしている外国人のうち約60%がブラジル人)を占めていることが大きな特徴となっている。

調査を行なった四ヶ寺の所在する地域は、同じ浜松市



とはいえ地域の特色や歴史的展開が異なる。法林寺の所在する浜松市成子は、JR浜松駅から徒歩圏内の距離にあり、もとは法林寺前が旧東海道であり宿場であった。東海道本線ができてから繁華街が駅の周辺に移動するにともない、周辺の商業が変化し昔の人々は移動していったという。また楽器、織物、オートバイ産業が盛んになるにつれて、外部（特に東北地方）からの労働者が近隣

に移住してきた。法永寺と法光院は浜松駅の北東約10キロに位置する笠井地区に所在している。笠井地区はもともと稲作を中心とした農業が中心であった。織物産業が栄えるに従い、東北地方を中心とした織工が流入し定着した人もいた。一九六五（昭和四十）年頃から宅地化が進んでいる。法蔵寺のある白羽町は、浜松市の南部に位置し遠州灘に近くかつては半農半漁という地域であったが、近年では地域住民のほとんどは工員などの勤め人となっている。とくに最近十五年で宅地化が進んでいる。

#### 調査結果

浜松においては地域社会の変化、また土葬から火葬への移行（一九五五～一九六五年頃に定着。成子では大正期）によって葬送習俗に大きな変化が起こったといえる。浜松においては、かつて通夜は僧侶を伴うものではなく、身内中心で行うものであった。しかし、新しく入ってきた人々を中心として僧侶の読経を伴った通夜は増加してきている。現在通夜は六時から開始することが多いが、

僧侶は五時四十分ごろから読経を開始し、六時には読経は終了する。その後一般会葬者が焼香をする。お悔やみの意が強く普段着で来る人も多い。自宅葬の場合でも、通夜と葬儀は場所を変えておこなう地区もあるという。

昔は葬儀は寺または自宅で行っていたが、葬祭場での葬儀が多くなってきた。葬儀での僧侶の人数は減少傾向である。かつては両鉞（導師一人と役僧六人）と片鉞（導師一人と役僧三人）が半々ぐらいであり、ときには人数を揃えるために他宗派の僧侶に役僧を頼んでいたのが、現在ではほとんど片鉞になった。新入者を中心に「僧侶は一人でよい」という人も出てきている。

昔は葬列を組んだ。火葬に変わってから、葬列はなくなったが、一九七五（昭和五十）年前後まで葬列の役割を形式的に作成し、出棺前に読み上げた。現在は葬儀後、霊柩車まで列を組むことが多いが、まれに葬列表を書き出す場合もある。

浜松は、かつては遺体の埋葬場所（「野場」「寺山」と呼んでいた）とお参りをする場所（寺の境内地の墓地）

が別である両墓制であった。火葬になってからは、寺の墓地に埋葬するようになり、現在ではかつての埋葬場所は荒れ果て、忘れられた存在になっている。土葬が行なわれていたときには葬儀当日に埋葬をしていたが、火葬が普及してからはおそらくは当日に埋葬していた。現在では四十九日の法要の際に埋葬するように変化した

（名和清隆）

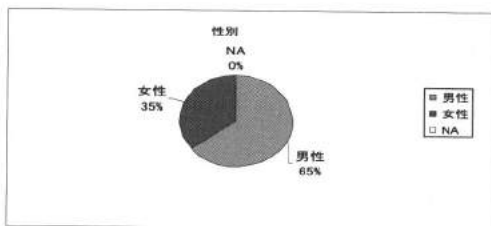
## お葬式に関するアンケート調査

浄土宗総合研究所

\*以下の質問で、当てはまるものに○をつけてください。

(1) あなたの性別を教えてください。

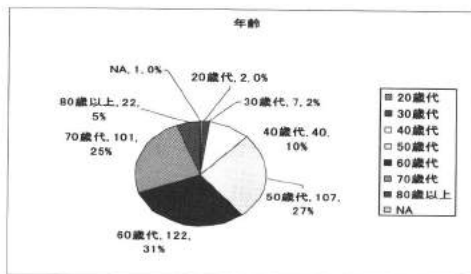
1. 男
2. 女



男性	259	65%
女性	142	35%
NA	1	0%
合計	402	100%

(2) あなたの年齢を教えてください。

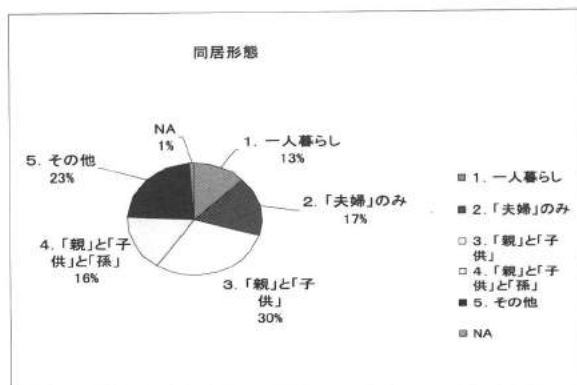
1. 20歳代
2. 30歳代
3. 40歳代
4. 50歳代
5. 60歳代
6. 70歳代
7. 80歳以上



20歳代	2	0%
30歳代	7	2%
40歳代	40	10%
50歳代	107	27%
60歳代	122	31%
70歳代	101	25%
80歳以上	22	5%
NA	1	0%
合計	402	100%

(3) あなたと一緒に住んでいるご家族を教えてください。

1. 一人暮らし
2. 「夫婦」のみ
3. 「親」と「子供」
4. 「親」と「子供」と「孫」
5. その他 (具体的に )



1. 一人暮らし	51	13%
2. 「夫婦」のみ	69	17%
3. 「親」と「子供」	119	30%
4. 「親」と「子供」と「孫」	66	16%
5. その他	94	23%
NA	3	1%



(4) あなたのお住まいの市・町・村名を教えてください。

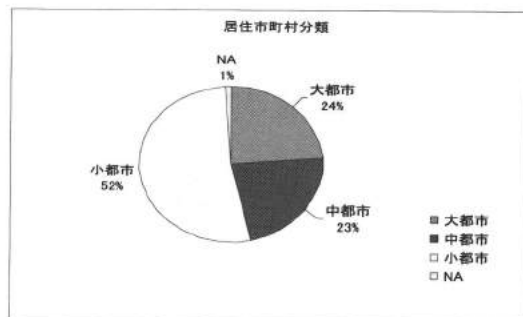
静岡県 ( ) 郡 ( ) 市・町・村

静岡市	67
島田市	37
浜松市	28
焼津市	25
御殿場市	20
裾野市	20
富士市	20
藤枝市	17
富士宮市	17
熱海市	13
三島市	13
東伊豆町	10
伊東市	9
蒲原町	9
掛川市	8
森町	8
磐田市	7
長泉町	6
浜北市	6
伊豆市	5
松崎町	5
竜洋町	5
大東町	4
小笠町	4
下田市	4
韭山町	4
袋井市	4
大仁町	3
金谷町	3
榛原町	3
大須賀町	2
御前崎市	2
函南町	2
浅井町	1
菊川町	1
芝川町	1
相良町	1
豊田町	1
西伊豆町	1
引佐町	1
富士川町	1
NA	4
合計	402

居住市町村分類

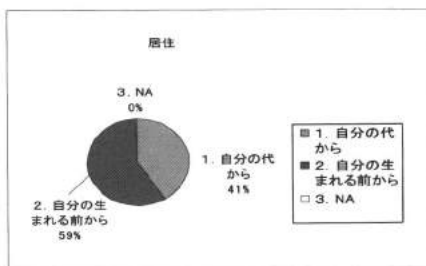
大都市	95
中都市	92
小都市	211
NA	4

- \* 大都市—人口50万人以上、  
中都市—人口10万人以上50万人未満  
小都市—人口10万人未満

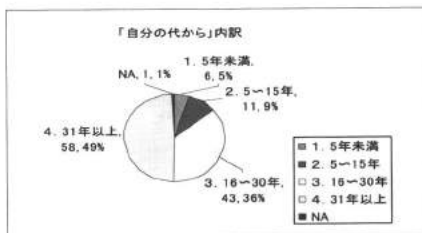


(5) あなたが現在の場所にお住まいになったのは、どなたの代からですか。自分の代からの場合は、その居住年数も教えてください。

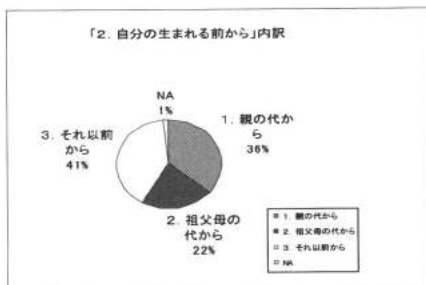
1. 自分の代から  
 ( ① 5年未満 ② 5～15年 ③ 16～30年 ④ 31年以上 )
2. 自分の生れる前から  
 ( ① 親の代から ② 祖父母の代から ③ それ以前から )



1. 自分代から	199	41%
2. 自分の生まれる前から	281	59%
3. NA	2	0%
合計	402	100%



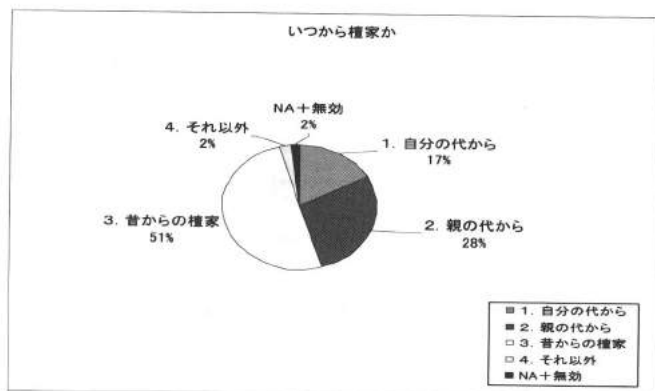
1. 5年未満	6	5%
2. 5～15年	11	9%
3. 16～30年	43	36%
4. 31年以上	58	49%
NA	1	1%
合計	199	100%



1. 親の代から	101	36%
2. 祖父母の代から	63	22%
3. それ以前から	113	41%
NA	4	1%
合計	281	100%

(6) あなた、もしくはあなたの家とお寺(菩提寺)との檀信徒関係は、いつからか教えてください。

1. 自分の代から
2. 親の代から
3. 昔からの檀家
4. それ以外 ( )



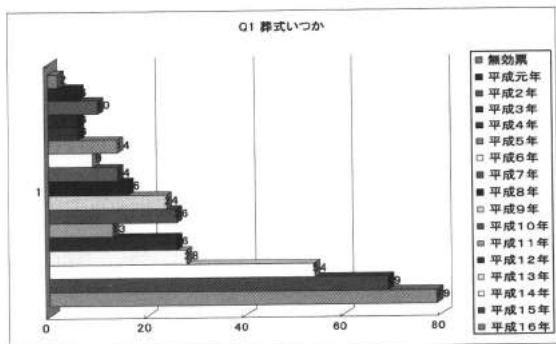
1. 自分の代から	68	17%
2. 親の代から	114	28%
3. 昔からの檀家	203	51%
4. それ以外	9	2%
NA+無効	8	2%
合計	402	100%

4. それ以外	4
祖父母の代から	
票	
自分の兄から	
親が寺出身	

I あなたがもっとも最近に経験した、あなたのご家族のお葬式についてお伺いします

(1) あなたのご家族のお葬式のなかで、もっとも最近のお葬式はいつでしたか。

平成 ( ) 年

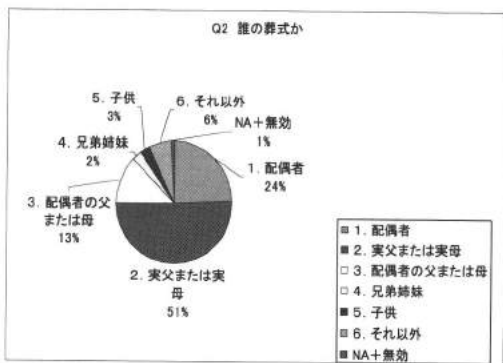


無効票	2	0%
平成元年	6	1%
平成2年	10	2%
平成3年	6	1%
平成4年	6	1%
平成5年	14	3%
平成6年	9	2%
平成7年	14	3%
平成8年	16	4%
平成9年	24	6%
平成10年	26	6%
平成11年	13	3%
平成12年	26	6%
平成13年	28	7%
平成14年	54	13%
平成15年	69	17%
平成16年	79	20%

(2) それは、あなたからみて、どのような関係の方のお葬式でしたか。

1. 配偶者
2. 実父または実母
3. 配偶者の父または母
4. 兄弟姉妹
5. 子供
6. それ以外 (具体的に )

1. 配偶者	98	24%
2. 実父または実母	203	51%
3. 配偶者の父または母	51	13%
4. 兄弟姉妹	10	2%
5. 子供	11	3%
6. それ以外	24	6%
NA+無効	5	1%
合計	402	100%



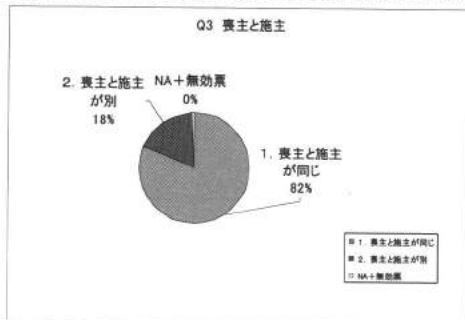
6. それ以外  
 祖母 10票  
 養父 3票  
 養母 3票  
 祖父  
 妹の夫  
 娘婿の祖母  
 叔母  
 孫  
 配偶者の妹  
 いとこ  
 子供の配偶者

(3) 喪主・施主はどのような形で務めましたか。また、亡くなった方からみてどなたが務めたかを下の枠内の番号から選んで ( ) 内にその番号をご記入ください。

1. 喪主と施主が同じ ( 喪主・施主: )

2. 喪主と施主が別 ( 喪主: )  
 ( 施主: )

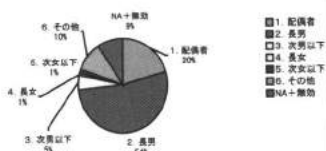
① 配偶者 ② 長男 ③ 次男以下 ④ 長女 ⑤ 次女以下 ⑥ その他 ( )



1. 喪主と施主が同じ	327	82%
2. 喪主と施主が別	73	18%
NA+無効票	2	0%
合計	402	100%

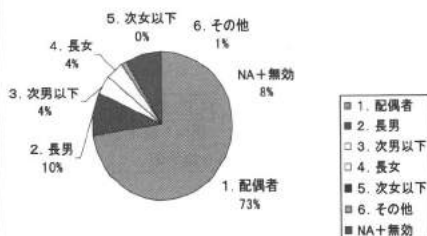
6. その他  
 長女の夫 2票  
 婿養子  
 長女の夫  
 兄  
 妹  
 父  
 親 2票  
 孫 3票  
 養子 6票  
 養母  
 養女の夫

Q3「1. 養主と施主が同じ」内訳



1. 配偶者	67	20%
2. 長男	173	54%
3. 次男以下	16	5%
4. 長女	3	1%
5. 次女以下	4	1%
6. その他	34	10%
NA+無効	30	9%
合計	327	100%

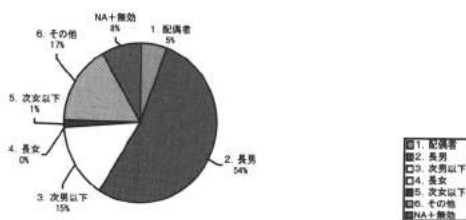
Q3「2. 養主と施主が別」養主内訳



1. 配偶者	53	73%
2. 長男	7	10%
3. 次男以下	3	4%
4. 長女	3	4%
5. 次女以下	0	0%
6. その他	1	1%
NA+無効	6	8%
合計	73	100%

6. その他  
孫

Q3「2. 喪主と施主が別」施主内訳



1. 配偶者  
 2. 長男  
 3. 次男以下  
 4. 長女  
 5. 次女以下  
 6. その他  
 NA+無効

6. その他記述

娘婿 3票  
 長女の夫 2票  
 婿  
 長男の配偶者  
 次男の配偶者  
 親  
 孫 2票

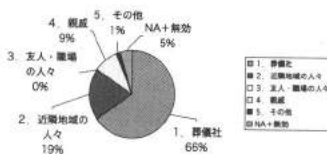
「2. 喪主と施主が別」施主内訳

1. 配偶者	4
2. 長男	39
3. 次男以下	11
4. 長女	0
5. 次女以下	1
6. その他	12
NA+無効	6
合計	73

(4) お葬式の準備・運営にもっとも深く関与されたのはどなたでしたか。以下のなかで一つだけお選びください。

1. 葬儀社
2. 近隣地域の人々 (講・近隣組・町内会・自治会など)
3. 友人・職場の人々
4. 親戚
5. その他

Q4 葬儀の運営

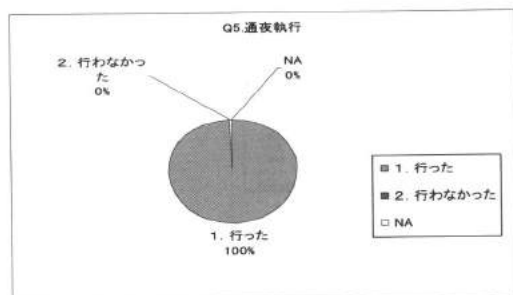


1. 葬儀社  
 2. 近隣地域の人々  
 3. 友人・職場の人々  
 4. 親戚  
 5. その他  
 NA+無効

1. 葬儀社	262	66%
2. 近隣地域の人々	78	19%
3. 友人・職場の人々	0	0%
4. 親戚	37	9%
5. その他	6	1%
NA+無効	19	5%
合計	402	100%

(5) お通夜を行ないましたか。

1. 行なった (→ (5) - 1 ~ (5) - 3にお答えください)  
 2. 行わなかった (→ 次ページ(6)にお進み下さい)

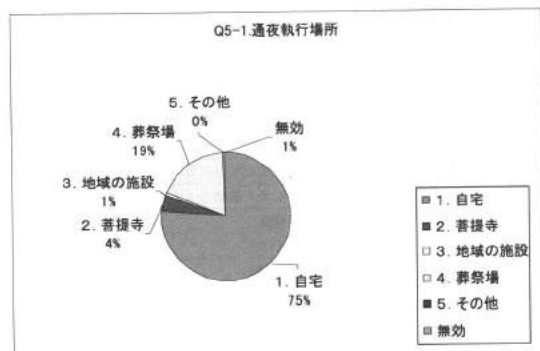


1. 行なった	400	100%
2. 行わなかった	0	0%
NA	2	0%
合計	402	100%

\* (5) で「1. 行なった」と回答された方のみ、次の(5) - 1 ~ (5) - 3にお答えください

(5) - 1 お通夜はどこで行ないましたか。

1. 自宅  
 2. 菩提寺  
 3. 集会所・公民館などの地域の施設  
 4. 葬祭場  
 5. その他(具体的に )

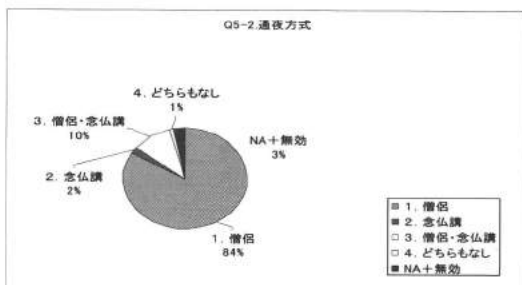


1. 自宅	305	75%
2. 菩提寺	16	4%
3. 地域の施設	3	1%
4. 葬祭場	74	19%
5. その他	0	0%
無効	2	1%
合計	400	100%



(5) - 2 お通夜はどのように行ないましたか。

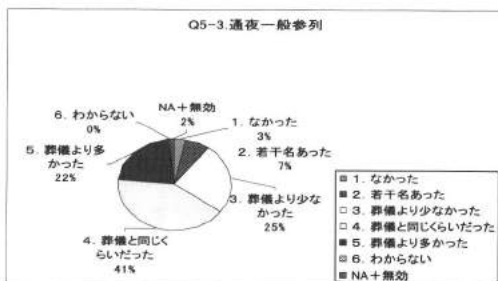
1. 僧侶を招き読経をしてもらった
2. 僧侶を招かずに念仏講に供養をしてもらった
3. 僧侶の読経・念仏講の供養の両方をしてもらった
4. 僧侶の読経・念仏講の供養のどちらもしてもらわなかった



1. 僧侶	334	84%
2. 念仏講	8	2%
3. 僧侶・念仏講	41	10%
4. どちらもなし	5	1%
NA+無効	12	3%
合計	400	100%

(5) - 3 お通夜には、家族・親族・隣組以外の一般参列者がありましたか。

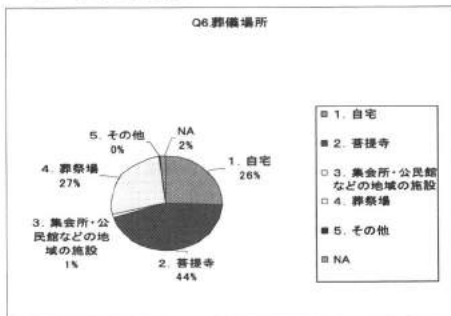
1. なかった
2. 若干名あった
3. 葬儀より少なかった
4. 葬儀と同じくらいあった
5. 葬儀より多かった
6. わからない



1. なかった	12	3%
2. 若干名あった	29	7%
3. 葬儀より少なかった	99	25%
4. 葬儀と同じくらいあった	165	41%
5. 葬儀より多かった	88	22%
6. わからない	1	0%
NA+無効	6	2%
合計	400	100%

(6) 葬儀はどこで行ないましたか。

1. 自宅
2. 菩提寺
3. 集会所・公民館などの地域の施設
4. 葬祭場
5. その他（具体的に



1. 自宅	104	26%
2. 菩提寺	177	44%
3. 集会所・公民館などの地域の施設	5	1%
4. 葬祭場	107	27%
5. その他	2	0%
NA	7	2%
合計	400	100%

(6) - 1 その場所をお決めになった理由は何ですか。

(

)

1. 自宅

故人の希望	8
家族の希望	23
僧侶の指導	1
葬儀社の勧め	0
慣習	19
自宅のできるスペースがあるから	15
その他	3
特になし	2
NA	33
合計	104

2. 菩提寺

故人の希望	9
家族の希望	0
僧侶の指導	3
葬儀社の勧め	0
慣習	53
スペース・施設の問題	26
近いから	3
宗教的雰囲気	1
その他	6
特になし	3
NA	73
合計	177

### 3. 地域の施設

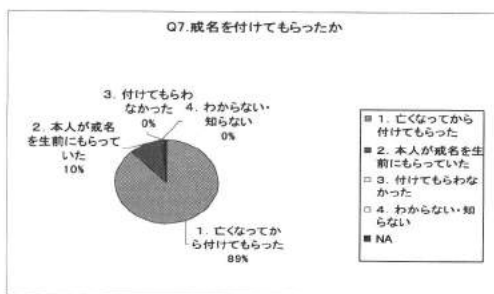
故人の希望	1
スペースの問題	3
その他	1
合計	5

### 4. 葬祭場

故人の希望	0
家族の希望	0
僧侶の指導	1
葬儀社の勧め	2
慣習	0
スペース・施設の問題	27
便利だから	18
近いから	3
駐車場の問題	6
手間が分からない	7
雰囲気が良い	1
互助会に入っていた	12
その他	5
特になし	0
NA	25
合計	107

(7) 亡くなられた方には「戒名」を付けてもらいましたか。

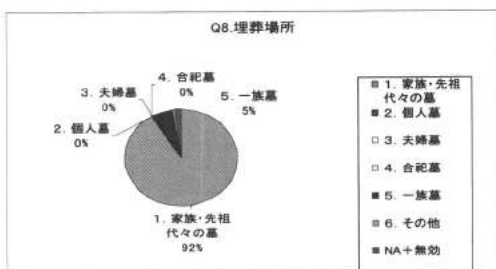
1. 亡くなってから付けてもらった
2. 本人がその戒名を生前にもらっていた
3. 付けてもらわなかった
4. わからない・知らない



1. 亡くなってから付けてもらった	354	89%
2. 本人が戒名を生前にもらっていた	41	10%
3. 付けてもらわなかった	1	0%
4. 分からない・知らない	1	0%
NA	5	1%
合計	402	100%

(8) 亡くなった方を埋葬した場所はどのような墓ですか。

1. 家族・先祖代々の墓
2. 個人墓 (一人用の墓)
3. 夫婦墓 (夫婦のみで埋葬する墓)
4. 合祀墓 (他人の遺骨と一緒に埋葬する墓)
5. 一族墓 (一族と一緒に埋葬する墓)
6. その他 (具体的に )

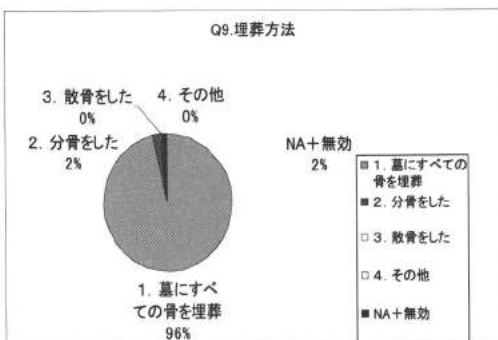


1. 家族・先祖代々の墓	366	92%
2. 個人墓	0	0%
3. 夫婦墓	1	0%
4. 合祀墓	2	0%
5. 一族墓	22	5%
6. その他	4	1%
NA+無効	7	2%
合計	402	100%

6. その他  
 新家のために新しく作った墓  
 墓地のみ購入。遺骨はお寺か預かっ  
 てある。  
 はじめての墓 (新しい墓)

(9) 亡くなったご家族の埋葬方法はどのようなものでしたか。

1. 墓にすべての骨を埋葬 (→ 次ページ (10) にお進みください)
2. 分骨をした (→ 次ページ (9) - 1・(9) - 2にお答えください)
3. 散骨をした (→ 次ページ (9) - 3・(9) - 4にお答えください)
4. その他 ( ) (→ 次ページ (10) にお進みください)

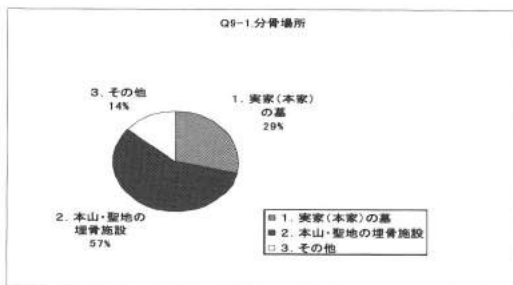


1. 墓にすべての骨を埋葬	387	96%
2. 分骨をした	7	2%
3. 散骨をした	1	0%
4. その他	0	0%
NA+無効	7	2%
合計	402	100%

.....  
 \* (9)で「2. 分骨をした」と回答した方のみ、(9) - 1・(9) - 2にお答えください

(9) - 1 分骨はどこにしましたか。

1. 実家（本家）の墓
2. 本山・聖地の埋骨施設
3. その他（具体的に )

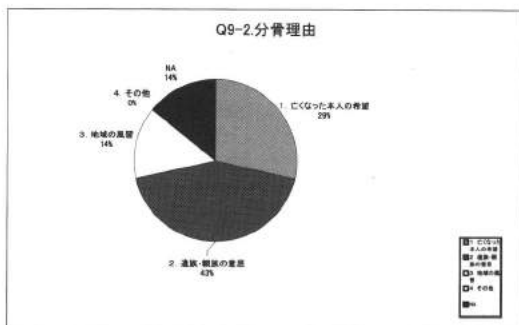


1. 実家（本家）の墓	2
2. 本山・聖地の埋骨施設	4
3. その他	1
合計	7

その他  
 フィリピン・ラグナ州

.....  
 (9) - 2 その分骨はどのような理由によるものですか。

1. 亡くなった本人の意思
2. 遺族・親族の意思
3. 地域の風習
4. その他（具体的に )



1. 亡くなった本人の希望	2
2. 遺族・親族の意思	3
3. 地域の風習	1
4. その他	0
NA	1
合計	7

.....  
\* (9) で「3. 散骨をした」と回答した方のみ、(9) - 3・(9) - 4にお答えください

(9) - 3 散骨の形態を教えてください。

1. 全骨を散骨
2. 遺骨の一部を散骨

NA	1
----	---

.....  
(9) - 4 散骨をした場所を教えてください。( \* 具体的な散骨場所も教えてください )

1. 本人が希望した場所 ( )
2. 遺族が希望した場所 ( )
3. 業者の指定場所 ( )
4. その他 ( )

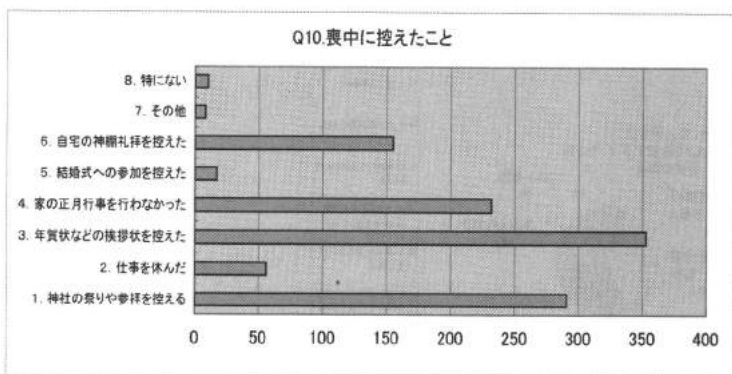
NA	1
----	---

-----  
(10) 葬式後、喪中に慎んだことは何でしたか。以下の選択肢で該当するものすべてに○をつけてください。

1. 神社の祭りや参拝を控える
2. 仕事を休んだ ( 具体的な仕事を記してください )
3. 年賀状などの挨拶状を控えた
4. 家の正月行事を行わなかった
5. 結婚式への参加を控えた
6. 自宅の神棚礼拝を控えた
7. その他 ( 具体的に )
8. 特にない

「7. その他」 外出の回数 魚釣りなどの殺生を控えた 結婚した子供に正月の挨拶を控える様事前に伝え た。 殺生をしない 四十九日迄は家を空けないようにした。 喪中 (49日) の間、1~6の行事がなかつ た 毎年参加する老人クラブの行事を控えた 旅行などは慎んだ
--

「2. 休んだ仕事」具体 会社員 7票 会社役員 会社の決められた休日 会社員7日休んだ 公務員 3票 自営業 3票 音楽関係 菓子販売業 (約1週間) 経理事務 大工 販売員 福祉関係 亡くなった人の用具、用品のか たづけ 理容部 NA 3票
--



Q10.葬式後、喪中に慎んだこと

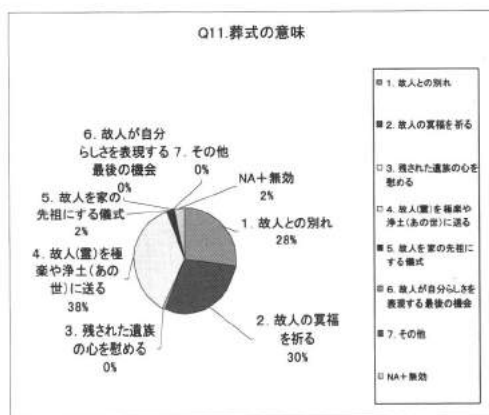
1. 神社の祭りや参拝を控える	291	72%
2. 仕事を休んだ	56	13%
3. 年賀状などの挨拶状を控えた	353	87%
4. 家の正月行事を行わなかった	232	57%
5. 結婚式への参加を控えた	17	4%
6. 自宅の神輿礼拝を控えた	155	38%
7. その他	8	1%
8. 特になし	10	2%
合計(複数回答)	1122	

(11) ご家族の葬式を行われて、葬式のもっとも大きな意味は何だったと思いますか。一つだけお答えください。

1. 故人との別れ
2. 故人の冥福を祈る
3. 残された遺族の心を慰めること
4. 故人(霊)を極楽や浄土(あの世)へ送る
5. 故人を家の先祖にする儀式
6. 故人が自分らしさを表現する最後の機会
7. その他(具体的に)

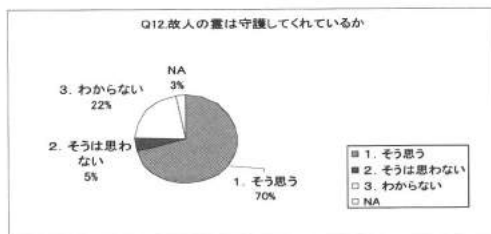
7. その他
お世話になった人への最後の挨拶、別れ

1. 故人との別れ	111	28%
2. 故人の冥福を祈る	119	30%
3. 残された遺族の心を慰める	2	0%
4. 故人(霊)を極楽や浄土(あの世)へ送る	149	38%
5. 故人を家の先祖にする儀式	8	2%
6. 故人が自分らしさを表現する最後の機会	2	0%
7. その他	1	0%
NA+無効	13	2%
合計	402	100%



(12) 故人の霊は、あなたを護ってくれていると思いますか。

1. そう思う
2. そうは思わない
3. わからない



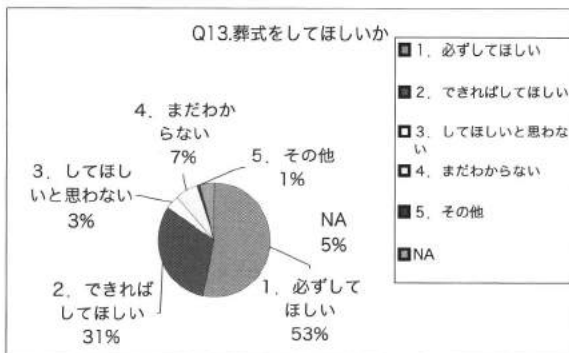
1. そう思う	283	70%
2. そうは思わない	19	5%
3. わからない	87	22%
NA	13	3%
合計	402	100%

## II あなた自身のお考えについてお伺いします

(13) あなたは、ご自分が亡くなった際には、葬式をしてほしいと思いますか。

1. 必ずしてほしい (→ (13)-1 ~ (13)-3にお答えください)
2. できればしてほしい (→ (13)-1 ~ (13)-3にお答えください)
3. してほしいとは思わない (→ (13)-4にお答えください)
4. まだわからない (→ (14)にお進みください)
5. その他(具体的に ) (→ (14)にお進みください)





- 1. 必ずしてほしい
- 2. できればしてほしい
- 3. してほしいと思わない
- 4. まだわからない
- 5. その他
- NA

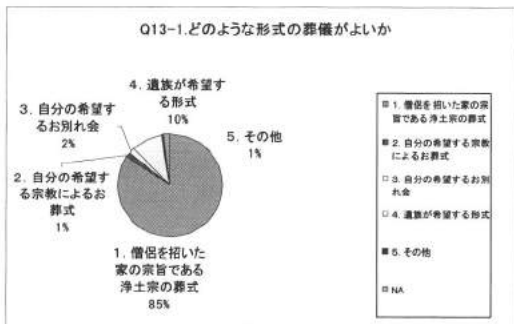
5. その他  
残された者に任せる  
その時代の  
妻と子の意志に任せたい

1. 必ずしてほしい	213	53%
2. できればしてほしい	125	31%
3. してほしいと思わない	14	3%
4. まだ分からない	27	7%
5. その他	3	1%
NA	20	5%
合計	402	100%

＊ (13) で「1. 必ずしてほしい」・「2. できればしてほしい」と回答した人のみ、  
(13) - 1 ～ (13) - 3 にお答えください。

(13) - 1 あなたは、どのような形式のお葬式を望みますか。

1. 僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式
2. 自分の希望する宗教による葬式
3. 自分の希望するお別れ会
4. 遺族が希望する形式
5. その他 (具体的に )



- 1. 僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式
- 2. 自分の希望する宗教によるお葬式
- 3. 自分の希望するお別れ会
- 4. 遺族が希望する形式
- 5. その他
- NA

1. 僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式	289	85%
2. 自分の希望する宗教によるお葬式	5	1%
3. 自分の希望するお別れ会	7	2%
4. 遺族が希望する形式	33	10%
5. その他	2	1%
NA	2	1%
合計	338	100%

その他  
NA

(13) - 2 あなたのお葬式の会葬は、どの範囲の人々に来てほしいと思いますか。

1. 家族のみ
2. 家族・親族
3. 家族・親族・地域の人々
4. 家族・親族・地域の人々・友人
5. 家族・親族・地域の人々・仕事関係の人々
6. 家族・親族・地域の人々・友人・仕事関係の人々
7. 家族・親族・地域の人々・友人・仕事関係の人々・遺族の関係の人々
8. その他 (具体的に)

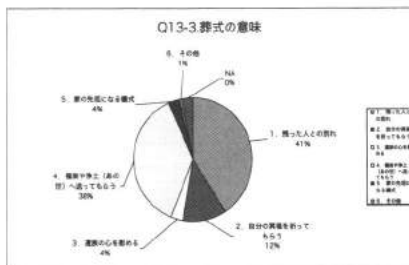
1. 家族のみ	8	2%
2. 家族・親族	44	13%
3. 家族・親族・地域の人々	29	9%
4. 家族・親族・地域の人々・友人	100	29%
5. 家族・親族・地域の人々・仕事関係の人々	24	7%
6. 家族・親族・地域の人々・友人・仕事関係の人々	39	12%
7. 家族・親族・地域の人々・友人・仕事関係の人々・遺族の関係の人々	87	26%
8. その他	7	2%
NA	0	0%
合計	338	100%

8. その他  
関係者で来てくれる人のみでよい  
ほんとうにきたい人だけ  
会葬者の範囲は特にこだわらない  
家族、親族、友人  
家族と友人  
特にないか、故人を偲んでくれる人  
限定しない

(13) - 3 あなたは、自分のお葬式にどのような意味があると思いますか。

(ひとつだけお答えください)

1. 残った人との別れ
2. 自分の冥福を祈ってもらう
3. 遺族の心を慰める
4. 極楽や浄土 (あの世) へ送ってもらう
5. 家の先祖になる儀式
6. その他 (具体的に)



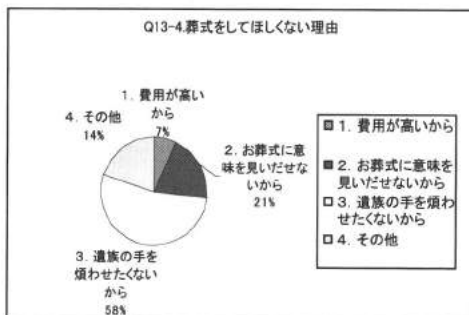
1. 残った人との別れ	142	41%
2. 自分の冥福を祈ってもらう	41	12%
3. 遺族の心を慰める	13	4%
4. 極楽や浄土 (あの世) へ送ってもらう	127	38%
5. 家の先祖になる儀式	13	4%
6. その他	2	1%
NA	0	0%
合計	338	100%

6. その他  
生前のお礼と主人の許へ送って戴く  
家族に死を納得してもらう為

\* (13) で「3. してほしいとは思わない」と回答された方のみ、Q13-4にお答えください。

(13) - 4 あなたは、自分の葬式をしてほしくないと考える理由は何ですか。

1. 費用が高いから
2. お葬式に意味を見いだせないから
3. 遺族の手を煩わせたくないから
4. その他 (具体的に: )

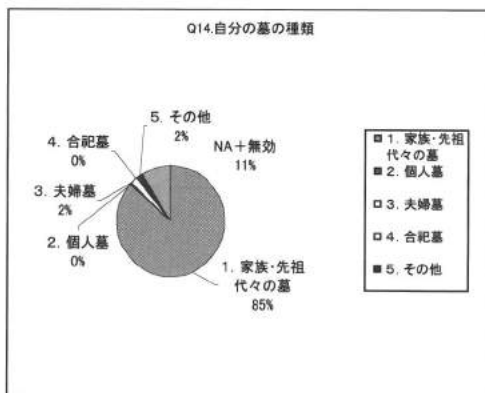


1. 費用が高いから	1	7%
2. お葬式に意味を見いだせないから	3	21%
3. 遺族の手を煩わせたくないから	8	58%
4. その他	2	14%
合計	14	100%

4. その他  
死んでまで他人に知らせたくない  
単身だから。  
身近、ごく親しい友人に手を合わせてもら  
い、送ってもらえれば十分。式はいらない。

(14) ご自分の墓はどのような場所を希望しますか。

1. 家族・先祖代々の墓
2. 個人墓 (家族や夫婦と一緒にではなく、一人用の墓)
3. 夫婦墓 (夫婦のみで埋葬する墓)
4. 合祀墓 (多くの人と共同で使用される墓)
5. その他 (具体的に )

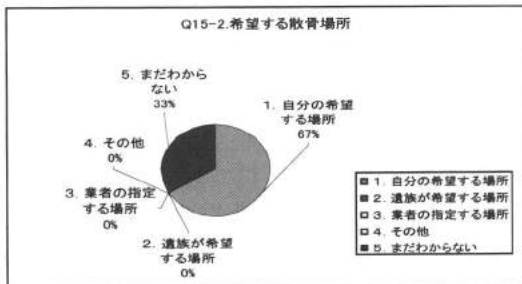


1. 家族・先祖代々の墓	342	85%
2. 個人墓	2	0%
3. 夫婦墓	7	2%
4. 合祀墓	1	0%
5. その他	7	2%
NA+無効	43	11%
合計	402	100%

5. その他  
散骨希望  
あまり考えてない、家族に任せる  
散骨  
どこでもよい  
山  
遺族の意志に任せる。  
まだわからない。合祀墓か散骨でもいい。  
散骨するなら全部を散骨。雪の降る山か  
沖繩の海。

(15) - 2 あなたは自分の散骨をしたい場所をどこに考えていますか。  
 (\*具体的な散骨場所も教えてください)

1. 自分が希望する場所 (具体的に )
2. 遺族が希望する場所 (具体的に )
3. 業者の指定する場所 (具体的に )
4. その他 (具体的に )
5. まだわからない

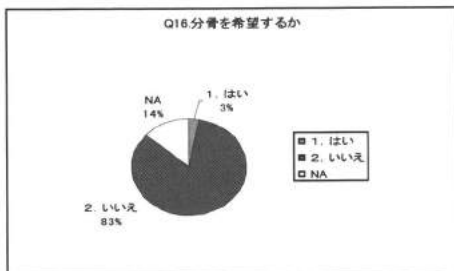


1. 自分が希望する場所	6
2. 遺族が希望する場所	0
3. 業者の指定する場所	0
4. その他	0
5. まだわからない	3
NA	2
合計	11

1. 自分が希望する場所 記入  
 海 2票  
 空・海・山  
 自然景観の良いところ  
 山

(16) あなたは分骨を希望しますか。

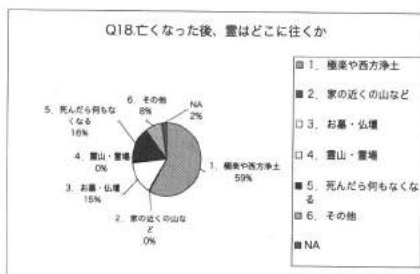
1. はい (→ (16) - 1にお答えください)
2. いいえ (→ (17)にお進みください)



1. はい	13	3%
2. いいえ	332	83%
NA	57	14%
合計	402	100%

(18) あなたは亡くなった後、あなたの霊はどこに往くと思いますか。

1. 極楽や西方浄土
2. 家の近くの山など
3. お墓・仏壇
4. 霊山・霊場 (具体的に )
5. 死んだら何もなくなる
6. その他 (具体的に )

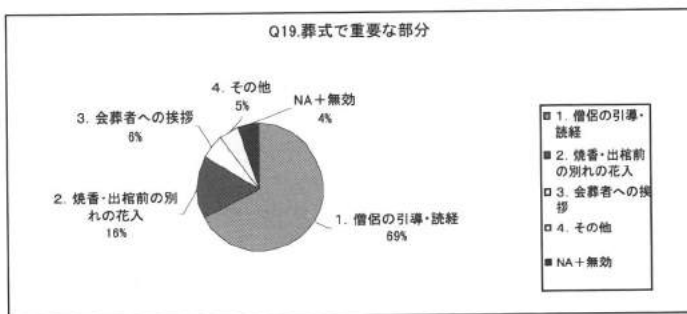


1. 極楽や西方浄土	233	59%
2. 家の近くの山など	2	0%
3. お墓・仏壇	60	15%
4. 霊山・霊場	2	0%
5. 死んだら何もなくなる	64	16%
6. その他	31	8%
NA	10	2%
合計	402	100%

6. その他  
 当分 (3年) は自宅の近く (時にふれ出てきた!! 祖父が1年間自宅辺りにいたようだ) にお見守りではないか。その後の往く先は不明。  
 5.と思っておりますが、1も願っています。  
 どこかに漂っている。  
 家族の住む地下  
 天国  
 極楽浄土へいけたらいいと思いますが、多分いけないと思います  
 霊界  
 まだ信じられない  
 生前お世話になった人達を見守ってあげられる身近に居ると思う  
 遺族の心中  
 遺族の心  
 どこかで家族を見守ると思うがそのどこかわからない  
 天界より家族、子孫を見護る  
 真如霊界  
 個々の心の中  
 主人のもと  
 極楽や西方浄土という気持ちもあるが、何もなくなるという考えもある。  
 どこに往くかはよくわからないが、魂は必ず存在していると思う。  
 よくわからない... それについてはいつも、どこへ行くのだろうかとうふしぎに思っています... みてみたいものです  
 わからない 11票

(19) あなたは、葬儀式の以下のどの部分が一番重要だと思いますか。

1. 僧侶の引導・読経
2. 焼香・出棺前の別れの花入れ
3. 会葬者への挨拶
4. その他（具体的に： )



1. 僧侶の引導・読経	278	69%
2. 焼香・出棺前の別れの花入れ	64	16%
3. 会葬者への挨拶	25	6%
4. その他	20	5%
NA+無効	15	4%
合計	402	100%

質問は以上です。どうもありがとうございました。

# 静岡教区葬祭アンケート 一次結果分析

平成十七年六月九日

## ・アンケートについて

平成十六年八月、静岡教区寺院一二四ヶ寺に檀信徒を対象としたアンケート用紙を十票ずつ郵送（計一二四〇票）した。各寺院の住職が、平成元年以降に葬儀を行なった檀信徒十名にアンケート用紙を配布し、アンケートに回答してもらった。

回収方法は、アンケート回答者が浄土宗総合研究所宛に直接郵送する形式をとった。回収数は四四三票（回収率35.6%）で、有効回答数は四〇二票（無効票四十一票）であった。

## ・アンケートの分析について

全項目について単純集計を行い、重要な項目についてはクロス集計を行い分析を行なった。

## 回答者の属性

性別 男性が二五九人（65%）で、女性が一四二人（35%）、性別不明が一人である。男性が女性の二倍の数を占める。

年齢 50、60、70代で80%以上を占めており、主な回答者層となっている。

同居家族 回答選択肢のなかに不備があったため、今回このデータは使用しない。

居住地の特性 静岡県では、大都市（人口50万人以上）は静岡市と浜松市の2都市、中都市（人口10万以上50万未満）は小都市であり、それ以外は人口10万人以下の小都市である。

回答者の居住地域は、大都市95人、中都市92人、小都市21人となっている。

居住年数・菩提寺との付き合い年数 回答者の現在地の居住開始期をみると、「自分の代から」が41%、「自分の生れる前から」が59%である。「自分の代から」と回答した人の49%が三十一年以上にわたり現在地に住んでいると回答している。また菩提寺の付き合いを見ると、8割の人々が「昔からの檀家」もしくは「親の代から」と答えている。これらのことから、長い年月定住し、寺とのつながりも長い人々が回答者の多くを占めていることがわかる。

Q1 平成十四〜十六年の三年間で家族の葬式を経験した人は50%、さらに平成十年からの七年間で見ると76%を占め、近年になるほど回答者数は多くなっていることが分かる。

Q2 「配偶者」24%、「実父または実母」51%、「配偶者の父または母」13%となっており、この三つの回答で88%を占めることは、当然の結果と言えるであろう。回答者別に見ると、五十代から六十代の回答者は親の葬式を経験した人が中心、七十代では親と配偶者の葬儀が半々、八十歳以上では配偶者の葬式を経験した人が中心となっている。

ここで「配偶者の父または母」と回答した13%（計五十一人）の人々については一考を要する。この回答に男女のクロスをかけたところ、男性二十六人、女性二十五人であることが判明した。この男性二十六人の経験した葬式とは、同居家族でない人の葬式であった可能性があり、この質問では正確に把握できないことが判明した。今後の調査においては、修正すべき点である。

Q3 「喪主と施主が同じ」が82%、「喪主と施主が別」が18%となっている。「喪主と施主が同じ」が82%を占めることは、伝統的な価値観を強く受け継いでいるとも



思える。しかし、その内訳を見ると、喪主・施主を長男が務めた場合は54%に過ぎず、他の回答も多岐にわたっていることがわかる。これは現代においては、家族の形態や生活スタイルが、様々になっていることと関連しているかもしれない。

また、「喪主と施主が別」との回答が18%あることは注目すべきことである。「喪主と施主が別」という場合で、喪主と施主を誰が務めたかという質問では、喪主を「配偶者」が73%であり、施主は「長男」と「次男以下」の合計が69%を占める。つまり、葬儀の金銭的負担を負う施主は息子が務めるが、喪主は故人に一番近しかった配偶者が務めるというパターンが比較的多く見られるということである。「伝統的には葬儀の喪主は家の継承者を社会的に表示する役割を担っていた」ということから考えると、葬儀にも個人主義化の傾向が見られることになろう。

Q4 「葬儀社」が66%という高い比率を示している。「近

隣地域の人びと」が19%であるという結果は、地域社会の弱体化によって、葬儀の中心的担い手が葬儀社に移っていることを表している。

Q5 回答者の100%が通夜を行なっている。通夜の場合は自宅が75%、菩提寺が4%、葬祭場が19%となっている。このことは、静岡においては自宅で通夜を行なうということが伝統的習慣であり、依然としてこの習慣が強く残っていると見える。しかし、葬祭場の比率も高いことから、徐々に自宅から葬祭場での通夜へと変化しつつあると考えることも出来よう。

念仏講が12%の通夜に関与していることが注目されるが、これに関しては他地域との比較が待たれる。

通夜の参列者の数からは、通夜の意味自体が変化していることが指摘できる。「葬儀と同じくらいであった」41%、「葬儀より多かった」22%の合計で63%を占める。伝統的には通夜は近しい人たちだけで行なうものであった。しかし、通夜に来る人が増加し、現在では通夜は葬

儀と同じ程度の人々が集まる場となっていることがわかる。一般会葬者にとっては、通夜が告別式としての役割を持つている状況がうかがえよう。

Q6 静岡教区の特徴は、通夜と葬儀の場所を変えることが多いということである。アンケートの結果からは、通夜は自宅でおこない、葬儀は寺または自宅で行なうというのが通常であるように見受けられる。しかし、葬祭場での通夜が19%なのに対し、葬儀では27%と増加していることは自宅や菩提寺で行なう葬儀から葬祭場での葬儀へと移行していることを伺わせる。

場所を決めた理由を見ると、自宅で葬儀を行なっている場合は、「家族の希望」、「慣習」、「自宅で出来るスペースがあるから」という理由となっている。また、菩提寺の場合では、「慣習」、「スペース・施設の問題」がその理由である。

葬祭場で葬儀を行なった理由は「スペース・施設の問題」、「準備などの問題を含めた利便性の問題」がその主

たるものとなっている。葬祭場の利用が増加した理由には、葬儀の準備などを担っていた地域社会が弱体化というところが挙げられよう。

Q7 「生前に戒名をもらっていた」人が10%を占めることは注目される。この要因は不明であるが、五重相伝や授戒会の実施と関係があるのだろうか。他地域との比較が待たれる。

Q11 「個人化」が進んでいるといわれる現代において、「故人との別れ」という回答が多いことが予想された。しかしながら、「故人（霊）を極楽や浄土へ（あの世）へ送る」という回答が38%と最も多くを占めており、男女、年齢問わずに多くの割合を占めていることは注目に値する。「故人の冥福を祈る」が30%、「故人との別れ」は28%となっている。他地域との差異が予想される設問であり、比較が待たれる。

Q 12 「故人の霊が護ってくれている」と考えている人が70%と高い割合をしめている。性別で見ると、「そう思う」と回答した人は、男性66%、女性78%となっており、女性のほうが高い。また、「そうは思わない」と回答した人は男性7%、女性1%となっており、総じて女性の方が霊の存在に対して強い肯定性を持っていることがわかる。

五十代・六十代には否定的な意見が見られ、「分からない」と回答した人が20%を超えていることは注目される。この世代への教化活動の強化が必要であるといえる。

Q 13 「必ずしてほしい」53%、「出来ればしてほしい」31%となっているように、葬儀を行ないたいと考えている人が8割を超え、大多数の人が葬儀に何らかの積極的意味を見出していることがわかる。

しかし一方で、「して欲しいとは思わない」に「まだ分からない」という消極的否定意見を含めると10%ある

ことも注目しなければならない。また、年齢が下がるに従い、「必ずして欲しい」の割合が減少し、「まだ分からない」の割合が増加していることも見逃せない点である。「必ずして欲しい」と回答した人の男女比を見ると、男性58%、女性44%と開きがある。社会的な意味合いでの葬儀の役割に対して、男女での捉え方に違いがあるといえるのではないだろうか。

Q 13-1 「僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式」という回答が84%と高い割合を占めている。檀信徒に対する調査なので、当然の結果と言えるだろう。男女比を見ると、男性88%、女性は82%と男性のほうが高くなっている。男女による檀信徒としての宗派意識、帰属意識の違いが現れているといえなくもない。

Q 13-2 「家族のみ」、「家族・親族」という回答の合計が15%を占め、「葬儀を狭い範囲の人々だけで済ませ

う」という考えを持った人が比較的多く存在することがわかる。男女別に見ると、女性は回答1・4、つまり近い人間関係の回答に集中し、男性では回答6・7という広い人間関係の人々に来て欲しいと考えている人が多い。これは、男性と女性での普段関わっている人々の関係性を反映してると考えられる。

この設問は地域によって相違が予想され、他地域との比較が待たれるところである。

Q13-3 「残った人との別れ」が41%と高くなっている。続いて「極楽や浄土(あの世)」に送ってもらおう」が38%となっている。この回答は、問11で尋ねた「回答者が体験した家族の葬式において感じた葬式の意味」との相違が見られる。問11では「故人の冥福を祈る」、「故人を極楽や浄土に送る」、「故人との別れ」がほぼ同じくらいの割合であったが、この設問で尋ねたように、自分の葬式の場合には「冥福を祈ってもらう」の割合が低くな

り、「残った人との別れ」が増加している。これは、自分自身が「送る側」なのか、「送られる側」なのかという立場の違いによって、回答に相違が出ているのだろう。

Q13-4 「してほしいと思わない」と回答した人は14人と少数であるが、その理由のなかで最も多いのは、「遺族の手を煩わせたくないから」が8人(58%)であった。一方、「費用が高いから」という理由は1人だけである。「葬儀に伴う手間やわずらわしさを当然のものとして受け入れる」という価値観が揺らいでいることが伺える。

Q14 「家族・先祖代々の墓」という回答が87%と圧倒的多数を占めている。しかし、数は少ないものの、家族より小さな単位を基本とする個人墓、夫婦墓、合祀墓という多様な形態が出現していることは注目すべきである。

Q 15 散骨を希望する人は11人(3%)と少ない。散骨を希望する人の多くが「自分の希望する場所」に散骨して欲しいと考えている。

Q 16 分骨を希望する人は13人(3%)と少数であり、そのうち「実家の墓」に分骨したい人は8人である。その男女比を見ると女性が5人、男性が3人で、女性の方が多く、全回答者の男女比を考慮すると、女性の比率が一層高いことがわかる。それぞれが分骨を希望する人は、自分の生地とのつながりを求める意識からであることが推測できよう。

分骨は地方によって風習が異なるので、全国調査が持たれる。

Q 17 「戒名を欲しいと思う・すでももっている」と答えた人が50%、「俗名で良い」は20%、「まだ分からない」は26%となっている。男女別では比率に差は無いが、年

齢別で見ると、「戒名を欲しいと思う」人は、年齢が下がるに従い低くなっている。

問7では、回答者が体験した葬儀についての戒名について尋ねているが、そこでは「亡くなってからつけてもらった」89%、「本人がその戒名を生前につけてもらった」が10%であり、「付けてもらわなかった」が1人(0%)であった。それと比較すると、回答者本人の場合においては「俗名で良い」と思っている人が激増することは注目すべきことだろう。

また「戒名を欲しいと思う・すでに持っている」と答えた人の86%が「浄土宗の葬式を行なって欲しい」と答えているが、「まだ分からない」と応えた人では61%、「俗名で良い」と応えた人では48%となっており、その割合が減少していることから、戒名の意味を伝えることがいかに重要であるかがわかる。

「俗名でよいと答えた」人でも、その70%は葬式を「必ずして欲しい」もしくは「できればして欲しい」と回答

していることから、「葬儀には意味を見出すが、戒名に対しては意味を見出せない」という人が多く存在していることが指摘できよう。

Q 18 死後「極楽や西方浄土」に行くと回答した人が59%と圧倒的多数となっている。「極楽や西方浄土」に行くとは回答した人を男女別に見ると、男性が55%に対して、女性が63%と多い。一方、「死んだら何もなくなる」は男性20%、に対して女性9%である。男性の方が来世や死後の存在に対して否定的であることが分かる。特に五十代・六十代の男性に否定的な意見が多いことは注目される。

Q 19 「僧侶の引導・読経」と答えた人が69%と圧倒的多数を占めている。「お別れ会形式」など様々なスタイルの葬式の出現が指摘されている現在においては、注目すべき結果であろう。他地域との比較が待たれるところである。

# 仏説無量寿経 卷下

曹魏において、インド圏内出身の三蔵法師・康の国の僧鎧が訳す

釈尊が〔私〕阿難に仰せになった。

「さて、誰であれ〔無量寿仏の極楽〕世界に往生する者は、みなことごとく〔煩惱を滅した〕覺りの境地に至るまで退転することがないという「正定聚」の仲間に入る。なぜかという、その世界には〔地獄・餓鬼・畜生の三悪道に墮ちる〕「邪定聚」がなく、また〔必ず覺りの境地に至れるとは限らない〕という「不定聚」もいないからである。」〔だからこそ〕あらゆる世界のガンジス河の砂の数にも等しいさまさまな仏たちは、こぞつてみな無量寿仏の強大な力にもなう人知の想像を絶した功德を称讚するのである。〔そして、〕それらの〔世界の〕人々が〔諸仏によつて称えられる無量寿仏の〕名を耳にして、〔自らもその仏に〕想いを募らせ、〔その仏に〕夢

中になつて、たとえ一遍であつても心の底から念仏を称えて、かの極楽世界に往生したいと願うならば〔命終の後には他の世界を経ずに〕直接〔極楽世界への〕往生がかない、覺りの境地に至るまで退転することはない。ただし〔よく心得よ〕。五逆罪を犯した者と仏の教えを諍る者はその限りではない。」

〔再び〕釈尊が阿難に仰せになった。

「あらゆる世界の天人や人々の中で、誰であれ心の底から〔無量寿仏の極楽〕世界に往生したいと願う者は、おおよそ次のような三通りのタイプに分けられる。

〔まず〕その〔第一は〕「上輩」の者である。彼らは出家して諸々の欲望を捨て去ろうと〔人里離れた場所です修行に励む〕沙門となり、覺りを目指す心を起こした上で、

ただひたすら無量寿仏〔を慕つてそ〕の名を称え、さらに諸々の功德を積んで〔極楽〕世界に往生したいと願う〔者たちである〕。こうした者たちが命尽きようとする時、無量寿仏は〔極楽の〕聖者たちとともに、その〔眼の〕前に姿を現すのである。〔そして無量寿〕仏〔の後ろ〕に付き随つて〔極楽〕世界に往生し、〔その極楽の池の〕七つの宝石できてゐる蓮の華の中に忽然と生ずるのだ。〔そして〕覺りに至るまで決して退転することのない境地に立つて〔歩を進め〕、智慧を究め〔わずかな迷いでさえ断ち切ろうと〕果敢に精進し、神通力を自在に駆使するのである。だからこそ阿難よ。今生において衆生が無量寿仏に見えたいと望むとすれば、やはり〔沙門となつて〕この上ない覺りを目指す心を起し、さまざまな善行を修めて、極楽世界に往生したいと願うべきなのである。」

〔続けて〕 釈尊が阿難に仰せになつた。

〔第二は〕 中輩の者である。彼らはあらゆる世界の天人や人々の中で、心の底から〔無量寿仏の〕世界に往生

したいと願いつつも、出家がかなわず〔上輩のように〕沙門となつて優れた善行を修めることができないままでゐる。しかしながら、この上ない覺りを目指す心を発し、ただひたすら無量寿仏を慕つてその名を称える〔者たちなのである〕。〔ただし〕、多かれ少なかれ〔でき得る範圍での〕善行を積んでいるのだ。〔たとえば教えに従つて定められた日に身心を清らかにたもつという〕齋戒を守り、〔あるいは〕仏塔や仏像を造立し、沙門に食べべ物や飲み物を供養し、色鮮やかな布切れを紐に連ねて仏塔や仏像に飾り付け、灯明を捧げ、花びらを撒き、香を焚いて〔供養するのである〕。そしてこれら〔の善行の功德〕を振り向けて、〔極楽〕世界に往生したいと願つていれば、その人が命尽きる時、無量寿仏は〔極楽世界にいながらにして〕、その容貌といい、〔全身から発する〕光明といい、寸分違わぬ〔自身の〕姿をその人の目の前に映し出すのである。〔また極楽世界の〕聖者たちの姿も、無量寿仏とともに映し出されるのだ。そして〔中輩の者は無量寿仏の〕お姿〔の後〕を追つて〔極楽〕世界に往生す



るのである。「そして」覺りに至るまで決して退転することのない境地に立つて（歩を進め）、功德を積むこと、智慧を究めることは上輩とほとんど変わりがない。<sup>2</sup>」

「さらに」釈尊が阿難に仰せになった。

「第三は」下輩の者である。彼らはあらゆる世界の天人や人々の中で、心の底から「無量寿仏の」世界に往生したいと願いつつも、「上輩や中輩のように」さまざまに善行を修められないでいる。しかしながら、この上ない覺りを目指す心を発し、ただひたすら無量寿仏を慕って、少なくとも十遍その名を称えて「極樂」世界に往生を願う「者たちなのである」。「彼らは無量寿仏の」救いを耳にして、身心に喜びが満ち、それを深く信じて疑いを挟むことなく、一遍でもその名を称えて、嘘偽りのない心で極樂世界に往生したいと願っていけば、彼らの臨終の時にはまるで夢の中にいるかのように「無量寿仏の」お姿を拝見し、「なおかつ極樂世界へと」往生がかなうのだ。「しかも往生の後には、極樂世界で」功德を積み、智慧を究めることは中輩とほとんど変りがない。」

「さて」釈尊が阿難に「次のように」仰せになった。

「無量寿仏が具える強大な力には際限がない。「だからこそ」果てし無く広がるあらゆる世界に数限りなくおられる多くのみ仏たちは、「無量寿仏を」褒め称えないということがない。東方に広がるガンジス河の砂の数ほどに多いさまざまな仏の世界にいる数限りなく多くの菩薩たちは、みなことごとく無量寿仏のもとへと詣でて、無量寿仏をはじめ「極樂世界の」すべての菩薩・声聞・往生人を恭しく「礼拝して」供養を捧げ、「無量寿仏の」説法を聴聞した後、「自身の世界に戻って」その救いの教えを説き弘める。南方（の仏の世界の菩薩たちも同様であり）、西方・北方、東南・西南・東北・西北の四維、さらには上下（の仏の世界の菩薩たちも）同じ様「に実践するの」である。」

釈尊はその「ようにお説きになった」ところで、次のような詩句を詠ぜられた。

#### ○東方偈

「東の方角にはガンジス河の砂の数ほどの

限りなきみ仏たちの国々が広がっている

その国々の菩薩たちは〔極楽世界に〕赴いて

無量寿仏に会い見える

南方・西方・北方・四維・上下にも

〔ガンジス河の砂の数ほど限りなき

み仏たちの国々が広がっている〕

各々の国の菩薩たちも〔極楽世界に〕赴いて

無量寿仏に会い見える。

このすべての菩薩たちは

みなそれぞれに天界の妙なる花をお供えし

宝の如く〔気品あふれる〕香を焚き

この上なく高貴な織物を捧げて

無量寿仏を供養する

さらには一同に会して

天界に流れているという妙なる調べを奏で

雅やかで心地よい音色を響かせ

〔この方こそ〕最も優れたみ仏と讃えて歌い上げ

無量寿仏を供養する

《無量寿仏よ あなた様の》

神通力や智慧のはたらきは究め尽され

奥深い覚りの世界の門を開いては

思いのまま出入りし

〔あらゆる〕功德が入っている蔵を我が物とし

その智慧の深さは比類ありません

〔またあなた様は〕太陽のように明るい

智慧の光を放って世界を照らし

生死〔輪廻をもたらず〕迷いの雲を

ことごとくかき消されます》

〔菩薩たちは無量寿仏を敬い〕

その周りを右にめぐること三度繰り返し

〔さらには〕この上ない御仏に礼拝して

大地に頭を額すく

〔顔を上げ〕その世界が清らかな莊嚴で

満たされているのを見渡たすと

〔その光景は〕想像を超える絶妙さである

それ故この上ない〔大いなる〕心を発す

《自ら建立する世界もまたこのように整えたい》と

その時を見極めた無量寿仏は

顔をほころばせ

笑みをたたえたと。

口から計り知れない光を放ち

あらゆる世界を隈なく照らし出す

その光は〔無量寿仏の自身〕身体を三回めぐつて

頭の頂に入り込む

それを見ていた〔極楽世界の〕天人や人々は

飛び上がるほど大いに喜ぶ

その時 観世音菩薩が衣服を整え〔かしこまり〕

〔無量寿仏に対し〕大地に頭を額づけ

礼拝し質問をする

《おうかがい致します

み仏はなに故に今

笑みをたたえられたのでしようか

その理由をお聞かせください》

〔すると無量寿仏は〕あたかも梵天王が

雷鳴を轟かせるように〔極楽世界を振るわせ〕

八種の音質をともなつた妙なる声を発する

《〔この極楽世界にやつて来た〕菩薩たちに

必ずや仏となれるとの授記を与えるところである

今から授ける 観世音よ

汝はよくよく耳に留めるがよい

あらゆる〔仏の〕世界からやつて来た菩薩たちよ

我は〔そなたたちの〕願いを全て知っている

〔そなたたちは今や〕清らかな莊嚴で

満たされた世界を

〔建立したいと〕心に決めている

我が授記を受ける以上は必ずや仏となる

〔迷いの世界の〕あらゆる存在は

さながら夢幻や音の響きのように

儚く消え去るものと体得し

素晴らしい誓願をかなえて

必ずやこの〔極楽〕のような世界を

建立することとなる

〔あらゆる〕存在はあたかも

電光のように一瞬のものと同じ

菩薩として歩むべき道を究める

さまざまな功德を生み出す善行を

修めてきたのであるから

我が授記を受ける以上は必ずや仏となる

あらゆる存在の本性は永遠不滅の実体などではなく

互いに支えあうことで

初めて生ずるものであると体得し

ひたすら清らかな仏の世界を求めて

必ずやこの極楽のような世界を

建立することとなる。〕

〔一方〕他の浄土の仏たちは

〔その浄土の〕菩薩たちに告げる

《〔私は汝らを〕安らかな境地に導く

〔無量寿〕仏に会いに行かせよう

〔無量寿仏の〕説法を聞いて

清々しい気分のまま行を修め

速やかに〔自ら思い描く〕浄土を建立するがよい

〔菩薩たちよ〕清らかな莊嚴に満ちた

〔無量寿仏の極楽〕世界に至ると

すぐさま神通力を得るだろう

そして「汝は必ず仏になる」という

無量寿仏からの授記をいただき

覺りを完成させることとなる

かの〔無量寿〕仏の本願が〔実現し〕

その力を發揮しているからこそ

〔汝らが〕その仏の名を聞いて往生を願うならば

みなことごとく〔極楽〕世界に生まれ変わって

覺りを得るまで

仏道から退転することのない境地に

知らぬ間に達するのである

菩薩たちよ〔極楽世界に往けば心底願うであらう〕

己が浄土も〔この極楽〕世界と違わぬことを

〔そして汝らは〕一切〔の衆生〕を救わんと

その名があらゆる世界に知れ渡るようにと

念ずることとなる

〔さらに汝らは毎朝〕「何億ものみ仏がたに

供養を捧げんために神通力を用いて飛んでいき

さまざまな仏の世界をめぐるて恭しく礼拝し

〔功德を積んだ〕喜びとともに

再び安らぎの世界である極楽へと舞い戻るのだ」と

〔さあみな者よ〕

もし〔過去世に〕善行を修めてこなかった人は

〔無量寿仏の救いを説く〕この経を

耳にすることはできなかったであろう

〔もし過去世に〕煩惱にまみれぬよう

戒をたもつてきた人は今

真理に即した〔この〕教えを聞くことができる

〔もし過去世に〕覺りを開いたみ仏と

出会ったことがある人は今

こうした〔無量寿仏の救い〕を

信ずることができる

〔そういう者たちは〕素直にこの教えを聴き入れ

修行に勤め〔救われるという実感とともに〕

飛び上がるほど大きな喜びが身心に満ちあふれる

思ひ上がりや見違い

精進を怠たる者は

それがために〔無量寿仏の救いの〕法を

なかなか信じられない

過去世にもろもろの仏に出会った人は

嬉々としてこの救いの教えを聴く

〔さて〕声聞であらうと菩薩であらうと

〔無量寿仏の〕深いみ心を読み取ることはできない

たとえて言えば生来眼の不自由な人が

人の手を引いて先導しようというものである

〔無量寿〕仏の智慧を海にたとえれば

余りに広大深遠で限りなく

声聞や菩薩の推し量れるところではない

ただ覺りを得た仏のみ明らかに知り得る

かりにこの世の一切の人々がよくよく仏道を修め

一点の曇りもない智慧を具えて

すべての存在は互いに関係し合いながら

絶えず変化し続けるという「空」の道理を知り

果てし無く永い時間をかけて

〔無量寿〕 仏の深いお考えに

思いをめぐらしたとしよう

〔たとえ彼らが持てる〕 力の限りを尽くして

命果てるまでみなで論議を重ねたとしても

なお〔その一端すら〕 知ることができない

〔無量寿〕 仏の智慧には際限が無く

これこそ清浄の極みである

〔よいか〕 この世に生は受け難く

仏の在世に生まれることはさらに難しい

〔まして〕 仏を信じられるようになるのは難しい

もし少しでも〔仏のこと〕を耳にしたならば

懸命に〔仏道を〕求めよ

教えを聞いたならばよく心に留め

〔仏の姿を〕 拝したならば恭しく敬え

〔信ずる心が〕 沸き起こったならば

大いに喜ぶが良い

そうして初めて我が善き友といえるのである

だからこそ今ここで覚りを目指せ

たとえこの世が炎に包まれようと

その中を突き進んで必ず教えを求めよ

何としてでも覚りを開いて仏となり

生死の迷いの世界に沈む全ての人々を

救い出すのだ

〔そこでまた〕 釈尊が阿難に仰せになった。

〔他の仏の世界から極楽世界にやって来た〕 菩薩たちは、

みな間違いなく必ず仏になるためにもう一度だけ他の

の世界に生まれる「一生補処」の境涯に辿り着くであろう。

ただし〔極楽世界に来る〕以前に、生きとし生ける

ものを救い摂ろうという誓いを建ててさまざまな功徳を

積み、仏の特性を身に具えながらあらゆる衆生を迷いの

世界から救い出そうと願う菩薩は「一生補処」の境涯に

は入ることはない。

〔さて〕 阿難よ。かの〔無量寿〕 仏の〔極楽〕 世界の

中の声聞たちの身体から放たれる光明は、「直径が」両手を広げたほどの長さ（一尋）であるが、菩薩たちの（身体から放たれる）光明は百由旬（一説に16000km）という途方もなく遠い先まで照らしているのだ。

〔その時の菩薩たちの中でも〕特に偉大な方が二人おられる。強大な力を具えた〔彼らの〕光明は三千大千世界を余すところなく照らし出すのである。〕

〔そこで私〕阿難が釈尊に尋ねた。

「その二人の菩薩様は何というお名前でしょうか。」  
釈尊がお答えになった。

「一人は観世音〔菩薩〕と言ひ、もう一人は大勢至〔菩薩〕と言ふ。二人は〔かつて〕この世界においても菩薩として修行をし、その寿命が尽きたところで、この世界から〔無量寿〕仏の〔極楽〕世界へと往生したのである。

〔ところで〕阿難よ。〔極楽〕世界に往生した衆生はみな誰も〔仏の特徴である〕三十二相を身に具えている。〔さらにまた〕十二分に智慧を磨いてさまざまな教えを学び取り、その真髓を己のものとし、〔獲得した〕神通

力は何ものにも遮られることなく、〔目・耳・鼻・舌・身・といった〕感覺器官や認識作用もまた鋭く研ぎ澄まされているのだ。

その中で感覺器官などの精錬さが比較的欠けている者でも、〔耳にした真理の教えがその通り真理であると判断する「音響忍」と、真理の教えにしたがつて一切を判断する「柔順忍」という〕二つの智慧を具えている。感覺器官などがより精錬されている者はどんなにしても〔優れた点を〕数えきることのできない「無生法忍」〔即ち自らが生死輪廻から解脱していると判断する智慧〕をも具えているのである。

また〔極楽世界に往生して来た〕菩薩たちは覺りを得るまで〔地獄・餓鬼・畜生の〕悪しき境涯に墮ちることがなく、思い通りに神通力を駆使して、過去世のありとあらゆる出来事を常に知り分けることができるのだ。〔ただし極楽の菩薩が悪しき境涯に墮ちることがないとは言つても、極楽〕以外の五濁悪世に〔敢えて〕生まれようとする者もいる。〔彼らは、私釈尊が人の身となつて〕

この世に現れ出たように、「悪世で苦しむ」衆生と同じ身となって現れ「衆生を救うのだ。そういう菩薩は悪しき世界に堕ちない者とは」立場が異なるのである」と。

〔続けて〕 釈尊が阿難に仰せになった。

〔極楽〕 世界の菩薩たちは「無量寿」仏の強大な力に受け、簡単に朝食を済ませるほどのわずかな時間で数えきることのできないあるゆる仏の世界に赴き、「それぞれの世界の教主である」仏がたを恭しく敬い供養を捧げていくのである。「しかも驚いたことには菩薩が」心に念じるだけで花や香、心地よい曲を奏でている楽器や日よけとなる絹地の天蓋、仏の徳を称える流し旗やその他数えきれないほどの多くの供養の品々がぱつと目の前に現れ、念ずるままに「仏前に」献じられるのだ。

〔その上〕 いずれも二つとない見事なもので、この世のものとは比べようがない。「そして極楽からやって来た菩薩たちがそれらの品々をその世界の」仏がたや菩薩・声聞たちへの供養のために撒き降らすと、それらは空中にとどまって花の天蓋へ形を変えるのである。「その花

は」色鮮やかに輝き、芳しい香りをその世界いっぱい満たしていき、「その中には」周囲が四百里にも及ぶものがあつて、それが二倍づつ段々と大きくなり、ついには三千大千世界を覆い尽くすまでになる。「しかも」新たに「別の花の天蓋が」大きくなるにしたがつて、古い花の天蓋は消えてなくなってしまうのだ。「極楽からやって来た」菩薩たちは「この光景を目の当たりにすると」皆一様に歓喜の声をあげ、空に舞いながら楽器を奏で、心洗われる調べで仏の徳を称えて歌うのである。「そして、それぞれの」仏の教えを拝聴し無上の喜びを得るのだ。「その後、彼らは」昼食の時間までには仏の供養をなし終えて、「他の仏の世界から」忽然とすつと消え去り、本国である「極楽世界へ」と帰り着くのである」と。

〔さらに〕 釈尊が阿難に仰せになった。

〔さて〕 無量寿仏が大勢の声聞や菩薩たち一人一人に教えを説き示そうとされると、彼らはみなこぞつて七種の宝でできている講堂に集まつて来る。「そして無量寿仏が」それぞれを覺りに導く教えを説き、その奥義を伝



えると、みな大いに喜び心にとどめ、覺りを得（るのだ。それで）ない者は一人もないのである。（みなが覺りに達すると、）その瞬間に、はからずも四方から風が吹いてきて宝の樹々の間を吹き抜け、「宮・商・角・徴・羽の」五つの音階からなる調べを奏でていく。（そして風が舞い上げた）無数の花びらが舞い降りてくると、それらの花びらは風にのつて辺り一面を飾り立て、こうした自然の営みそのものが〔極樂の聖者たちへの〕供養となつて絶えることがないのである。（また）天人たちはみなこぞつて天上界にある十万種もの芳しい花々〔を捧げて〕、さらには心躍らせる音楽を奏でて、〔無量壽〕仏をはじめ大勢の菩薩や声聞たちを供養する。（彼らはそれぞれ）辺り一面に芳しい花々を撒き、さらにはさまざまの音楽を奏でながら代わる代わるやつて来ては順々に供養し続けるのだ。そうした時の、「菩薩や声聞たちの」たいへん和やかで幸せな心持ちは何とも言葉では言い表しようがないのである。」

〔またさらに〕 釈尊が阿難に仰せになった。

「かの〔無量壽〕 仏の〔極樂〕 世界に往生した菩薩たちは教えを説くべき時に、常に正しい教えを述べている。（その言葉は仏の） 智慧に適つていて寸分違わず、一点の誤りさえないのである。（彼らは極樂） 世界に存在するあらゆるものに対して我が物という思いを抱かず、また心囚われることもない。行くも立ち去るも進むも立ち止まるも思い悩まず、己の感情に支配されることなく、何のわだかまりも生じないのだ。他人と自分を分け隔てることもなく、競つたり是非を言い争うこともない。（また） 彼らはあらゆる世界の生きとし生けるものに大いなる慈悲の心と利益を施そうという心をもっているのだ。心はおおらかで、〔俗人には腹立たしいと思えることも〕 包み込み、決して怒つたり恨んだりしないのである。（人間が抱く） あらゆる欲望から離れていて一点の汚れもなく、〔仏道精進を〕 怠けようという気持ちすらない。

あらゆる修行に全身全霊を傾ける心（等心）を持ち、どのような修行にもひるまない尊い心（勝心）を持ち、どつしりと落ち着いた心（深心）を持ち、散り乱れぬ心（定

心)を持ち、「無量寿仏の」教えに心ときめかし、その教えに幸せを感じ、その教えによつて心が喜びで満たされるのである(愛法樂法喜法之心)。(そして、彼らは)諸々の煩惱を滅し尽くし、「地獄・餓鬼・畜生という」悪しき世界に墮しているような〔邪な〕心を起こさないのだ。

〔そのうえ彼らは〕あらゆる菩薩が修める行の一切をすべて完成させ、計り知れないほどの徳を余すところなく具えて、しかも現に發揮しているのである。〔彼らは〕精神を深く集中させた結果、神通力と煩惱を断ち切る力と覺りの智慧を手に入れて、そして〔極樂世界の光景を目の当りにしながら、七段階にわたつて心の静けさを求めていく修行〕七覺支<sup>し</sup>を繰り返し樂しむうちに、「無量寿仏の」教えと自身の心がびつたりと一致しているのである。

〔彼ら極樂世界の菩薩たちの〕眼〔に映る風景〕には一点の曇りもなく、澄み渡りくつきりとしている。〔また〕その眼はどこまでも遠くを見渡し、さらには生きとし生けるものの來世までも見通すのだ。〔しかも彼らは〕

物事をありのまま見つめ、さらに覺りの境地に近づいて眞理を見極め、迷いなき彼岸の世界へと渡つていき、〔彼岸に到つたならば、それこそ〕仏と同じ眼を得て、覺りの境地が体中から溢れ出てくるのである。〔そして初めて彼らは〕ありとあらゆることを心得た融通無礙な智慧をめぐらし人々のために〔無量寿仏の教えを〕弘めるのだ。〔その際には〕煩惱に満ちた欲界は夢幻の如くつかみ所がないものと見極め、また煩惱には流されないものの肉体的な束縛が残る色界も夢幻の如くつかみ所がないものと見極め、また煩惱も肉体的束縛も感じない無色界も〕夢幻の如くつかみ所がないものと、三界を等しく見極め、覺りの世界を究めたいと願いつつ、誰にでも分かるような言葉を駆使して、生きとし生けるものの悩み・苦しみを取り除くのである。〔そのような彼ら菩薩たちの融通無礙なる智慧は〕無量寿仏〔の教えを体得したところ〕によつて生じたものであり、あらゆる存在をありのままに理解し、どのような言い回しで説法をすれば人々が〔悪行を〕とどめ、〔善行に〕いそしむかを良く知つ

ていて、世俗にまみれた話題を用いず、ひたすら覺りの境地へとつながる説法に努めるのである。

〔また彼ら極樂世界の菩薩たちは〕さまざまな善行を積み、覺りへと到る教えを心の底から崇拜している。ありとあらゆる物は実はみな悉く煩惱を離れた存在である。と知ることによつて、〔すでに彼らは悩み苦しみを受けると、身心と、〔身心を悩み苦しめる〕煩惱の二つを生み出す因縁を滅し尽くしているのだ。〔無量寿仏の〕奥深い教えを聞いた〔彼らには〕疑いの心や、尻込みする心が起こらずに、常によく修行するのである。

〔そのような彼ら極樂世界の菩薩たちは〕心に大慈悲が宿り、それは廣大にして奥深く、〔それでいて〕どこかしら温かく。誰一人として救わぬことはない。〔彼らは〕誰をも救わんとする慈悲の實踐を完成させて〔はじめ、〕彼岸〔という覺り〕の世界に安住するのである。〔万が一にも衆生を救えないことがあるのではないかと〕疑いを断ち切つた信念の中に〔もはや何事にも惑わされない〕智慧が湧き出でて、〔無量寿仏の〕教えを

すべて吸収し取りこぼさないのだ。

〔衆生を救おうという極樂世界の菩薩たちの〕智慧は大海のように〔広くて深く、何ものにもさえぎられず、〕澄み切つた境地〔三昧〕は山々の王〔である須弥山〕のよう〔に高くそびえて播るぎない〕。〔その身から放たれる〕智慧に満ちた光は太陽や月よりもはるかに輝き、〔彼らの〕教えは何の欠点もなく付け足すべきことは何もないのだ。

〔彼らの智慧の光明は〕まるで雪山のようである。というのも、あらゆる功德を隈なく照らし出すからである。〔あるいはまた〕まるで大地のようなものである。というのも、清らかなものも汚れているものも、美しいものも醜いものも分け隔てなく〔包み込む〕からである。〔あるいはまた〕まるで清らかな水のようなものである。というのも、〔衆生の心に溜まつてしまった〕さまざま迷いや邪な思いを洗い流すからである。〔あるいはまた〕まるで燃え盛る炎のようである。というのも、ありとあらゆる煩惱をまるで薪のように燃やし尽くしてしまうからで

ある。「あるいはまた」まるで「吹き抜ける」大風のようである。というのも、あらゆる世界に行き渡るに何の障害もないからである。「あるいはまた」まるで空気のようなものである。というのも、何ものにもとらわれることがないからである。「あるいはまた」まるで蓮の花のようなものである。というのも、「煩惱にまみれた」俗世間にあつても汚れることがないからである。「あるいはまた」まるで大きな乗り物のようである。というのも、迷える衆生を救い摂つて、生死（を繰り返す輪廻の世界）から救い出すからである。「あるいはまた」まるで雷雲のようである。というのも、稲妻と轟きをふるつて迷える衆生に真理を覚らせるからである。「あるいはまた」まるで大雨のようである。というのも、不死の世界へと導く教えを迷える衆生に降り注ぎ、「苦しみに満ちた身心を」癒すからである。「あるいはまた」まるでダイヤモンドの山のようなものである。というのも、「決して砕けることがなく」悪魔や邪教をあやつる者たちが揺さぶつても少しも揺るぎないからである。「あるいはまた」

た」まるで「天界の王である」梵天王のようなものである。というのも、覚りへと導くあらゆる教えにおいて「常に」指導者となるからである。「あるいはまた」まるで「枝から次々とカーテン状に根を垂す」ニグロウダ樹のようである。というのも、一切のあらゆるものを覆つて「護る」からである。「あるいはまた」まるで「三千年に一度しか咲かないという」ウドンバラ<sup>10</sup> ようである。というのも、普段は出会うことのできない稀有なものだからである。「あるいはまた」まるで「鋭い嘴と爪を持った巨大な」霊鳥ガルーダのようである。というのも、邪な教えを操る者たちをひれ伏させるからである。「あるいはまた」まるで「木々の果実をひとくち啄ばんでは飛び去る」鳥のようなものである。というのも、「何ものに対しても」我が物にしようという独占欲がないからである。「あるいはまた」まるで牛の王（が鳴き声も姿形も比類ない<sup>11</sup>）ようなものである。というのも、「菩薩たちの中でその光明に」勝るものなどないからである。「あるいはまた」まるで象の王のようである。というのも、「象

の王があらゆる動物たちを従わせているように<sup>12</sup>、他のあらゆる者を従わせるからである〔あるいはまた〕まるでライオンの王のようである。というのも、〔ライオンの王には恐れるものがないように<sup>13</sup>、〕何ものにも恐れをなさないからである。〔あるいはまた〕まるでどこまでも広がる天空のようである。というのも、限りない大慈悲をともなっているからである。〔また彼らの光明に触れば〕一切の妬みを撲滅し、自分より他人が優れているからといって恨むようなことがないからである。

〔彼ら極楽世界の菩薩たちは無量寿仏の〕教えを求め続けて踏み外すことなく、飽き飽きして不満を募らせることなどない。絶えず〔その教えを〕説き広めようと願い続け、その思いが途切れるようなことはないのである。〔戦に打ち鳴らす〕太鼓のように教えを轟かせ、〔戦場での旗印のように〕教えを高く掲げているのだ。〔また〕彼らの〔身から放たれる〕智慧の光はまるで太陽のように輝き、暗闇のような〔愚かな衆生の〕煩惱を取り除いて、さらに彼らは心を一つにして敬い合っている<sup>14</sup>。常に教

えを説いて〔衆生を導き〕、〔仏を指す〕志は怯むことなく勇ましく、損なわれることがない。自ら迷いの世界を照らす灯火となり、〔衆生に〕これ以上ない幸福を与えるのだ。常に〔衆生を〕覚りの世界へと導き、〔その慈しみには〕分け隔てなく誰かを憎んだり、選り好んだりしないのである。ただひたすらに覚りの境地を追い求め、喜び悲しみに一喜一憂することなく、〔衆生を苦しめる〕欲望という刺を抜き取って、痛みを取り除くのである。〔こうした菩薩たちの具える〕功德と智慧は極めて優れており、〔彼らを〕尊敬しない衆生は誰一人としていないのだ。〔彼らは貪り・怒り・愚かさという〕三種の煩惱から苦しめられることなく、さまざまな神通力を自在に操ることができるのである。

〔彼ら極楽世界の菩薩たちは〕仏道を求める力〔因力〕があり、仏道を歩む力〔縁力〕があり、覚りを究める力〔意力〕があり、衆生を救いたいと願う力〔願力〕があり、衆生を救う力〔方便之力〕があり、決して諦めることのない力〔常力〕があり、善行にいそしむ力〔善力〕があ

り、精神を集中させる力（定力）があり、智慧を完成させる力（慧力）があり、救いを求める多くの衆生の声を聞き取る力（多聞之力）がある。<sup>15</sup>〔また〕布施によつて覺りを得る力、戒をまもることによつて覺りを得る力、いかなる苦難にも耐えることで覺りを得る力、修行を続けることで覺りを得る力、精神集中の深まりによつて覺りを得る力、智慧を究めて覺りを得る力（以上、施

戒忍辱精進禪定智慧之力）がある。〔また〕何を想い描いても煩惱を伴わず（正念）、何を見ても邪な想いを抱くことがなく（正観）、自身の過去世を知る能力（宿命智通）・はるか遠くや未来を見通す能力（天眼智通）・はるか遠くの音を聞き取る能力（天耳智通）・他人の心を知る能力（他心智通）・思いのまま瞬時に移動する能力（神足通）・自らの煩惱を断ち切る能力（漏神通）がある。そして仏たちにならない衆生を救い導く力（如法調伏諸衆生力）があるのである。〔彼ら菩薩たちには〕このよう

〔また彼らには〕姿・形といい、具えた功德といい、軽やかな口調といい、優れた智慧といい、〔考えられ得る〕すべての長所が他と比べようもないほどに具わっている。あらゆる仏がたを敬い供養をささげ、常に仏がたに対して称讃の声をあげている。

〔彼ら極樂世界の〕菩薩たちは覺りを得るために修めべき行はすべて完成させ、すべての存在はうつりかわり（空）、それ故定まった姿・形もなく（無相）、したがって何事にも執着しない（無願）という、心乱れぬ三つの境地と、〔この世には〕生じるものもなければ滅するものもないという〔空の〕境地に達するなどのあらゆる精神集中を達成し、〔覺りの境地を独り楽しむだけの〕声聞や縁覺の立場を離れて、〔菩薩の境地を究め尽して〕いるのだ。

阿難よ。〔極樂世界の〕菩薩たちはこのような計り知れない多くの功德を具えているのである。私（釈尊）は今、汝を氣遣い手短かに説いたまでである。もし詳しく説こうとすれば、百千万劫〔という途方もなく永い時間

を」かけたとしても、「決して」語り尽くすことはできないのだ。」

○以上、『無量寿経』巻下四分一

釈尊は「このように語り終えると、次に」弥勒菩薩と天人たちに向けて仰せになった。

「無量寿〔仏の極楽〕世界にいる声聞や菩薩たちに具わる功德や智慧は、いくら讃えても言葉が尽きることはない。またその世界は「そこにいる者たちを」得も言えぬ幸せな気分に分らせることのできる〔煩惱のない〕清らかな所であつて、やはりまた「いくら讃えても言葉が尽きることはないのである。極楽世界にいる以上、」どうして善行を修めないようなことがあるう。<sup>16</sup>〔どのようにしても善行を修めてしまうのである。〕仏道を歩もうと思えば、思いのまま〔に歩める〕のだ。〔極楽世界は〕上下を見ても、左右を見ても際限がない。〔素晴らしい世界である上、限りなく広いからこそ汝らよ、〕それぞれ精進を重ねて〔仏道に励み、〕自分の意志で極楽世界

を求めるがよい。〔そうすれば〕必ず〔この苦しみの世界を〕越えて、幸福と安らぎに満ちた〔極楽〕世界に往生することができるのであつて、〔地獄・餓鬼・畜生・人・天という〕五つの悪しき世界へと転生する行き方〔を瞬く間に〕断ち切るのである。そして、それらの世界に至る道は自然と途絶え、〔往生した者は〕どこまでも仏道を歩んで行くのだ。〔悪しき世界には、えてして〕堕ちやすいものであるが、〔極楽世界には〕そのような者はいないのである。〔なぜならば極楽〕世界では〔迷いの世界へと〕堕ちて行く道がなく、無意識のうちに〔覚りの境地へと〕引き上げられるからである。そうである以上、日々の暮らしのことばかりを考え、仏道を歩まず修行を積まないことなど、どうしてあり得ようか。〔極楽に往生しさえすれば〕永い永い寿命を得、生きることの幸せを永遠に楽しむのである。

しかしながら、この〔迷える〕世〔界〕の人々は浅はかにも欲望に眼がくらみ、誰も彼も他愛もない欲望を満たそうと血眼になっている。〔彼らは〕悪に染まり、苦

しみに満ちた〔この世界の〕中で、身を粉にして働き、やつとの思いで暮らしを営んでいるのだ。〔そういつた点では〕身分の上下には意味がなく、貧富の差にも意味がなく、財産の多少に関わらず老若男女、その心配をするのは誰しも同じである。悩み憂える思いは誰であつても変わらないのだ。おろおろと心が落ち着かず、ただ余計な心配ばかりを重ねるのである。〔財産のことばかりが〕気になり、心休まることがない。田を持つていれれば田のことが心配になり、家を持つていれれば家のことが心配になり、牛や馬をはじめ〔犬・羊・豚・鶏などの〕六種の家畜や、あるいは奴隷<sup>17</sup>、あるいは金銭、あるいは衣服や食料や貴金属などの貴重品もまた、あればあつたで心配になる。〔失うまいと〕思いを巡らし、〔少しでも減れば〕深く嘆き、心配ばかりが募り、〔いたすらに〕おびえるばかりなのである。

〔財産というものは〕あつという間の大水や火の手によつて、〔あるいは〕盗賊によつて、あるいは人の怨みを買ひ、〔あるいは〕債権者の手に渡ることによつて、〔あ

るいは〕焼失したり流出したり奪い取られて散り散りになり、〔最後には〕無くなつてしまうのだ。〔人々はこうした〕憂いという毒に〔侵され〕訳も分らない不安によつて胸がしめつけられ、一時として〔その不安から〕開放されることはない。〔そればかりか〕なぜ、私ばかりがこうなるのか」と心中に憤りをおぼえ、〔ますます〕不安や絶望感が深まるのである。心を閉ざして意固地になつて、何事につけても気に障り受け容れられなくなるのだ。

〔また俗世では〕無実の罪をきせられ〔失脚し〕、健康を損なつて命運<sup>18</sup> 尽き果てるということもある。そうなれば〔誰からも相手にされず〕皆立ち去つていき、〔彼に〕付き従う者など誰一人としていなくなるのである。〔たとえ〕自分が高く裕福であつても、このような憂き目に遭うのである。〔財産を失う〕不安や〔命を落とす〕恐れは〔このように〕さまざまできりがなく、つねに〔それらから逃れようと〕喘いても、灼熱や極寒〔が身に襲うが如き〕苦痛となつて迫つてくるのだ。



「一方」身分が低く財産がない者は貧困に喘ぎ、まったく何も持っていない。「財産があるが故の悩みはないけれども」田がなければいけないでそのことを嘆いて田を欲しがり、家がなければいけないでそのことを嘆いて家を欲しがり、牛や馬を「はじめ犬・羊・豚・鶏などの六種の」

家畜や、あるいは奴隷、あるいは金銭、あるいは衣服や食料や貴金属などの貴重品がなければいけないで「そのこと」を嘆いてそれらを欲しがるのである。たまたま「都合よく」何かあるものが手に入ったとしても、「次の瞬間には」また何か一つが失われていき、「せっかく」手に入つたにしても「望んだよりは」少なく、望んだ分だけ欲しくなる。「たとえ」望んだものが充分に揃つたにしても、すぐにまた「手元を」離れてしまうのだ。こうして「貧困に」悩み苦しむ、「つねに財産を」築こうとあくせくするが、そうそう簡単に築けるものではなく、思い描いたほど手に入るものではない。身も心も疲れ果て、寝ている時も起きている時も心安まることがないのである。このようにして不安な思いにかられて、「それらか

ら逃れようと」喘いでも、灼熱や極寒「が身に襲うが如き」苦痛に苛まされるのだ。「富めるにしろ貧しきにしろ」ついにある時、このように「悩み苦しみなながら」息絶え命を落とすのである。

「その間、人々は」進んで善行を修めようとはせず、仏道を歩まず、徳を積もうとしないまま、「やがて」寿命が尽き、その身が亡ぶと、たつた独りで遠い「世界に」旅立つて行く。「しかしながら死後、」赴きたい世界があつても、「何をすれば」善い世界に赴き、「何をすれば」悪しき世界に堕ちてしまうのか、よくよくわきまえている者はいないのである。

「善い世界に赴くためには」親子、兄弟、夫婦、親類、縁者にいたるまで世の中すべての人々は互いに敬つて親愛しあい、憎んだり妬んだりすることなく、「物が」ある時もない時も共に分かち合い、意地汚く独り占めするようなこともなく、言葉遣いも表情もいつも穏やかで、お互いに誤解し仲違いするようなことがあつてはならないのだ。

〔しかし〕往々にして思いのままにならずに争いをおこして怒り狂うことがある。今生で恨む心を抱きながら、ひそかにお互いに憎んだり妬んだりしているので、後生には〔その恨みが〕想像を絶するほどの大きな恨みとなつて現れてしまうのだ。

どうしてかという、世俗を生き抜くということとは、〔どこかで〕互いに傷つけあうということだからである。

その場合は〔我慢して〕急に相手を殴りつけるようなことはなくとも、やはり深く根に持つてその怒りを抑えきれず、心中憤りに覆われるのだ。〔この怒りが〕自然と心に刻み込まれて、忘れ去ることができないのである。〔たとえ〕生まれ変わつてもその相手と対面し、お互い報復しあうにちがいない。

人というものは俗世の営みの中で愛欲の趣くままに生きていくが、〔結局は〕独りで生まれ、独りで死に、独りで〔この世から〕去り、独りで〔またこの世に〕やつて来る。〔前世の〕行いに応じて、業あり苦ありの〔次の世に〕辿り着くのである。そうして〔次の世で待ち受

ける〕苦業をその身に担い、代わつてくれる者など誰もなく、〔この世で修めた〕善行や悪行は幸福や災いと交を変え、〔しかも次の世に〕場所を移して、その者が来るのをじつと待っているのである。〔次の世とは〕独りで行くべき〔ところ〕であつて、〔もしも〕遠く離れたところに生きてしまえば、〔もう誰とも〕まみえることができない。〔次の世にどこに生まれるかは、〕この世での善悪の振る舞いにしたがうのであつて、〔独り遠く離れた世界は〕行の報いとして生ずるところなのである。〔そこは〕輝きを失つた暗黒の世界で〔独り寂しく〕離れてしまうことが永く続いてしまうのだ。〔たとえ〕人と同じ道を往来していれば、その人と出会うこともある。しかし〕異なつた道を往来している限りは、その人と決して出会うことができない。〔そのように独り遠く離れてしまえば、〕それは本当にあり得ないことなのだ。〔そのように独り離れてしまえば、〕どうして再び出会えることができようか。

それなのになぜ〔人々は〕、世俗の営みを捨て去ろう

としないのか。「なぜ」それぞれが気力と体力が充実している時に、一生懸命に善行を修め、精進を重ねて迷いの世界を渡り切ろうと願わないのか。「人はみな」限りなく永い命を手に入れるべきなのである。どうして仏道を歩もうとしないのか。じつとしていられる場所など、一体どこにあるのか。そこに何の楽しみがあると言うのであろうか。

そうした人は善行を修めれば〔その結果〕善いことがあり、仏道を歩めば〔その結果〕覚ることができるということを信じていないのである。また人は死ねば再び生まれ変わり、生前に行った優しさに満ちた施しが、〔後の世の〕幸福となつてやつてくるということも信じていないのだ。善いこと〔をすれば善い〕があり、悪いこと〔をすれば悪い〕ことがあるなど因果の道理をまったく信じようとするのである。このような〔因果の〕道理などあるはずもないと思ひ、どうしても認めることができないでいるのだ。このような〔不信心〕を抱けばこそ、ずっと何もしいまま、事の善悪を見過ごすばか

りなのである。19

〔それは一人だけの話ではなく〕世間を見渡せば、前にいる人も後にいる人も、同じよう〔に事の善悪を見過ごしているの〕である。〔そうした姿勢は〕代々繰り返して受け継がれ、父は〔因果の道理などないと〕子に教え込む。祖父はもとより祖先たちはみな、もともと〔因果の道理を信ずることなく、〕あえて善行を修めようとはせず、仏道を歩む功德も知らずにいたのだ。〔先祖代々みな〕身に行うことは愚かさに満ち、魂は暗闇に覆われ、心は閉ざされ、考えはまとまらない。死後どこに生まれ変わるのか、またどうすれば善い世界に生まれるのか、悪い世界に生まれるのか、見極めるものもいなければ、語る者もないのだ。不幸な出来事、幸運な出来事が次から次へと訪れるが、〔なぜそうなつたのか〕どれ一つとして深く追求することもない。それ故輪廻生死することが当たり前となり、〔代々〕みな相次いで輪廻に迷うのだ。

〔この世界では〕ある時は親が子を亡くして泣き叫び、

ある時は子が親を亡くして泣き叫び、あるいは兄弟・夫婦の間で「いずれかが先立つては」泣き叫ぶ。「年の順」に死ぬ」とは限らないところが、真の無常の姿であつて、誰も彼もみな死んでいく。誰一人として死なない者はいないのだ。「そのように」説き示めたところで、それを真実として受け止める者は少なく、それ故に生死を繰り返す世界にとどまつて「迷い」続けるのである。

こうした人は真つ暗闇の中で壁にぶつかつているようなもので、因果の道理をなかなか信じようとはしない。彼らは後の世<sup>20</sup>のことなど少しも頭になく、それぞれが「その場限りの」快楽に身を委ねようとするのだ。愛欲に溺れては理性を失い、覺りの境地など目指そうとしないのである。怒り心頭に達して我を失い、「はらいせに」富を散財し色欲を貪る。このようであるから、覺りを得ることなど、とてもできないのである。「死後には」再び「地獄・餓鬼・畜生の」悪しき世界で苦しみ、輪廻生死から解脱することがない。なんと哀れなことであらうか。まったく傷ましいことである。

家族・親子・兄弟姉妹・夫婦が「一人も欠けることなく」暮らしていても、やがて「誰かの死に面し、互いにその死に別れ悲しむこととなる。「そうした場合親への」想い、「子への」愛情、「夫婦の」絆、「それらを失つた」切なさに押し潰され、その想い出にしがみついて離れようとしなないのだ。どれほど時を経ようとも、「その悲しみから」立ち上がることなく、仏道を歩む素晴らしさを説き示したところで、心を開くこともないのである。

「死別を悲しむ人々は、家族と」共に過ごした日々を追ひ求めたり、男女の肌と肌の触れ合いが忘れられなかつたりする。「心は」暗闇に閉ざされ、「帰らぬ日々を取り戻そうという」愚かな想いばかりが渦巻いているので、よく現実を見据えて散り乱れた心を正したり、熱心に仏道を歩んだり、世間の営みから離れたりすることができないのである。「そして」時ばかりがいたずらに過ぎ、いよいよ命尽きようとしても、「ついで」仏道を歩むことができないでいる。「そうなつては、」もはやなす術もない。みな、だらしくみだらに異性を貪り求めている

から、仏道を歩むにしても躊躇する者が多く、「まして」  
覺りの境地を得るものはほとんどいないのである。

世間というものは、とかくさまざまな企みに満ち、「誰  
一人として」信頼することができない。身分の上下、貧  
富の差にかかわらず、誰も彼も「各々の欲望を満たすた  
めには」手段を選ばず、「邪魔な者は」葬り去ろうとさ  
え思うのである。邪な悪意は益々深まり、むやみに「悪」  
事を企て、自然の摂理をないがしろにして、他人の言葉  
にも耳を貸そうとしない。生来の悪人ではなくとも、「人  
間というものは」ついつい悪事に手を染めてしまうのだ。  
そしてやりたい放題に悪の限りを尽くし、その報いを受  
けるまで罪を重ねるのである。

「そういう者たちはまだまだ」寿命が残されていないが  
らも、「不本意なまま」命を落とし「罪の報いとして地  
獄・餓鬼・畜生の」悪しき世界に生まれ変わる。「そして」  
何度も生まれ変わるごとにそれらの世界で苦しみを受け  
るので。「彼らは」それらの世界で彷徨い、いかに永い  
時間をかけようとも、「そこから」抜け出ることができ

ないのである。その苦痛は筆舌を絶しており、ただただ  
哀れむばかりなのだ。」

釈尊が弥勒菩薩と天人たちに対して「続けて次のよう  
に」仰せになった。

「今、私は汝らに「哀れむべき」俗世のありさまにつ  
いて述べてきた。このようなわけで人間は覺りを得るこ  
とができないのである。「では、人間が覺りを得るには  
どうしたらよいか。どのように振舞うべきか」よくよく  
考えて、悪事についてはそれを遠ざけ、善事については  
それを取り立ててなるべく実行すべきなのだ。

いかなる欲望をも満たす華やかな日々が「実現できた  
としても、それが」いつまでも続くはずはない。「手に  
入れた栄華は」すべて消え去るものであって、「実は」  
何一つとして楽しむ術がないのである。

人はみな、「私が」仏としてこの世に生きている間に  
励んで精進すべきなのだ。<sup>22</sup>「とりわけ無量寿仏の」「安  
楽国」<sup>23</sup>に心底往生したいと願う者は、「それだけで」  
聡明なる智慧のはたらきを獲得し、ことのほか優れた徳

を身に具えることとなるだろう。欲望のおもむくままに振舞い、私の教えや私の教えにもとづいた生活規範をないがしろにし、「精進する」人の後〔姿を眺めるようなこと〕があつてはならないのである。

もし何か疑問があつて私の教えが納得できないようなことがあるならば、どんなに些細なことでも私に尋ねるがよい。「そうした者の」ためであるならば、必ずや「いくらでも」応えるであろう。」

〔そこで〕弥勒菩薩は両膝を着いて「釈尊を敬いつつ、次のように」申し上げた。

「ああ」釈尊「よ。貴方様」は神々しく威厳に満ち溢れておられます。ただいまのお話もたいへんに素晴らしくうございました。〔今、仏でいらつしやる〕釈尊の言葉を拜聴いたしますに、「私の経験から」つらつら考えてみましても、世間の人々というものはまさに釈尊のおつしやる通りでございます。

今、釈尊は「み仏として」人々を哀れみ、覚りへの道をはつきりとお示しになりました。〔その教えを聞けば〕

目の前〔から迷いという霧〕が晴れ、耳は〔真理の教えのみに〕満たされ、永遠に〔生死の迷いの世界から〕解脱することができましょう。

釈尊の教えを聞いて感動しない者などおりません。天人も人間もあるいはとるにたらない小さな虫までも、みな〔釈尊の〕慈しみに包まれ、悩み苦しみから解放されることでしょう。

釈尊のおつしやられる教えはたいへん奥深く、素晴らしいものであります。〔また釈尊は〕上から下まで四方八方の彼方、しかも現在・過去・未来にいたるまで、仏の智慧をめぐらしすべてを明らかに知っておられます。

今、私〔弥勒〕をはじめ、多くの者たちが〔こうして生死の迷いの世界から〕解脱することができますのは、すべて釈尊のおかげです。〔というのも、釈尊が〕前世にあつて覚りを求め、苦行<sup>24</sup>に耐えた賜物であるからです。

〔釈尊がお覚りいただいた結果、〕その功德がいたる所〔で私たちを〕覆い尽くし、溢れんばかりの幸福が広が

つております。「そのお体から放たれる」光明はどこまでも照らし出し、天空の彼方を超えても、「なお明るさを」失うことがございません。「釈尊は」覺りの境地に入られたまま、「その境地を」分かり易い教えにして（「私たちに」授けられ、威嚴に満ちた指導力を發揮して、「私たちの煩惱を」消し去り、「覺りの境地へと」導いてくださいます。あらゆる世界（の人々）が「みな眠りから醒めて覺るまで」諦めずに揺り起こし続けます。釈尊（よ、貴方様）はまさに仏道を統治する王であり、いかなる聖者よりもはるかに尊い御方です。ありとあらゆる天人たちの指導者であり、「覺りを得たいという」みなへの願いを聞き入れて、みなに覺りの境地を開かせておられるのです。

今（私（弥勒）は）釈尊に出会うことができたばかりか、さらに（釈尊が「無量寿仏」と稱賛する）お声（名号）<sup>25</sup>を承ることができました。これ以上の喜びはございません。私の心は「今、」明るく澄み渡っているのです。」

〔この言葉を聞いた〕 釈尊は弥勒菩薩に〔次のように〕

仰せになった。

「弥勒よ、（よくぞ申した。）そなたの言う通りである。（私のような）仏となつた者を真心から敬う人はたいへん優れた善根を積むこととなる。この世界には遠い過去から今日にいたるまで何人ものみ仏がおでましになった。今、私（釈尊）はこの世にありながら仏となり、覺りへの教えとその道のりを説き弘め、「人々の」迷いを断ち、「人心から」愛欲の本を抜き取り、「悪行を生み出す」諸悪の根源を封じ込めている。（人々が彷徨っている）三界を何の支障もなく自由自在に歩き回り、智慧をめぐらして人々が輪廻生死する理由を見極め、「覺りへと導く」教えの核心を（松明のように）かかげて（世界を）照らし、「地獄・餓鬼・畜生・人・天の世界に彷徨う）五つの道を照らし出しては、いまだ輪廻解脱していない者を解脱させ、輪廻生死の迷いの世界から覺りの世界へと至る道を正しく示しているのである。

弥勒よ、（そなたには）分かるであろう。そなた自身、数えきれないほど遙か遠い昔から菩薩の行を修め、多く

の人々を「生死の迷いの世界から」救い出したいと願ひ、  
すでにもう多くの時間が流れていった。「その間、」そな  
たの導きによつて仏道を歩み、覺りの境地に至つた者は  
「確かに」数えきれないほど多い。彌勒よ、そしてまた  
「彌勒と共にいる」ありとあらゆる世界の天人や人々よ。  
出家であれ在家であれこの世に生まれて仏道を歩む者た  
ちは、遙か昔から「地獄・餓鬼・畜生・人・天の」五つ  
の世界を輪廻し、ある時には哀しみに沈み、ある時は恐  
怖におののき、常に苦しみを味わつてきた。「それにつ  
いては」一つ一つ言い尽くせるものではない。「しかも」  
今生に至つても輪廻生死から抜け出ていないのである。  
「しかし彌勒そなたは、」私（釈尊）と出会うことができ、  
「人々が」覺りに至る教えを聞くことができた。その上  
「無量寿仏」（名号）<sup>27</sup>のこともまた聞くことができた  
はないか。それはとても素晴らしいことではないか、と  
ても善いことではないか。私（釈尊）は「そなたに無量  
寿仏の救いを教えることで、人々を救いたいという」そ  
なたの手助けができて「（この他）嬉しいのである。<sup>28</sup>

「彌勒よ。」<sup>29</sup>そなたは今こそ自らの手で「人々から」  
生・死・老・病の苦しみを押しつけるがよい。

「彌勒よ。人間という生き物ものは、やがてその肉体を」  
朽ち果て腐らせていくものであつて、「いつまでも生き  
長らえようと」願ひ求めるものではない。「だからこそ  
人間は」よくよくこのことを思い定めて、身を謹んで行  
いを正し、少しでも多く善根を積むべきなのである。自  
らを律して身を潔め、心の中の邪な思いを洗い流さなけ  
ればならない。言うこととなすことに隔たりなく、心の  
内を包み隠さず、裏切ることがないようにすべきなのだ。  
人間は「そうすること」自ら迷いの世界から解脱して、  
「ひいては」他人をも救うことになるのである。少しも  
躊躇することなく「解脱を」願ひ求めて、善根を積み重  
ねていけば、今生にいかにか苦勞しようとも「輪廻してき  
た永い時を考えれば、それは」瞬きほどのわずかな時間  
であつて、後の世には無量寿仏の「極楽」世界に生まれ  
て幸福に満たされること極まりないのである。「しかも  
その人は」覺りの世界にふさわしい日々をいつまでも送



ることができ、再び輪廻しないよう生死の原因を抜き取って貪り・怒り・愚痴などに悩み苦しんだり病んだりはしないのだ。「その上、極楽世界に往生した者は」一劫でも百劫でも千億万（千兆）劫でも望めば望むだけ、思いのままに寿命を得ることができ、何をしていても一切の煩惱から離れて、「その振る舞いは」自然と覺りへの道に通じていくのである。

〔さて〕 弥勒よ。そして「弥勒と共にいる」者たちよ。〔今の教えを聞いた以上、〕 各々、精進を重ねて諦めず、心に願っていること（生死解脱＝極楽往生）を求めろがよい。「私の教えを」疑い中傷し、自ら罪科を犯すようなことがあつてはならない。「そういう者はたとえ極楽」世界に生ずることができたとしても、その辺境に〔寂しく〕建っている七種の宝から成る宮殿の中に生まれ、その中で五百年もの間、「なかなか無量寿仏にまみえることができないなどの」さまざまな苦難を受けることとなるろう。」

〔それを聞いて〕 弥勒が釈尊に申し上げた。

「釈尊の尊い御論しを重ねて賜ったからには、〔われら一同〕一生懸命教えを身につけ、その教えの通りに仏道を歩み、間違つても疑いを懐くようなことはいたしません。」

○以上、『無量寿経』巻下四分二

〔すると〕 釈尊が〔再び〕弥勒に仰せになった。

「弥勒よ。そして〔弥勒と共にいる〕者たちよ。この世において心を鎮めて正しく持ち、〔微塵も〕悪行を犯さずにいるならば、その功德は最も尊いものとなろう。あらゆる世界を見渡しても、これに匹敵する〔功德は〕ない。というのも、どのような仏の世界であれ、天人たちは自然と善行ばかりを積み、まったく悪行を犯さないがために覺りを開きやすい。〔それに対して、この世は悪に染まつて苦しみに満ち、覺りを開き難いからなのである。〕<sup>30</sup>

今、私（釈尊）はこの世で仏となつたが、五悪・五痛・五焼に満ちた（この世界の中で人々を導くことは）、大

変な苦難を伴っている。「しかし、それでも私は」人々を導き、五悪を犯さぬようにさせ、五痛を取り除き、五焼を受けないようにさせ、人々の心の乱れを正し、五善を修めさせる。そうして功德を積ませ、生死の世界から解脱させて、計り知れない長寿と覺りへの道を獲得させるのだ」と。

釈尊は「続けて」仰せになった。

「五悪とは何か。五痛とは何か。五焼とは何か。そしてどうすれば〔人々から〕五悪を消し去り、〔人々に〕五善を修めさせ、その功德によつて生死の世界から解脱させ、計り知れない長寿と覺りへの道を獲得させることができるか。〔そのことをこれから汝らに語り告げよう。〕」

### ○第一悪

釈尊が仰せになった。

「第一番目の悪について〔説き明かそう〕。天人たちや人々あるいは小さな虫にいたるまで悪行を犯そうという思いがわくのは、誰であろうともみな避けることはでき

ない。強い者が弱い者をねじ伏せ、あるいはお互い激しく争い、傷つけ命を奪い、その身を貪り喰らうのである。善行を積むなどということは〔露も〕知らず、極悪卑劣で相手を思い遣る気持ちなど欠片もない。〔そういった場合〕やがて、罰を受けて〔苦しむことは〕当然の成り行きなのである。天地の神々は彼らの犯した罪状を記録に取つて容赦することはない。それ故〔次の世に生まれ変わった時には〕財産や身分や家族に恵まれなかつたり、身体に障害<sup>31</sup>をかかえることとなる。

一方〔この世には〕財産や身分、才能に恵まれた人もいる。そういう人たちはみな前世に親孝行にいそしむなど善行を修めて、功德を積んできたのである。

〔さて〕世間では一般的に言つて法の定めるところにより、罪人を牢獄に入れることができる。しかしそれよりも、〔恐れることなく〕、あえて悪行を犯して罪を重ねたとしても、〔結局は捕まって〕罰を受け牢獄に囚われることになる。〔その時になつて牢から〕出せと望んだところで、放免されることはまずない。世間ではこうしたことをよ

く目にするが、「またこの程度の罪の報いですむけれど

も」命尽きた後の世ではそうはいかない。もつと厳し

い報いを受けるのだ。死を迎え肉体を失った後、次の世

に生じて〔新たな〕肉体を得るが、それはたとえば法の

定める罰の中でも最も苦痛をとまなう極刑と同じ〔よう

な苦しみを味わうの〕である。こうしたわけで〔地獄・

餓鬼・畜生の〕三つの世界に自ずと墮ち、計り知れない

苦悩を受けるのだ。〔肉体は〕次の世に生まれ変わって

姿を替えていき、住む世界を替え、授かった寿命はある

いは長く、あるいは短い、その生まれ変わる肉体

に〔前世の〕魂が宿るのだ。それぞれ一人一人が〔仇敵

に〕遇うべく〔次の世に〕向かい、それぞれ引き寄せあ

いながら時を同じくして生じるのである。そして互いに

復讐し合つて、いつまでも尽きることがない。現世にな

つても罪深い悪行が尽き果てないのであれば、〔仇敵か

ら〕離れ去ることなどできない。〔そうしているう

ちに地獄・餓鬼・畜生の世界に〕何度も生まれ変わり、

解脱を得ることが叶わないのだ。〔その間に受ける〕苦

痛たるや筆舌に尽くし難いのである。

この世界には自ずと〔善因善果・悪因悪果の〕道理が

はたらいいて、すぐさま結果が出るわけではないけれ

ども、善行も悪行もみなその道理にもとづいている。

こうしたことを「一大悪」・「一痛」・「一焼」と言うの

である。〔悪行の報いに〕苦しむことは、まるで大火で

その身を焼き尽くすような痛みであると言えよう。

〔しかしながら〕こうした〔迷いの世界の〕中でも、

人が心を集中させて〔雑念を払い、〕身を正して行いを

慎み、専ら善行に励み、悪行を犯さずにいれば、その人

だけは独り輪廻を解脱するのである。即ち、まずこの世

での幸福に恵まれ、さらに次の世には天界にも、覺りの

世界にも入ることができるのだ。このことを「一大善」

と言うのである。」

### ○第二悪

〔続けて〕釈尊が仰せになった。

「第二番目の悪について〔説き明かそう〕。世間の人々

は親子・兄弟・家族・夫婦であつてもその間柄をわきま

えず、「そればかりか」法に触れることさえする。己の欲望のおもむくまま快樂を貪ろうとたくらみ、そうした腹づもりで人々を互いに欺かせ惑わせるのだ。「だまそうとする相手には」心にもないことを口にし、しかも「その言葉には」根も葉もない。へつらいながらも見下し、言葉巧みに媚びを売る。賢い人には嫉妬を抱き、善人には「その人のありもしない」悪い噂をたれ流す。そうして人を陥れるのである。

「こうした悪がはびこるのも、もとはと言えば」君主が「国を治める責任の重さを」わきまえていない（からである。そうした君主は）臣下に「国務を」任してしまふことにならう。「そうした時、」臣下は自身の判断で国を治めるが、「その間にも君主に対して」数々の裏切りを積み重ねながら、各地を視察し「君主には報告せぬまま独り内外の」情勢を掌握する。「君主は」王位にありながらも的確に「国を治めることが」できずにいて、「結局は」こうした臣下に欺かれ、「君主に」忠実で善良な臣下をいたずらに失ってしまうのだ。「そうなくてはも

はや」天の御心に適う「君主」とは言えないのである。「そうした君主のもとでは」臣下が君主を欺き、「そのような治世のもとでは」子が親を欺き、兄弟や夫婦、親類縁者が互いに欺きあつてしまふのだ。それぞれが欲望と怒りと愚かさを心に抱き、自分だけは得をしようたくらみ、「さらには」少しでも多く手にしようとする。身分の上下に関わりなく、人の心とは押し並べてそのようなものである。「それ故、人々は」一家を潰し、身代を失い、先祖や子孫のことなど顧みず、一族郎党を巻き添えにしながら皆滅びいくのである。たとえば「誰かある者の財産をだまし取ろうと」親類縁者がその土地のごろつきと共謀して実行に移す。「しかし」そのような者たちも互いの取り分をめぐつて争い、怒りをあらわにし、ついには怨みあつてしまふのだ。

また「このような治世では」財産が十分にある人でも物惜しみをし、進んで他人に施すということはない。「蓄えた」宝物に執着して手放さず、貪る心の激しさから身も心もくたくたになつて苦しむのである。そういう人は

〔人生の〕終焉を迎えても、〔本心から〕頼れるものが何もないのである。

〔人は過去世から現世へと〕たった独りでやつて来て、〔現世から来世へと〕たった独りで去り行き、誰一人として付き従う者はない。ただ善行の功德としての幸福、悪行の報いとしての災障が、〔その人の来世の〕人生に付き従うばかりなのである。

ある人は幸福に満ちたところに生まれ、ある人は苦しみで満ちたところに生まれ変わる。その後、〔苦しいからと〕悔やんでみても、どうすることができようか。〔どうすることもできない。〕世間の人々とは心愚かにして、智慧が浅いものである。善行を見ては〔かえって〕憎しみを憶えてけなしてしまい、それに憧れて自分も善行を修めようとは〔決して〕思わないのである。ただただ悪事をはたらこうと思い、やることなすこと法に触れ、いつも〔人の物を〕盗ろうと他人の資産に目をつける。〔そうして盗んだり奪い取ったりした財産も結局は〕使い果たして、再び〔他人の財産に〕狙いをつけるのである。

〔こうして〕邪な心で不正を続けていると、〔次第に〕他人の目を恐れるようになる。はじめは〔たいしたことなどとは〕思いもよらなかったが、いざ捕まってみると〔事の重大さに〕後悔の念が湧いてくるのだ。

今生においてすら法の定めにより牢に投獄され、罪〔の軽重に〕したがってその罰を受けなければならない。〔まして〕前の世において、仏道を歩むことの功德を信ぜず、善行を修めて来なかつた者は今生でもふたたび悪事をなす〔者であつて〕、天地の神々が〔彼らの罪を〕記録に取つて〔悪人専用の〕名簿に載せ、〔その人の〕寿命が尽きて魂が死後の世界に入ったならば、〔その者は地獄・餓鬼・畜生の〕悪しき世界に堕ちて行くのだ。こうしたわけで〔地獄・餓鬼・畜生の〕三つの世界〔に自ずと堕ちて〕計り知れない苦痛を受けるのである。〔そして、〕その中で何度も生まれ変わり、どれほど永い時間をかけようとも、解脱を得ることが叶わないのだ。〔その間に受ける〕苦痛たるや筆舌に尽くし難いのである。

こうしたことを「二大悪」・「二痛」・「二焼」と言うの

である。「悪行の報いに」苦しむことは、まるで大火でその身を焼き尽くすような痛みと言えよう。

〔しかしながら〕 こうした〔迷いの〕世界の中でも、人が心を集中させて〔雑念を払い〕、身を正して行いを慎み、専ら善行に励み、悪行を犯さずにいれば、その人だけは独り輪廻を解脱するのである。〔即ち、まずこの世での〕幸福に恵まれ、〔さらに次の世には〕天界にも、覚りの世界にも入ることができるのだ。

このことを「二大善」と言うのである。」

### ○第三悪

〔続けて〕 釈尊が仰せになった。

「第三番目の悪について〔説き明かそう〕。

世間の人々は共に肩を寄せ合い支えあいながら<sup>32</sup>、この地上で暮している。一年一年、歳を重ねるものの〔実際のところ〕あとどれほどの寿命が残っているのか分かるものではない。〔人々の中には〕賢明な者や長老がおり、身分の高い者や大富豪もいる。あるいはまた貧困にあえぐ者もいれば、身分の低い者、病弱な者、愚かしい者も

いる。〔さまざまな人がいるが、〕その中には好ましくない人もいて、常に邪な思いを懐いているのだ。頭の中では猥らなことばかりを考え、心は悶々とした思いで張り裂けそうなのである。繰り返し情欲が湧き起り、少しも落ち着かず居ても立つてもいられないのだ。情欲をぶつけては相手を束縛し、〔それでも飽き足らず〕手当たり次第我が物にしようとするのである。異性の容姿をなめるように見つめ、下心を持って近づき、〔一方では〕自分の妻を邪険にして、密かに〔愛人のもとに〕出入りするようになる。〔そうこうするうちに〕家財を売り飛ばし、〔金の工面しようとして〕悪事に手を染めていくのだ。

〔その間には〕類は友を呼んで徒党を組み、首領をたてて〔他の集団と〕抗争を繰り替えし、攻め入っては相手を殺戮し、すべてを奪い去るなどして、人の道から外れて行くのである。悪企みする目で世間をうかがい、自らは働こうとせず、〔はじめのうちには〕密かに人の物を盗んでいたものが、〔次第に〕強盗<sup>33</sup>をはたらき、〔さらには人々に〕恐怖を与え〔金品を〕脅し取ることで、

妻子を養うのである。やりたい放題に好き勝手なことをして快感を覚え、「その矛先はやがて」親類にも及んで見逃さなくなっていく。「それ故」自分の上下にかかわりなく「誰もがみな」<sup>34</sup>、さらには親類縁者までもがその者を憎々しく思い、苦痛に感じてしまうのだ。またそのような者は国の定める法律など意に介しもしないが、このような悪行は人々の間でも、あるいは鬼たちの間でも知れ渡るのである。太陽や月の光がこの世を照らしている以上、「人や鬼が見逃したとしても」天地の神々はその罪を記録にとつてゐるのだ。

こうしたわけで「死後には地獄・餓鬼・畜生の」三つの世界〔に自ずと堕ちて〕計り知れない苦痛を受けるのである。「そして、」その中で何度も生まれ変わり、どれほど永い時間をかけようとも、輪廻解脱を得ることが叶わないのだ。「その間に受ける」苦痛たるや筆舌に尽くし難いのである。

こうしたことを「三大悪」・「三痛」・「三燒」と言うのである。「悪行の報いに」苦しむことは、まるで大火で

その身を焼き尽くすような痛みと言えよう。

「しかしながら」こうした「迷いの世界の」中でも、人が心を集中させて〔雑念を払い〕、身を正して行いを慎み、専ら善行に励み、悪行を犯さずにいれば、その人だけは独り輪廻を解脱するのである。〔即ち、まずこの世での〕幸福に恵まれ、「さらに次の世には」天界にも、覺りの世界にも入ることができるので。

このことを「三大善」と言うのである。」

#### ○第四悪

〔続けて〕釈尊が仰せになった。

「第四番目の悪について〔説き明かそう〕。

世間の人々の中には善行を修めようという気のない者もいる。「そういう者たちは」お互いに示し合わせて、共に悪行を犯すのである。二枚舌を使い悪口を言い嘘をつき、その気もないのにお世辞を並べ立て、言葉巧みに人を陥れたり仲たがいさせて闘わせたりする。善人を見ては憎しみと嫉妬を覚え、賢者からは何もかもを失わせ、それを影からほくそえんでいるのだ。父母に孝行せず師

匠や年長者を軽んじ、友達を信用せず〔誰に対しても〕本心を明かさない。〔心のうちでは〕自分こそ最も尊く偉大な人物であると思ひ込み、自分には〔自分の歩むべき〕道があると勝手な理屈つけ、身勝手に振る舞つては威張りちらし、他人を見下しているのである。〔しかも〕そういう自分に気付くことができず、悪行を犯しても恥じ入ることがない。〔さらに〕握り拳を振り上げ、他人が恐れをなしてひれ伏すように望むのである。

〔こうした者は〕天地の神々、太陽や月さえも畏れず、間違つても自ら善行を修めるようなことはなく、〔人の意見に〕従おうともしない。自分の考えのみを押し通し、しかも尊大に振る舞つて、いつもそれを当然のこととしてしまうのだ。〔他人のことを〕心配したり、〔他人を〕畏れたりすることがなく、常に高慢な心を懐いているのである。〔しかし、〕そうした悪行は天地の神々によつて記録されている。

〔たとえ〕前世で善いことをたくさん重ねてきたとしても、わずかばかりの利益がもたらされるだけで、よう

やく〔その人が〕護られている〔に過ぎない〕。〔そうした〕今生において悪行を犯せば、〔前世で得られた〕利益はたちまち尽き果て、〔本来寄り添うはずの〕善神たちもその人の元から離れ去つてしまうのだ。〔そうして〕独り空しく立ち尽くし、〔誰にも〕することができなくなる。命尽き果てると、〔それまでの〕悪行〔の報い〕が〔その人の身に〕寄り集まり、そのまま〔その人を〕押し流すように〔次の世へと〕一緒に赴いて苦しみを与えていくのである。

またその人の名前が〔悪人専用の〕名簿に記され、天地の神々の知るところとなり、刑罰が〔その人の身を〕引き寄せ、〔その人は引き寄せられた方へと〕行くしかなくなるのである。罪の報いがあるのは当然のことであり、〔それを〕切り捨てることなどできやしない。前の世の行いによつて火炎渦巻く釜の中に放り込まれ、身も心も粉々に碎け散り、〔悪行を犯した者の〕魂は〔ただただ〕激しい苦痛を味わう〔ばかりな〕のだ。その時になつて後悔してみても、〔もはや〕どうしようもない。〔こ



のような「天地の道理は決して違うことがないのである。

こうしたわけで「死後には、地獄・餓鬼・畜生の」三つの世界に自ずと堕ちて、はかり知れない苦痛を受けることになる。「そして」その中で何度も生まれ変わり、どれほど永い時間をかけようとも、輪廻解脱を得ることが叶わないのだ。「その間に受ける」苦痛たるや筆舌に尽くし難いのである。

こうしたことを「四大悪」・「四痛」・「四焼」と言うのである。「悪行の報いに」苦しむことは、まるで大火でその身を焼き尽くすような痛みと言えよう。

「しかしながら」こうした「迷いの世界」の中でも、人が心を集中させて「雑念を払い」、身を正して行いを慎み、専ら善行に励み、悪行を犯さずにいれば、その人だけは独り輪廻を解脱するのである。「即ち、まずこの世での」幸福に恵まれ、「さらに次の世には」天界にも、覚りの世界にも入ることができるのである。

このことを「四大善」と言うのである。」

### ○第五悪

〔続けて〕 釈尊が仰せになった。

「第五番目の悪について〔説き明かそう〕。

世間の人々の中には何事も他人まかせ<sup>35</sup>にして怠けた生活を送る者がいる。「彼らは」進んで善行を積もうとはせず、そればかりか生計さえ立てようともせずに一族郎党を飢えと寒さに苦しませ、父母がそれに意見すると目を吊り上げ怒りをあらわにする。「父母の」言いつけにも聞く耳を持たず、「むしろ親とも思わず」反逆するのである。それはまるで目の仇にするようであり、「親から見てもいつそのこと」いないほうが良い（とさえ思わせる人なのである）。無法にも「他人から金品を」奪い取り、「他人ものにも関わらずそれを別の人に」分け与えることから、誰からも疎まれ嫌われているのだ。恩を仇<sup>あだ</sup>で返し、仁義を守らず、感謝する心もない。「實際のところ」貧しさに苦しみ、自分で収入を得る手立てもない（ことから）、他人の利益を横取りしては独占<sup>36</sup>し、湯水のようにどんどん使い果してしまうのだ。度々、方々から横取りしてきて、それに慣れてしまうと、「そのう

ち奪つた金品を」用いて自身「の生活」をまかなうようになり、「ついには」酒に浸り美食を貪るなど飲食に執着して際限がなくなるのである。「そして」やりたい放題の向くままに過ごし、どこまででも出向いて押し入つてしまふのだ。他人の気持ちなど見向きもせず、どうでも「人を」支配して自分の言いなりにしようと思ひ、他人の善行を眼にすれば憎々しく思ひ嫉妬し、それをそしるのである。仁義も守らなければ礼節にも欠け、自ら「の行いを」反省しようなどという気はさらさらでない。自分で「すべてを」取り仕切つていたので、「誰の忠告も」受け容れることはないのである。

〔またこうした者は〕一族郎党を援助するか・しまいか、そのようなことを意に介する気などまったくなく、父母の恩に思いをいたすことも、師を敬つたり友を大切にしたりする気持ちもない。心にはいつも悪事を企て、口にはいつも悪意に満ちた言葉を発し、身にはいつも悪意に満ちた振る舞いをなし、何一つ善いことをしてこなかった。古の聖者や諸仏の教えを信ずることもなく、「もち

ろん」仏道を歩めば覺りの世界へ辿り着くことができるということも信じていない。死後には魂がまた「どこかの世界に」生まれ変わるといふことも信ぜず、善因善果・悪因悪果（という因果の道理）も信じることがない。「そればかりか」覺りを得た聖者を殺めようとし、修行者たちを仲たがいさせようとし、父母・兄弟・家臣に危害を加えようとさえする。「それ故」一族の者たちは、その者を忌み嫌い「死んでしまえ」とさえ願つていたのである。

このような者はもはや心根も志もどうにも変わりようがなく、愚かにも「真理の教え」を知らぬまま、自身の知恵をめぐらしたところで、「自らが」どこからこの世にやつてきて、死後どこに立ち去ろうとしているのかわかる由もないのだ。人情がなく、善悪もわきまえず、「因果応報という」天地の道理に背く一方で、「この世の道理からすれば」あり得ないような幸運を期待し、長生きを望むけれども、「どうあがこうとも誰であれ」死に至るのである。「誰かが」情け心から「これまでの行いを」

悔い改めるように諭し、「加えて」何か善いことをする  
ように勧めて、「しかも」輪廻生死の中には善い世界と  
悪しき世界があるべくしてあると説き示してみても、「そ  
の者は」それを一向に信じようとはしない。どれほど苦  
心して説得しようとしても、その人にはまったく通じな  
いのである。「しかしながら」一切考えを改めず、また  
人の意見も受け容れない者でも、自身の命が尽きようと  
してはじめて「死後への」恐怖と「生前への」懺悔が次々  
と湧き起こるものなのだ。それまで善行を修めてこなか  
ったことが、最期の最期になって悔やまれるのである。  
「しかし」その時になって悔いてみたところで、もはや  
どうにかなるものではない。

天上から地中にいたる間には「天・人・畜生・餓鬼・  
地獄の」五つの世界が厳然と存在し、「こうした輪廻の  
世界は」際限なく広がっている。善因には善果があり悪  
因には悪果があり、わざわいと幸いとが相次いで自分自  
身に還ってきて、「それを引き受けるに」代わってくれ  
る人は誰もいないのである。

「そもそも」因果の道理は変えようもなく、「その人の」  
行いにしたがって報いがある。「たとえ命が尽きても、  
生前に犯した」罪科の報いは「次の世に生まれ変わった  
後も」、その人を追いかけてきて、捨て去ることはでき  
ないのだ。

善人は「前の世でも」善行を修めてきたので、幸福「な  
世界」から幸福「な世界」へと生まれ変わり、光「に満  
ち溢れた世界」から光「に満ち溢れた世界」へと生まれ  
変わる。「一方」、悪人は「前の世でも」悪行を犯してき  
たので、苦しみ「の世界」から苦しみ「の世界」へと生  
まれ変わり、暗闇「の世界」から暗闇「の世界」へと生  
まれ変わるのだ。

「ただし、一体、このことを」誰が知っているという  
のであろうか。ただ覚った者のみが知っているのである。  
「それ故このことを」説き明かそうとしても、信じよう  
とする者は数少ない。「したがって」輪廻生死は止むこ  
となく、「悪しき世界へと陥る」道はなくならないので  
ある。このような世間の人々について「一人一人」詳し

く取り上げようとしても、それは困難なことである。

こうしたわけで〔死後には、地獄・餓鬼・畜生の〕三つの世界に自ずと堕ちて、はかり知れない苦痛を受けるのである。〔そして、〕その中で何度も生まれ変わり、どれほど永い時間をかけようとも、輪廻解脱を得ることが叶わないのだ。〔その間に受ける〕苦痛たるや筆舌に尽くし難いのである。

こうしたことを「五大悪」・「五痛」・「五焼」と言うのである。〔悪行の報いに〕苦しむことは、まるで大火でその身を焼き尽くすような痛みと言えよう。

〔しかしながら〕こうした〔迷いの世界〕の中でも、人が心を集中させて〔雑念を払い〕、身を正して、因果の道理を正しく理解し、言葉と行動とを一致させ、しかもその振る舞いに嘘偽りをなくし、口に出したことはその通りであつて、心にもないようなことは口にせず、専ら善行に励み、悪行を犯さずにいれば、その人だけは独り輪廻を解脱するのである。〔即ち、まずこの世での〕幸福に恵まれ、〔さらに次の世には〕天界にも、覺りの

世界にも入ることができるのである。

このことを「五大善」と言うのである。」

○以上、『無量寿經』卷下四分三

〔このように解き終えらるると〕釈尊は〔再び〕弥勒菩薩に仰せになった。

〔弥勒よ、そして弥勒と共にいる者たちよ。〕汝らに言つておく〔ことがある〕。この世における五悪とはこのように苦しいものである。〔また五悪にはそれぞれ五通りの苦痛を伴い、〔しかもそれは〕身を焼き尽くすような苦痛であつて、生死を繰り返すたびに〔こうした苦痛を〕受けるのである。悪行を犯し、善行を修めずにいれば、みなことごとく自ずから〔地獄・餓鬼・畜生の〕悪しき世界に陥つてしまうのだ。あるいは今生にあつては重い病を得て、自らの生き死にさえままならない。〔自ら犯した〕罪惡の招くところは〔どのような形であれ〕人に知られることとなり、息が絶えれば〔今生の惡〕行に依じて〔地獄・餓鬼・畜生の〕三惡道に陥るのである。

〔その間、〕苦痛と毒気が絶え間なく渦巻き、それらが相俟って炎をあげ、〔それが〕やがて怨恨となる。〔前世での〕他愛もない出来事が〔次生では〕巨大な悪となるのである。〔その者たちは〕みな〔前世で〕財産や異性に対して貪るように執着して、恵み施すことができず、愚かしい欲望が押し寄せ、心のおもむくままに〔妄想をふくらませていたのだ。そうして〕煩惱にがんじがらめに縛られて、解き放たれることがなかった。自分のためばかりを考え、金のためなら人を蹴落し、〔それでも〕まったく気にすることがなく、富を築き、周囲からちやほやされ、その上派手な生活を送っている時は凶に乗っていい気になっていたが、我慢することを知らず、善行を修めることもしなかった。〔とは言え、そうした〕勢いがいつまでも続く訳がなく、〔その勢いも〕次第と磨り減り消えてしまうと、その身に苦勞が降りかかり、しばらくの後は悲惨な状況におちいり、〔しかも〕因果の道理がすべてに張り巡らされているから、〔そこから〕は逃れられず、犯した罪に〕責め立てきたのだ。〔因果

の道理という〕定めは〔悪行を犯した者の〕上に〔いつまでも〕、まるで網のようにびったりと覆いかぶさっている。<sup>37</sup>〔そして〕独り心細くおののきながらも、その網〔の中〕に絡め捕られるしかないのである。こうしたことは今も昔も変わらない。なんとも痛ましいことであり、憐れむべきことなのである。〕

釈尊が〔続けて〕弥勒菩薩に仰せになった。

「世間というものはこのようであるからこそ、仏〔たる者〕は皆、〔人々が悪しき世界へと堕ちていくのを〕悲しく思い〔居ても立つてもいられなくなるのである。そして〕仏は自ら携えている〕強大な眼に見えない力を用いて、さまざまな〔世間の〕悪を打ち砕き、やることなすこと全て善行となるよう〔人々に〕にしむけ、〔身勝手な〕思いを棄てさせ、仏の教えや戒めを護らせて仏道を歩ませ、仏道を踏み外させることなく、ついには覺りの境地へと登り詰める道を獲得させるのだ。〕

釈尊が〔改めて〕仰せになった。

〔弥勒よ。〕汝と、今〔ここに〕いる〕天人や人々が仏〔た

る私の」教えを聞いた以上、あるいは後の世の人々が、「仏たる私の教えが語られているところに出会った限りは」、この教えについて熟慮するであろうし、「この迷いの世界の」中にいようと、よく心を静めて行いを正していくに違いない。「たとえば」君主が善行に励めば、「彼は悪世に」苦しむ者たちをもよく導くことになる。「だから汝らは」互いに戒め合い、各々「我が教えにしたがつて」自分自身を正しく守りなさい。「汝らは」聖者を尊敬し、善行を慶び、お互いを慈しみ、分け隔てない愛情を持ち、仏のお諭しを破らないようにせよ。「そうして迷いの世界から」解脱を求め、生死を繰り返す悪行の根源を断ち切るがよい。「そうすれば汝らは地獄・餓鬼・畜生の悪しき」三つの世界に渦巻く、いつ終わるとも知れない細さと恐れと苦痛から必ず逃れることができよう。

汝ら、「弥勒と共にいる者たち」よ、こうした「苦しみ」の世界ではあるけれども、でき得る限り善行を修めて功德を積みなさい。親愛の情を以って施しをなし、仏の戒めることはそれを犯さず、何があつても堪え忍び、

何事にもくじけず、心を研ぎ澄ませて、覺りを開け。そして互いに導き合いながら、より一層の功德を積み、善行に励むがよい。一昼夜にわたり、心を正しくして邪な思いを捨て去り、出家者のように心身ともに清らかであれば<sup>38</sup>、その功德は無量寿仏の世界で百年にわたつて善行に励む功德よりも優れているのだ。なぜかといえば、その仏の世界では取り立てて努力をしなくても誰もがみな善行を修めることができ、悪「行を犯す可能性」など毛の先ほどもない。「だからこの世界で積む功德は尊いのである。もし」この「苦しみの」世界で十昼夜にわたつて善行を修めることができたならば、「その功德は無量寿仏を除いた」他の仏の世界で千年にわたつて善行に励む功德よりも優れている。なぜかといえば、他の仏の世界では善行を修める者が数多いて、悪行を犯す者などは数少ない。「しかもそこは、」幸福と幸運が何の苦勞もせぬまま訪れて、「敢えて」悪行「を犯す必要」のない世界なのである。「だからこの世界で積む功德は尊いのである。」

しかしながら、「我々の」この世界のみに於いては悪行が蔓延し、何の苦勞もなく「幸福や幸運が」訪れることなどまつたくない。「生き抜くために」苦勞を重ねるけれども「順調に行かず、財物を」求めて、ついにはお互い欺きあうことになる。心はすさみ身もやつれ、「生きるためには」毒であろうと飲み食いする。このように「生きるためには」何でもするような日々を送り、一日足りとも心休まる時がないのである。「だからこそ」私「積尊」は汝ら天人や人々を憐れみ、手を尽くして「汝らを」教え諭して善行を修めさせよう。一人一人の資質に応じて導き、各々に教えを授けるから、授けた教えにしたがつてみな修行せよ。修行できない者などいるはずもない。「汝らが」願う通りに、「私は」みなを覚りの境地へ導こう。仏「たる私、積尊」の赴く所、国であれ街であれ村であれ里であれ救いの届かぬことはない。天候は穏やかになり、太陽も月も清らかに輝き、時節良く雨が降り、風が吹き、災害や疫病も起こらない。国は豊かに栄え、民の暮らしは安らかとなり、戦争を起こすこともない。「人々

は」他人の善いところを尊び、互いに思いやりながら、つとめて礼儀正しく振る舞い、また譲り合うのである。」

〔続けて〕積尊が仰せになった。

「私「積尊」が汝ら諸々の天人や人々を慈しみ思いやることは、父母が我が子を愛する気持ちよりもはるかに深い。「それ故」今、私は「この苦しみの」世界で仏となり、五悪を制し、五痛を取り除き、五焼を根絶やしにし、「我が」善「行の功德」によつて「あらゆる」悪「行が起こらないようにそれ」を攻め立て、「天人や人々が」生死を繰り返す苦痛を抜き去り、「さらには五善にもとづく」五徳を身に具えさせ、覚りの安らぎの境地に導き続けているのだ。

「しかし」私「積尊」がこの世を去つた後には、私の教えや言葉は「この世から」徐々に消え去り、人々から真心が失われていつて、再びさまざま悪行が蔓延するのである。「そしてまた再び」五焼や五痛がぶり返してくる。「しかも」そうなたた後の「五悪・五痛・五焼の」激しきたるや、もはや説き尽くすことができなほどな

のだ。私が〔今、〕わずかながらも〔その激しきについて〕言及したのは、〔弥勒よ、〕汝のためである。」

釈尊が〔あらためて〕弥勒菩薩に向かつて仰せになった。

「汝らよ。各々、〔私が入滅した後のこの世について、〕よくよく胸に刻んでおきなさい。それぞれお互いに教え合い、戒め合いながら、私の教えの通りになさい。〔決して我が教えを〕犯してはなりません。」

すると弥勒菩薩は合掌して〔釈尊に〕申し上げた。

「仏の仰せになったことは、大変に殿しい<sup>39</sup>〔教え〕です。〔仏の滅後には、〕世の人々は確かに〔そう苦しむことに〕なるでしょう。如来〔たる者、いつの世においても〕あらゆる人々を親愛の情を以つて慈しみ、一人残らず生死の苦しみの世界から解脱させるものです。今あらためて仏の御心をお示しいただきました限りは、〔そのお言葉に〕絶対背きません。」

〔さて、そこで〕釈尊が〔私〕阿難に仰せになった。

「〔ところで〕阿難よ。立ち上がって衣を整えなさい。〔そ

うしたら次に〕合掌して恭しく無量寿仏に対して礼拝しなさい。あらゆる所に何の支障もなく出現する無量寿仏<sup>40</sup>のことを、あらゆる世界の諸仏・諸如来は四六時中こぞつて褒め讃えているのだ。」

すると阿難は〔言われるがままに〕立ち上がって衣を整え、身体を真西に向けて恭しく合掌し五体投地して、〔遙か彼方におられるであろう〕無量寿仏に対して礼拝したのである。

〔そこで阿難は釈尊に向かつて〕「彼の仏とその極楽世界、さらにはそこにいる諸菩薩や声聞、そしてまた多くの人々をこの眼で拝見しようございます」と申し上げた。〔阿難が〕そう言い終えるやいなや、無量寿仏は極楽世界〔から〕大光明を放つて、あらゆる仏の世界を照らし出したのである。〔するとこの世界を丸く囲んでいるという〕金剛圍山や、この世界の中心に王の如く高くそびえる須弥山や、その他大小の山々、〔そしてまたこの世界にある〕すべてのものが皆〔その光で〕同じ色に照らし出された。〔その様子は〕まるで大洪水がこの世を沈



め尽くし、あらゆる物がその水の中に沈んで現れることなく、ただ一面にどこまでも広がる水を眺めるようであったのだ。「無量寿」仏の光明はどのように「広がっていき、」声聞や菩薩たち「が放つ」すべての光明を一切吸収し、ただその仏の光明だけが燦然と光輝いていた。

その瞬間、阿難は無量寿仏の御姿を拝見した。「その姿は」威厳に満ちていて輝きを放ち、まるで須弥山がこの世界で独り高くそびえ立っているようであり、その御姿から発せられる光明に照らされないとどころなどなかった。出家・在家の男女を問わず、「そこで釈尊の説法を聞いていた」仏弟子たち（四衆）もみな、同時に「無量寿仏やその世界、そしてその住人たちを目の当たりに」拝見したので。そしてまた「彼の無量寿仏や極楽世界の住人たちも」同様に、かの「世界」からこの世界を見渡したのである。

その時、釈尊が阿難と慈氏菩薩<sup>41</sup>に仰せになった。

「阿難よ。」汝<sup>42</sup>は「今、無量寿」仏の「極楽」世界を目の当たりにしているが、この世界はもちろん、「天

人たちが覺りを開くという」淨居天に至るまで、それらの世界で見ることのできる莊嚴のすべてがそこに見えるか、「それとも」見えないか。」

それに対し阿難が答えた。

「はい、「確かに」見えます」と。

「再び釈尊が尋ねた。」

「では汝はあらゆる世界に向けて説法をし、多くの者たちを導いている無量寿仏の大音響の聲が聞こえるか、「それとも」聞こえないか。」

「再び」阿難が答えた。

「はい、「今」すでに聞こえています」と。

「再度、釈尊が尋ねた。」

「では、汝は「極楽」世界の人々が七種の宝石からできていて「一辺が」十万（百千）由旬にも及ぶ宮殿の中で「自由自在に」何の妨げもなく「居場所を移し、さらには極楽を」飛び出して、あらゆる世界の仏がたを供養している様子を見ることが出来るか、「それとも」できないか。」

〔再度、〕阿難が答えた。

「はい、〔今〕すでに見ています」と。

〔さらに釈尊が尋ねた。〕

「では、汝は〔極楽〕世界の人々の中で、〔蓮華の蕾を〕母胎として往生<sup>43</sup>してきた者がいるのを見ることができるか、〔それとも〕できないか。」

〔阿難が〕答えた。

「はい、〔今〕すでに見ています」と。

〔釈尊が仰せになった。〕

「その者たちが住むことになる宮殿は、〔二辺が〕あるいは百由旬あるいは五百由旬であり、各々その中でまるで切利天にいるようなさまざまな幸福感に包まれ、何一つ苦勞がない<sup>44</sup>。」

その時、慈氏菩薩が釈尊に尋ねた。

「世尊よ。いかなるいわく因縁があつて、〔極楽〕世界の人々は蓮の蕾の中に往生（胎生）してきたり、開いた蓮の華の上に直接往生（化生）してきたりするのでしようか。」

〔そこで〕釈尊が慈氏菩薩にお答えになった。

「もし人々が〔無量寿仏が実在することを〕信じ切れないまま、さまざまな修行を積み、その〔極楽〕世界への往生を願つたとしよう。〔そういう彼らは無量寿仏の〕覺りの境地から溢れ出る智慧（仏智）・我々の思慮を超えた智慧（不思議智）・稱讚のしようもない智慧（不可称智）・あらゆる人々を救い摂るための智慧（大乘広智）・他に比べようもない優れた智慧（無等無倫最上勝智<sup>45</sup>）を〔にわかには〕納得できずに、これらの智慧に疑いを抱き信ずることができないでいる〔者たちなのである〕。しかしながら、幸と不幸〔が因果の道理によつていること〕は信じていて、繰り返し善行を修めながら〔極楽〕世界への往生を願っているのだ。彼らは〔蓮の蕾に入ったまま極楽世界にある小さな〕宮殿の中に生まれ、そこで五百年を過ごし、〔その間〕一時たりとも〔無量寿〕仏の姿を拝することもなく、その教えを聴くこともなく、菩薩や声聞など〔仏弟子たち〕の姿を見ることがない。こうした訳で〔極楽〕世界においては、彼らのことを胎

生（胎内に生を授かるような者）というのである。

〔逆に〕人々が〔無量寿〕仏の具える〔五種の〕智慧を疑いなく信じ切り、〔その上で〕さまざまな善行を修め、〔無量寿仏の救いを〕信じて善行の功徳を〔往生のために〕振り向ければ、その者たちは〔極楽世界の〕七種の宝石からできた蓮の華の上に自ずと姿を現し（化生）、〔しかも〕坐禅を組んでいるのだ。そしてあつという間に、〔極楽世界の〕菩薩とまるで同じ姿と光明と智慧と功徳を余すところなく具えるのである。

また慈氏菩薩よ。他方の仏の世界にいたいへん優れた菩薩たちが〔極楽世界の〕無量寿仏にお逢いし、〔また〕菩薩や声聞方に恭しく供養を捧げたいとの思いを抱いているならば、彼らはその命が尽きた後、無量寿〔仏の極楽〕世界に往生し、七種の宝石からできた蓮の華の上に自ずとその姿を現す（化生）のである。

弥勒<sup>46</sup>よ。よくわきまえておくがよい。〔彼らのように〕化生して〔自ずと極楽世界の蓮の華の上に姿を現す〕のは智慧が優れているからであり、〔一方、蓮の蕾の中

に〕胎生する者たちはみな智慧を具えていないからである。それ故、彼らは五百年の間、一時たりとも〔無量寿〕仏の姿を拝することもなく、その教えを聴くこともなく、菩薩や声聞など〔仏弟子たち〕の姿を見ることがなく、〔ましてや無量寿〕仏を供養する訳もなく、もちろん菩薩らしい立ち振る舞いもかなわず、善行を積むこともままならないのである。よくわきまえておくがよい。〔極楽世界に胎生した者たちがこのようになってしまうのは、〕前世において智慧を具えることができないまま、〔無量寿仏の救いに〕疑いを抱いていたせいなのである。〕

〔続けて〕釈尊が弥勒菩薩に仰せになった。

「たとえば全世界を統治する転輪聖王がその宮殿内に七種の宝石で飾り立てた特別な一室を設け、さまざまなインテリアを配し華麗な寝台や多くの壁飾りをかけていたとしよう。ある時、転輪聖王の幼い王子たちが何か悪戯したお仕置きとして、その部屋に閉じ込められ、黄金の鎖で繋がれてしまった。ただし食べ物や飲み物、衣服、敷物、花飾り、〔目や耳を楽しませる〕踊りや音楽など

が転輪聖王と同じように与えられて、何一つ足りない物がない場合、その王子たちはどう思うであろうか。その部屋を気に入るであろうか、否か。」

〔弥勒が〕 釈尊に答えた。

「いいえ。〔氣に入ることなどありません。〕何としてでも誰かに助けを求めて、その部屋から抜け出そうとするでしょう。」

〔そこで〕 釈尊が弥勒菩薩にお仰せになった。

「この〔極楽世界の小さな宮殿にいる胎生の〕者たちも、その〔王子たちの〕ようなものである。〔彼らは前世において無量寿〕仏の智慧を受け止められなかったがために、〔小さな〕宮殿の中に往生してしまつたのである。〔極楽に生じてからは、特に〕刑罰に問われるようなことはおろか一瞬たりとも悪行を犯そうなどと思ひもないが、五百年の間は仏とその教えと仏弟子たちという三宝に出逢うことができない。〔またあらゆる世界に飛び出して仏がたを〕供養するなどの善行も修められない。それを心苦しく思っているので、〔その宮殿内でも〕

さまざまな幸せを感じてはいるものの、ずっとそこにいたいとは願わないのである。

もしその者たちが前世に〔仏の智慧を疑つた〕罪深さに気付き、深く後悔しながら自身の至らなさを恥じ入り、そこから抜け出したいと求めるならば、その願ひのまま時を置かずに無量寿仏のみもとに詣でることができよう。そして恭しく供養を捧げ、さらにはあらゆる世界の仏がたのみもとに詣でて、さまざまな善行を修めることができるようになるのだ。

弥勒よ。憶えておくがよい。たとえ〔覺りを求める〕菩薩であっても〔無量寿仏の智慧を〕疑うのであれば、〔仮に極楽世界に往生したとしても、大きな宮殿に生まれるという〕一番大切な利益を失つてしまうのだ。だからこそ〔無量寿仏に限らずいかなる仏であろうとも、〕仏たる者の限らない智慧〔のはたらき〕をしかと信ぜよ。」

〔そのように諭された〕 弥勒菩薩は釈尊に尋ねた。

「世尊よ。この世に、仏となるまで仏道を退くことがない不退の菩薩が何人いるのか〔私は存じませんが、彼

らは極楽世界に」往生することができるのでしょいか。」  
釈尊が弥勒菩薩に答えた。

「この世には六十七億人の不退の菩薩がいて、極楽世界に往生する。彼らはすでに、みな無数の仏がたへの供養を捧げ終わっている。「弥勒よ。彼らはみな汝の」後を承けて、汝のように「やがてこの世を救う者たちとなるの」だ。「また、そこまで修行が進まず」善行の功德も少ない菩薩について言えば、その数は限りないけれども、彼らもみな往生できるのである。」

〔さらに〕釈尊が〔自ら〕弥勒菩薩に仰せになった。  
「私〔が仏となつたこ〕の世界の菩薩たちのみが〔無量寿仏の極楽〕世界に往生するわけではない。他の〔十三の〕み仏がたの世界にいる菩薩たちも同じように往生する。〔その一々をあげれば次の通りである。〕」

第一の仏は「遠照」という名で、その〔仏の〕世界には百八十億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第二の仏は「宝藏」という名で、その〔仏の〕世界に

は九十億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第三の仏は「無量音」という名で、その〔仏の〕世界には二百二十億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第四の仏は「甘露味」という名で、その〔仏の〕世界には二百五十億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第五の仏は「龍勝」という名で、その〔仏の〕世界には十四億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第六の仏は「勝力」という名で、その〔仏の〕世界には一万四千の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第七の仏は「師子」という名で、その〔仏の〕世界には五百億の菩薩がいて、みな〔極楽世界に〕往生することができる。

第八の仏は「離垢光」という名で、その〔仏の〕世界

には八十億の菩薩がいて、みな〔極樂世界に〕往生することができる。

第九の仏は「徳首」という名で、その〔仏の〕世界には六十億の菩薩がいて、みな〔極樂世界に〕往生することができる。

第十の仏は「妙徳山」という名で、その〔仏の〕世界には六十億の菩薩がいて、みな〔極樂世界に〕往生することができる。

第十一の仏は「人王」という名で、その〔仏の〕世界には十億の菩薩がいて、みな〔極樂世界に〕往生することができる。

第十二の仏は「無上華」という名で、その〔仏の〕世界には数え上げることできないほど多くの菩薩がいて、みな覺りを得るまで仏道を退くことなく、深い智慧と何事にも怯まない勇氣を具えている。彼らは〔前世において〕すでにもう無数の仏がたに供養を捧げていたことにより、優秀な菩薩たちが十萬億劫というとても長く永い時間修行してはじめて体得することができるとい

う、何があつても揺らぐことのない不動の境地を〔たつた〕七日の間で身につけている。このように優れた菩薩たちまでもが〔自ら望んで極樂世界に〕往生していくのである。

第十三の仏は「無畏」という名で、その〔仏の〕世界には七百九十億の優れた菩薩がいる。〔またそこには〕そうではない菩薩や出家修行者たちも数限りなくいて、彼らはみな共々に〔極樂世界に〕往生することができるのである。」

釈尊が〔続けて〕弥勒菩薩に仰せになつた。「〔この世界も含めて〕これら十四の仏の世界にいる菩薩たちだけが〔極樂世界に〕往生すると思つてはならない。数限りないあらゆるみ仏がた〔それぞれ〕の世界から〔極樂世界に〕往生してくる者たちも、また非常に大勢で数限りないのである。

あらゆる世界にましますみ仏がたのお名前や、その世界にいる菩薩や出家修行者たちの中で〔極樂〕世界に往生する者〔の数〕について一々説き明かそうとすれば、

この私が昼夜を分かつたらずに、一劫という永い時間をかけたとしても説き終えることはできない。「弥勒よ。」ここで今、「私は」汝のために「さわりの所だけを」略して説いただけなのである。」

### ○第三流通分

釈尊が「あらためて」弥勒菩薩に仰せになった。

「弥勒よ、」よく憶えておくがよい。「無量寿」仏の名を耳にして、踊り出すほどに歓んだならば、その瞬間にその人は「極楽世界の、しかも無量寿仏のみもとに往生が約束されるという」大いなる功德を得ることができ。それこそ、これ以上ない功德が身に具わるのである。

それゆえ弥勒よ。たとえ全世界が大火に包まれようとも「その炎に耐えて、この無量寿仏の救いに関するすべての教えを聞くべきである。というのも、」その教えを聞いたならば感動とともに信心が湧き起こるからである。「そして、その者はその教えを」胸に刻んで繰り返し口に唱え、説かれた通りに修行すべきである。

なぜかといえば、多くの菩薩たちがどれほどこのような教えを聞いたがたとしても、今まで「誰も」耳にする機会がなかった。「しかも、迷える」衆生であろうとも、もしこの教えを聞いたならば覚りを得るまで仏道を踏み外さないからなのである。だからこそ、ただ一筋にこの教えのみを信じ、胸に刻み、口に唱え、説かれた通りに修行せよ。」

「さらに」釈尊が仰せになった。

「私は今、「あらゆる」衆生のためにこの教えを説き、なおかつみなに無量寿仏とその世界のあらゆるものを見せしめた。それを見たからには、「みなの方よ、」極楽世界を求めよ。私が死んだ後、「この教えに」疑いを懐くようなことがあつてはならない。未来の世に「私の」教えがすべて消滅する時がやってくるにしても、私は「衆生を」救いたい一心から慈悲の心によって、唯一この教えをこの世に、「さらに」百年の間は止め置くこととする。「やがてこの世から私がいなくなるにしても、」この教えに衆生がめぐり逢つて願ひさえすれば、その通りにみな

〔輪廻生死から〕解脱できるのである。」

〔続けて〕 釈尊が弥勒菩薩に仰せになった。

「仏となるべく」この世に現れ出でた如来と出逢える可能性はほとんどない。「また」諸仏の教えを耳にする可能性もほとんどない。菩薩たちが修める優れた教えや六波羅蜜の教えについても同様である。優れた師匠にめぐり逢い仏の教えを聞き、それを修めることも滅多にならぬ。ましてこの〔無量寿仏の救いに関する〕教えを耳にし、感動を憶えるとともに信奉し、胸に刻み込むことは皆無に等しい。これ以上の困難は存在し得ないのである。だからこそ〔弥勒よ〕。私の教えについては、このように〔私が仏と〕なつて、このように〔私が〕説き明かし、〔そして〕このように〔私が〕教え弘めたその通りに、〔やがて汝もその通りに実行するのだ。よいか。私の教えを〕信じ、〔私の教え〕通りに修行せよ。」

釈尊がこの〔無量寿仏の救いに関する〕教えを説いた時、〔その場にいた〕計り知れないほど多くの衆生がみなこの上ない覚りの境地を目指し、一万二千那由

他<sup>47</sup> 人の人々が真理を見究める汚れなき眼を獲得し、

二十二億もの天人や人々がみな欲望のない天の世界に生まれ変わつて、そのまま覚りを得ることとなる。「阿那含」の境地に到達し、「また」八十万の出家修行者たちが煩惱を断ち切つた〔阿羅漢〕となつた。「そして」四十億の菩薩が覚りに至るまで決して仏道を踏み外すことのない「不退転」という境地に到達し、「あらゆる衆生を救いという」広大な誓いを建てて、その功德によつて自らを壮麗に飾り立てた。まさに〔その菩薩たちは〕来世において完全なる覚りの境地を得る者となつたのである。時を同じくして、全世界が東西南北上下に激しく振動して〔釈尊の説法を讀え〕、大いなる光明があらゆる世界を照らし出し、十萬種に及ぶ楽器が自ずと鳴り響き、無数の花びらがひらひらと舞い降りるなか、釈尊はこの教えを説き終えたのである。

弥勒菩薩をはじめあらゆる世界から釈尊のもとに集まつて来ていた多くの菩薩たち、「そして」長老である〔私こと〕阿難や優れた仏弟子たち、さらには〔その場に集



まった)多くの者たちが、釈尊の教えを聞き終えた中、(誰一人として) 歓喜しない者はいなかったのである。

仏説無量寿經卷下

今回、注記は省略とする。

(特別業務 大遠忌関連 浄土三部経)

# 四十八卷伝

## 五卷

### 第一段

法然上人は次のように説かれた。「学問は、自分がはじめて見定めることが、非常に大事なことである。師匠の説を受け継いで習得するのはやさしい。ところが私は、諸宗すべてを自分ひとりで注釈書を読んで理解した。戒律については、中の川少将実範じつぱん上人から、偷蘭叉ちゆうらんじやという専門用語の読み方だけを聞き習った。そうでないものは自分ですべて見出したものである。法相宗についても、藏俊と会いはしたが、法相の教えを学ばなかった。彼は遠慮して教えてくれなかった。ただ、専門用語ひとつだけ聞いて理解した。亡くなった慈眼房叡空もはつきり理解しておらず、小乗戒については学んでいなかった。

かろうじて、真理そのものを観想する理観を学んでいるくらいである。通常、すぐれた学僧といわれても、大乗の戒律について、私のように正しく説明できるものは少ない。今の時代に、書物に広く目を通した人を、私は誰も知らない。書物を読む際に、これはそのことを結論として言っているのだな、と読み取るとは困難なことではあるが、私は書物を手にとつて一見すれば、そのことを解説した書物だな、とわかつてしまう能力をもっている。要するに、まず章題を見て大方の内容を理解するものだ。」と。

また次のようにも説かれた。「自宗や他宗の学僧たちで、それぞれの宗派で立てている宗義を別個のものとして理解せずに、自宗の教えにそむくことを、すべて間違つたことと見なすのは、根拠のないことである。それぞれの

宗派で立てる法門は別個のものであるから、諸宗の法門は同じであるはずがない。他宗の教えが自宗の教えと異なるのは、もつともなことだ。」とおっしゃった。

## 第二段

建仁二年（一一〇二）九月十九日の説教の時、法然上人は次のように説かれた。「弘法大師空海の『秘密曼荼羅十住心論』は、『大日経義釈』に基づいて著されているが、『義釈』と食い違ふところが多い。『義釈』は、善無畏三蔵の講説を一行阿闍梨が筆記されたものである。一行は多忙な人であつたから、筆記した文章を整理しないまま没したところ、後に学僧によつて整理された本がたくさんある。その中に弘法大師が整理した本もある。もともとの『義釈』には、〈極無自性心の中に、『華嚴経』『般若経』に説かれる思慮を超えた境地の立場を含める〉とあるのを、弘法大師が整理した本では『般若経』を捨てて、ただ〈『華嚴経』の立場を含める〉とだけ書いてある。また同様に『十住心論』には、〈華嚴宗

の立場である〉と説明されている。

ところで十住心というのは、異生羶羊心・愚童持齋心・嬰童無畏心・唯蘊無我心・拔業因種心・他縁大乘心・覺心不生心・一道無為心・極無自性心・秘密莊嚴心の十種の心のことである。はじめの異生羶羊心は、三惡道（地獄・餓鬼・畜生）に落ちた人の心であり、この中に修羅道をも含める。第二の愚童持齋心は、人間世界の教えを實踐する心である。ここに儒教で説く仁・義・礼・智・信を含める。第三の嬰童無畏心は、天上に生まれる教えを實踐する心である。ここに老子・莊子の教えを含める。第六の他縁大乘心は、法相宗の修行をした人の心である。第七の覺心不生心は三論宗、第八の一道無為心は天台宗、第九の極無自性心は華嚴宗、第十の秘密莊嚴心は真言宗である。はじめの異生羶羊心を除いて、そのほかの九種の住心に、仏教以外の書物である外典や、仏教内の書物である内典に説かれる種々の教えが、すべてその中に包摂される。そうであるなら弘法大師の意図によれば、内典・外典の書物はすべて学ぶべきものであろうか。この

ようなわけで、御室仁和寺門跡も博学であることを好まれ、私に向いて講義するよう指示があつたのかと思われる。

ただし、この『十住心論』の考え方には大きな難点がある。『義釈』には、ただ〈何經の趣旨を含める〉とか、またはただ〈何論の趣旨を含める〉とか言っているのを、一宗の問題として扱つて、〈華嚴宗の立場に含める〉とか、〈法華宗（天台宗）の立場に含める〉としてゐるのは、誤まりだと思われる。もし十住心それぞれを宗に含めて勝劣を判定すれば、諸宗がお互いに善し悪しの論争をするものではない。法華宗は華嚴宗より浅はかな教えだと言へば、まったく法華宗の趣旨に背くことになる。どうして尊敬の意を込めて「天台宗」と言うことができるだろうか。ただそれは華嚴宗の意図にすぎないと見たほうがよいだろう。諸宗がお互いに浅い深いを論争することに対して、第三者の誰が判定できようか。

およそ一宗のしきたりとして、釈迦が生涯に説かれた

聖教について浅い深いを判定するのは、一般的なことである。したがつて一切經はどれも釈迦一人が説かれたものではあるけれど、各宗で学ぶ内容にしたがつて浅い深いや勝劣の判定が同じでないから、何宗から見た一切經と言わなければならない。天台宗から見た一切經もあり、華嚴宗から見た一切經もある。そして法相宗や三論宗にもそれぞれの一切經があるはずである。天台宗の一切經では、『法華經』が最もすぐれているとするので、釈尊が『法華經』以前に説かれた諸經と対比して、十箇のすぐれた点をあげている。華嚴宗の一切經では、『華嚴經』が最もすぐれているとしている。三論宗では、様々な大乘經典は悟りへの道をあきらかにしている点では異ならないと主張するが、『般若經』を究極の教えとしている。法相宗では、『解深密經』げじんみつぎよを真実の教えとしている。このように、それぞれの宗では理解が異なっているのに、無理やり各宗を十住心に当てはめて、浅い深いを判定されることには、しかるべき理由がない。諸宗のしきたりでは、ただ經典についてのみ浅い深いや勝劣の判定を下

すのである。ましてや善無畏の『義釈』では、まったく經典について言うのみである。また『義釈』には、(第九の極無自性心に)『華嚴經』や『般若經』に説かれる思考を超えた境地を含める)とあるのを、『十住心論』には、『般若經』には触れず)ただ『華嚴經』のみ取り、さらに誤つて華嚴宗までを含めてしまい、そして『般若經』を第七の覚心不生心に含めるのは、これまた『義釈』に背いている。

このような趣旨から、ひそかに非難を加えていたところ、今から二十余年ほど前になろうか、源平合戦が起る前、私が嵯峨に住んでいた頃、次のような夢を見た。人に招かれて外出したそのあとに、(弘法大師から、必ず参上いただきたいと使いの者が来ました)と言うのを聞いて、心の中で(内々に非難したことが、漏れ聞こえたのだな)と思つたけれど、そうではあつてもお招きだと思つて、ただちに大師の住房へ参上した。それは五間ほどの家で、板の間も仕切り戸もなく、ただ内部の四方に壁を塗りめぐらして入口さえない部屋があるだけであ

る。大師はこの中におられると思われた。まず外でせきばらいをすると、壁の内から(こちらへ)とおつしやる声が出た。その声に従つて、家に入つて壁の内を見ると、どこにも入口がない。壁のくずれた所だけがある。そのくずれた所からくぐつて入ると、大師は壁際におられ、すぐにお互いの胸を合わせて抱き合つた。大師は顔を私の左肩に置かれた。こうして以前非難したことについて、一つ一つ、お互いの意見に矛盾がないよう解釈された。その解釈を聞いても、やはり驚くことはなかつた。(へそれについては…)と言つて、再度大師の考えを非難しようと思つたところ、夢からさめた。後にこのことについて思案すると、非難した内容がすべて大師のお考えに叶つていたのであろうか。二人でしっかり抱き合つたのは、ご意向に叶つているように見えるはずである。本当によく非難してくれた、と思われからこそ、夢の中でも様々に矛盾なく解釈されたのだらう。

一般に、後学者に対しては(これから学問して偉くなるであろうから)畏怖しなければならぬと言ひ慣わし

ており、学者は必ずしも先学者だからといってりつぽであるとは限らない。釈尊が入滅されて五百年後に、五百人の阿羅漢が集まつて『大毘婆娑論』を著したところ、釈尊が入滅されて九百年後に世親が生まれて、『俱舍論』を著して先行の学説を論破された。学説が正しいか誤っているかを議論するにあつては、決して大昔の説に対して恐れてはならない。」とおつしやられた。

### 第三段

法然上人は、はじめは天台密教(台密)を学ばれていた。ところが中の川実範阿闍梨は、上人の仏教を受容する器量に深く感心して、自分の弟子と認めて灌頂を授け、真言宗の要点を残すところなく伝受した。実範は、東寺の密教(東密)の流れをくむ中院流の教真阿闍梨から灌頂を受けた弟子で、以前から勧修寺の範俊僧正を師としていた。密教の修法と教学に通達していたのみでなく、他宗の教えにも詳しかった。それなのに実範は上人に帰依するあまり、後には実名の二字を書いて献じその弟子と

なり、鑑真和尚から伝わる小乗戒を受けた。上人は、円頓戒を中心として守つておられた。ところが円頓戒を差し置いて、実範は鑑真から伝わる小乗戒を受けられたが、これにはきつと深い意味があつたのだろう。

### 第四段

法然上人は、当世第一の知恵者だという名声がたまにあふれ、多くを聞いて広く学んでいるという世評は隅々まで及んだ。およそ日本に伝来した経論や高僧伝などで読まないものはなかつた。そこで、郷里の師匠観覚も実名の二字を書いて献じて弟子となり、比叡山黒谷の師匠叡空も上人を模範とされた。經典の言語文字によつて真理を追求する諸宗の教えに精通したのみでなく、文字を離れて心から心へ真理を伝える仏心宗をも、奥深くまで探求された。「禅宗は伝来して日が浅く先学者がないため、疑問を呈してはつきりとした判定ができない。」と、常におつしやつていたという。

円頓戒について説教された時、成覚房幸西が質問した

ことには、「この円頓戒は、あらゆる存在や現象の真実のあり様を戒の本体とする。ところが山王院の大師と呼ばれた円珍は、(あらゆる存在や現象の真実のあり様は、禅である)と述べられている。もしそうなら、禅の教えとこの戒の本体とは合致するのか、しないのか。」と。

上人が判定していわれるには、「この円頓戒は、文字によつて真理を示そうとする教えである。しかし禅宗は文字を離れて心の鍛練によつて真理を求めるのである。

どうして両者が合致するといえようか。ただし禅によつて悟つた人が、この円頓戒について説教したなら、間違ひなく正しい筋道に叶つたものになるだろう。禅の修行者が文字による教えを説いたなら、文字による教えが従となり禅が主となる。文字による教えの人が禅のことを説いたなら、禅が従となり文字による教えが主となる。およそ、真言宗や天台宗の立場から禅について推測するべきではない。まして法相宗や三論宗の立場からはなおさらである。ましてや、それ以外の小乗の宗派の立場からはなおさらである。」と。

これはまったく文字よる教えに立つような人の言葉ではない。実に、つるべ繩が短くては深い地下水は汲み上げられず、鳥の翼が弱くては大空に羽ばたくことができぬ。それと同じで、知恵が浅く心が愚かであつては、どうして禅を深く理解することができようか。だから、上人が禅宗の教えを論じられた自筆の書物が今に伝わっているのだ。未熟者はそのことを疑つてはいけぬ。

#### 第五段

ある時、法然上人が九条兼実邸の月輪殿(つきのわどの)で比叡山の僧侶と会つて会談されたことがあつたが、その僧侶が、「淨土宗を立てられたのは、どのような経論の文章を抛り所として立てられたのか。」と質問したところ、上人は、「善導(かんぎょうのしよ)の『観経疏』の付属文(ふせぐのちもん)である。」と答えられた。さらに重ねて僧侶は、「一宗としての教義を立てるほどの場合に、どうしてたった一つの文章だけを抛り所にできるだろうか。」と質問した。上人はほほ笑むだけで、何もいわれなかつた。

その僧侶が比叡山に帰つてのち、宝地房の証真法印にこの事の顛末を話して、「法然房はまったく返答できなかった。」と述べたところ、証真法印は、「法然房が何も言われなかつたのは、言うに足らないことだからである。かの上人は天台宗に熟達されており、そればかりか諸宗にわたつて広く教えを学習されていて、知恵の深さは通常の人を超えている。返答できなくて何も言われなかつたという間違つた考えは、決して起してはいけません。」とおつしやつた。証真法印は、いつも法然上人と親しくして仏教の教えについて語り合つていたから、上人の知恵がどれ程であるかわかつていたのでこのように言われたのである。とくに戒律の教えについては、上人から受けた人である。

証真法印がかつて昇進のための試験を受けられた時、惠光房の永弁法印を師匠としていたので、最も根源的な煩惱は（菩薩五十二位の最高位の）妙覚位の知恵によつて断ち、（見思惑・塵沙惑・無明惑の）三惑は同時に断つという教えを試験の際に立てなさいと教授した。ここ

ろが証真は、釈尊が生涯に説かれた經典を見たところ、三惑は異なる時に断ち、根源的な煩惱を断つのは（妙覚位のひとつ下の）等覚位の知恵によつてであり、この教えを立てたいと述べたところ、「きつとその意味であらう。」と永弁法印も認められたので、根源的な煩惱は等覚位の知恵で断つという教えを立てた。

澄憲法印が問題を選定し判定を下す題者であり、いろいろ調べられたのであるが、試問を受ける賢者の証真が、「五千余巻の一切経の経文を読んだところ、妙覚位の知恵で断ち切るという経文は見つからない。」という意見を立てたところ、それを見聞していた大衆は、声をそろえて博学ぶりに感心することしきりであつた。そのとき澄憲法印は、「試問を受ける賢者が、煩惱の絆を断ち切る剣のごとき見事な知恵で問題に解答した。題者である私が、さびた刀を抜くように、どうしてにぶい頭でなおよ層勉強にいそまないでおれようか。」という名句を述べられた。証真が年若い頃でさえこうであつたから、ましてや学問を積んでからはいうまでもない。一切経を



五回も読んだけれども、恵心院源信僧都が同じく五回読んだことに遠慮して、自分は三回読んだと世間には触れ知らせていたということである。昼にも夜にも地藏菩薩と話をし、またはつきりわからないことがあれば、根本中堂に参つて薬師仏に問いたしたり、日吉社の十禪師に詣でて問いたすと、必ず返事を授けられた。

いつも語られていたことだが、「わたくし証眞の師匠は、はるか昔の人では積尊、最近の人では天台大師智顛と妙樂大師湛然である。」と述べて、末流の師家たちを取りあげなかつた。往生伝を作成して、自分を往生人として書き入れられたという。当時の人びとは、地藏菩薩が姿を変えて現れた人だ、と言ひあつた。そうであるのに、証眞法印が法然上人のことを知恵が深い人だと言われたのは、本来の身体たる本地が勢至菩薩や地藏菩薩といわれる二人の知恵といひ、姿を変えて現れた垂迹の法然上人や証眞法印の博学ぶりといひ、お互いに理解しあつておられたからであろう。(だから証眞法印が法然上人をほめたのは、)ほかの人がほめるよりも味わい深く思われる。

## 第八段

法然上人が老齢となつてから、竹林房静嚴法印の弟子が訪ねて来て、昇進試験の勉強のために、天台宗の教えについて質問したところ、その奥深い所を詳しく教えられた。その人が後に語るには、「法然上人は、年老いた上、念仏一筋で時間がなく、聖教を読んではいけないとおっしゃつていたが、經典の文言や道理をよく理解されており、それは現在の勤勉家を越えておられる。まづたく並みの人ではない。」という。

その頃、山門延暦寺には、学問を積んだ碩学たちが林のうにたくさんいた。ところが、それら多くのすぐれた学匠たちを差し置いて、隠遁身分の法然上人に天台宗の要点を質問したのは、上人がいかに天台宗に通達しておられたかをよく示していると思われる。上人は、「私は聖教を読まない日はなかつた。木曾の冠者といわれた源義仲が、京へ攻め入つた時、その日一日だけ聖教を読まなかつた。」と語られた。後には、念仏の間の休みをも惜しんで、称名以外のことは何もしなかつた。後學者は、この足跡を学ばねばならないのではなからうか。(特別業務 大遠忌閑連 四十八巻伝)

現代布教班資料 別表1 結縁五重勸誠資料一覧(敬称略)

勸誠師/著者	書名	発行年月	発行元
隆円	『浄業信法訣』	文政6年	
	(『浄土傳燈輯要』所収)	大正9年(昭50再版)	山喜房仏書林
	(『浄土宗教学大系8』所収)	昭和7年(昭50再版)	大東出版社
法洲	『信法要訣』	文政6~7年頃	
	『信法要訣講説』(※)	明治45年	三師講説発刊所
	(『浄土宗選集 第10巻 法話篇』所収)	昭和59年12月	同朋舎出版
的門	『信法要訣辨釈』	明治初期	
	(『的門上人全集』所収)	大正9年	的門上人全集刊行会
	(『浄土宗教学大系8』所収)	昭和7年(昭50再版)	大東出版社
吉岡呵成	『點晴録』	明治39年	
	(『沛雨遺書』所収)	大正3年	三師講説発刊所
	(『浄土宗教学大系8』所収)	昭和7年(昭50再版)	大東出版社
加納隆俊	『傳燈講話』	昭和3年12月	宗粹社
岩井智海	『五重講説』上・下	昭和6年6月	浄土教報社
	(『浄土宗布教全書 第13・14巻』所収)	昭和6年(昭51改編)	浄土教報社
	(『浄土宗選集 第8・9巻 法話篇』所収)	昭和59年12月	同朋舎出版
知恩院教務部(編)	『化他五重観誠撮要』	昭和13年8月	総本山知恩院布教師会
高山龍善	『五重相伝講話』	昭和24年	西方院
	(華頂文庫シリーズ25『白道を歩む』所収)	昭和54年4月	総本山知恩院布教師会
	(『浄土宗選集 第10巻 法話篇』所収)	昭和59年12月	同朋舎出版
椎尾井匡	『傳燈餘光』	発行年不明(昭25実施)	不明(増上寺にて実施)
林 隆碩	『浄土への道』	昭和28年	知恩院教務部
	(華頂文庫シリーズ25『白道を歩む』所収)	昭和54年4月	総本山知恩院布教師会
	(『浄土宗選集 第10巻 法話篇』所収)	昭和59年12月	同朋舎出版
野島宣道	『彌依の大道』(昭和仏教全集 第4部3)	昭和43年	教育新潮社
	『五重法話』	昭和55年3月	東光寺(安藤)
	(『信仰の道』(『浄土宗選集 第10巻 法話篇』所収))	昭和59年12月	同朋舎出版
伊藤宏天	『口述(はなしことば)五重勸誠』	昭和45年11月	無量壽寺
井川定慶	『浄土宗の五重説法』(昭和仏教全集 第4部6)	昭和47年1月	教育新潮社
林 靈法	『五重講説』	昭和55年11月	一心寺
上田見宥	『結縁五重勸誠』(『結縁五重相伝』の内)	昭和58年10月	浄土宗(布教研究所)
藤吉慈海	『五重傳法講話』	昭和59年2月	山喜房仏書林
金子真補	『還愚の法悦』	昭和59年3月	東洋文化出版
水谷大成	『浄土宗五重講録』	昭和60年9月	法雲寺(講録刊行会)
藤堂俊章	『五重勸誠』	昭和61年1月	増上寺布教師会
寺田定信	『弥陀の掌(ほとけのて)』	昭和62年5月	創教出版
岩井信道	『五重法話』	昭和62年7月	安藤
服部法丸	『南無一聲(なむいちじょう)』	平成6年5月	創教出版
松島定宣	『五重相伝勸誠講録』	平成7年1月	直流会
	『願願の聲』	平成11年4月	蓮香寺
	『摸取の風光』	平成7年6月	知恩院・二記会
知恩院・二記会			
上田見宥(編)	『浄土宗現代法話大系 第10巻 結縁五重会』	平成8年10月	同朋舎出版
羽田恵三	『ひとすじの道』	平成9年1月	安藤
山崎秀侯	『故郷(ふるさと)への峠道』	平成10年5月	来迎寺
有本亮啓	『今現在説法』	平成11年4月	創教出版
辰谷隆誠	『歡喜の音(こえ)』	平成11年5月	大本山善導寺
八木季生	『勸誠録』	平成14年9月	江東組教化団
	『真の仏弟子を育てる』	平成16年6月	増上寺布教師会

(※) 内容は的門のものと同じである。

注意:表中の書物は、大半が現在絶版となっている。

現代布教班資料 別表2 現代布教班収集資料

分類	資料名	著者	著者2	発行元
ビデオ	わたくしたちの法然さま	総本山知恩院		総本山知恩院
ビデオ	白道の聖者 善導大師さま	総本山知恩院		総本山知恩院
ビデオ	念仏のふる里	総本山知恩院		総本山知恩院
ビデオ	若き日の勢観房源智 光よ、永遠に消えず	総本山知恩院/ 企画	寺本 哲榮/ 監修	総本山知恩院
ビデオ	法然上人のご生涯 (全4巻)	総本山知恩院/ 制作・監修		四季社
ビデオ	国宝「法然上人行状絵図」で綴る 法然上人のご生涯とその教え (全7巻)	総本山知恩院、 知恩院文化財保存局/監修		四季社
ビデオ	浄土宗の伝道ビデオ (地獄-発心への道)	水谷 幸正/監修		四季社
ビデオ	浄土宗の伝道ビデオ (お念仏-わたしたちの浄土宗とその教え)	水谷 幸正/監修		四季社
ビデオ	浄土宗の伝道ビデオ (彼岸-年中行事)	水谷 幸正/監修		四季社
ビデオ	浄土宗の伝道ビデオ (布施-発心への道)	水谷 幸正/監修		四季社
ビデオ	浄土宗五重相傳 (全4巻)	森田 孝隆、田原 照純/監修		四季社
ビデオ	仏陀との出会い 王舎城の物語	真宗大谷派 視聴覚伝道委員会		真宗大谷派
ビデオ	仏典童話 第一巻	真宗大谷派 視聴覚伝道委員会		真宗大谷派
ビデオ	仏典童話 第二巻	真宗大谷派 視聴覚伝道委員会		真宗大谷派
ビデオ	仏典童話 第三巻	真宗大谷派 視聴覚伝道委員会		真宗大谷派
ビデオ	仏典物語1 ウパーリの出家	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語2 マハーカッサパーお経のはじまり	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語3 大きな願い-仏説無量寿経-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語4 ルリ王子の怒り-シャカ族の最後-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語5 子どもたちよ-お釈迦さまとニーチおじさん-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語6 王舎城の悲劇-仏説無量寿経-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語7 アジャセとダイバグッター-続・王舎城の悲劇-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語8 パンタカ兄弟-ホウキの教え-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語9 極楽浄土-仏説阿彌陀経-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語10 お釈迦さま-誕生から涅槃まで-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語11 お釈迦さまの道-前編-誕生から成道まで-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	仏典物語12 お釈迦さまの道-後編-伝道、そして涅槃-	浄土真宗本願寺派		浄土真宗本願寺派
ビデオ	歎異抄-親鸞さまと唯円- (念仏物語第5巻)	浄土真宗本願寺派 本願寺		本願寺出版社
ビデオ	胡天狗ブックドクターあきひろの絵本を読もう	胡天狗		胡天狗
アニメDVD	世界の光 親鸞上人 第一部	親鸞上人映画製作委員会		チューリップ企画
アニメDVD	世界の光 親鸞上人 第二部	親鸞上人映画製作委員会		チューリップ企画

分類	資料名	著者	著者2	出版社
素材集	法話と寺報の素材集	青山社編集部		青山社
素材集	法話と寺報の素材集 第二集	青山社編集部		青山社
素材集	今昔さし絵素材集 CD-ROM 付き	青山社編集部		青山社
素材集	仏教・イラストカット集 寺由寺在	寿企画		寿企画
素材集CD	文麗菩薩	クリエイト、エムアンドアイ		斎々坊
素材集CD	素材天	クリエイト、エムアンドアイ		斎々坊
素材集	自在に使える仏教イラスト歳時記	北辰堂/編		北辰堂
素材集	普及版 仏教イラスト大図典	国書刊行会/編		国書刊行会
素材集	縮刷新装版 仏教さしえ集	国書刊行会/編		国書刊行会
素材集	ほとけの子ども カット集	浄土真宗本願寺派少年連盟/編		本願寺出版社
パネルシアター	だれにでもできるパネルシアター《本誌・キット・カセット》			浄土宗
紙芝居	おはなしいだすき 仏教説話紙芝居第1集 全3巻	日本仏教保育協会/編		すずき出版
紙芝居	かみしばい法然さま	平山 郁夫/絵	高橋 良和、山田 麻雄/文	浄土宗
紙芝居	紙芝居『二河白道』（善導大師1300年遠忌）	高津 ときを/作	飯田 順雅/画	浄土宗宗務庁社会局
絵伝記	法然上人絵伝 上・中・下 本の絵巻1・2・3	(続日) 小松 茂美/編		中央公論社
絵伝記	美術寶鑑法然上人絵詞略(全十巻)	田中 宥美		
絵伝記	新定法然上人絵傳	小川 龍彦/編	芹沢 銈介/絵	理想社
絵伝記	説き語り法然上人	西山浄土宗東部青年会		白馬社
絵伝記	通俗絵伝 法然上人	大屋 徳城		大八木興文堂
絵伝記	平山郁夫のお釈迦さまの生涯	西村 和子/責任編集		博雅堂出版
絵伝記	お釈迦さま物語	若林 隆光	若林 隆壽/編	中山書房仏書林
絵伝記	弘法大師 空海絵伝	浦ノ 紀一	松岡 弥三郎	ウラ/シュウホード
絵伝記	絵と文と御遺文でつづる 日蓮上人のご生涯	三木 随法/編集	妹尾 天然/伝記絵	日蓮宗新聞社
仏画	仏像画像集成 上・下(全二巻)	京都市立芸術大学芸術資料館/編		法蔵館
仏画	浄土教絵画	京都国立博物館/編集		京都国立博物館
仏画	佛傳図	真保 享/監修・文	金子 桂三/写真	毎日新聞社
仏画	釈尊繪傳	野生司 香雪、志村 武/画		財団法人 仏教伝道教会
挿絵	芹沢銈介全集 第2巻	芹沢 銈介		中央公論社
挿絵	芹沢銈介全集 第3巻	芹沢 銈介		中央公論社
漫画	マンガ法然上人伝	阿川 文正/監	佐川 哲郎/脚本	浄土宗
漫画	選択の人 法然上人	阿川 文正/監	横山 まさみち/漫画	浄土宗
漫画	阿弥陀仏の願い	ひろ さちや/原作	荘司 としお/漫画	すずき出版
漫画	お浄土のはなし	ひろ さちや/原作	望月 あきら/漫画	すずき出版

分類	資料名	著者	著者2	発行元
漫画	法然の生涯	ひろ さちや/ 原作	巴 里夫/漫 画	すずき出版
漫画	法然の念仏	ひろ さちや/ 原作	巴 里夫/漫 画	すずき出版
漫画	【マンガ】法然入門	大橋 俊雄/監 修	登 龍太/作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】親鸞入門	花山 勝友/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】道元入門	中野 東禪/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】日蓮入門	紀野 一義/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】密教入門	金岡 秀友/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】仏陀入門	松原 泰道/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】仏教入門	紀野 一義/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】正法眼蔵入門	秋月 龍現/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】法華経入門	紀野 一義/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】般若心経入門	公方 俊良/監 修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	【マンガ】歎異抄入門	ひろ さちや/ 監修	白取 春彦/ 作	サンマーク出版
漫画	伝教大師	延暦寺教化部	後岡 秀明	比叡山延暦寺
漫画	漫画 歎異抄	岡橋 徹栄	広中 建次	本願寺出版社
漫画	伝記まんが家庭読本 しんらん聖人 上	藤木 てるみ		探求社
漫画	伝記まんが家庭読本 しんらん聖人 下	藤木 てるみ		探求社
漫画	阿弥陀さまと共に 一妙好人物語-	早島 鏡正	中村 ひろし	青山書院
漫画	親鸞さま	早島 鏡正	中村 ひろし	青山書院
漫画	蓮如さま	早島 鏡正	中村 ひろし	青山書院
漫画	正信偈のおはなし 上巻 仏さまの教え	和田 真雄	森村 たつお	法蔵館
漫画	正信偈のおはなし 下巻 七人の高僧の教え	和田 真雄	森村 たつお	法蔵館
漫画	まんが 道元さまものがたり 上巻	久松 文雄/画	粟谷 良道/ 作	曹洞宗宗務庁
漫画	まんが 道元さまものがたり 下巻	久松 文雄/画	粟谷 良道/ 作	曹洞宗宗務庁
漫画	マンガで悟れる般若心経1	桑田 二郎		ロングセラーズ
漫画	マンガで悟れる般若心経2	桑田 二郎		ロングセラーズ
漫画	マンガで悟れる般若心経3	桑田 二郎		ロングセラーズ
漫画	絵で読む般若心経 色即是空篇	桑田 二郎		ブックマン社
漫画	絵で読む般若心経 盤舌波羅密多篇	桑田 二郎		ブックマン社
漫画	マンガ般若心経入門	蔡志 忠/作画		講談社
漫画	マンガ禅の思想	蔡志 忠/作画		講談社
絵本	わたくしたちの法然さま	総本山知恩院/ 監修	鳥海 尽三/ 文	総本山知恩院
絵本	白道の聖者 善導大師さま	総本山知恩院執 事長 蒲飼隆玄	鳥海 尽三/ 文	総本山知恩院
絵本	善導さま	竹中 信常/文	松溝 達文/ 画	浄土宗宗務庁・ 善導大師遠忌局
絵本	わたしたちのほうねんさま	浄土宗/監修	五雨 みな子 /文	大道社
絵本	法然さま	高橋 良和/文	飯田 順雅/ 絵	浄土宗
絵本	絵で読む阿弥陀経	腎 美恵/構成	佐川 美代太 郎/絵	西山浄土宗

分類	資料名	著者	著者2	発行元
絵本	絵で読む観無量寿経	臂 美恵/構成	佐川 美代太郎/絵	西山浄土宗
絵本	蜘蛛の糸	芥川 龍之介	臂 美恵/え	西山浄土宗
絵本	親鸞さま (本願寺絵本シリーズ①)	千葉 東隆	三栗 章夫	本願寺出版社
絵本	お釈迦さま (本願寺絵本シリーズ②)	瓜生津 隆真	中川 晟	本願寺出版社
絵本	蓮如さま (本願寺絵本シリーズ③)	千葉 東隆	緒方 倫子	本願寺出版社
絵本	お釈迦さまのものがたり I (本願寺絵本シリーズ④)	瓜生津 隆真	中川 晟	本願寺出版社
絵本	お釈迦さまのものがたり II (本願寺絵本シリーズ⑤)	瓜生津 隆真	中川 晟	本願寺出版社
絵本	ご和讃	大関 尚之		本願寺出版社
絵本	ごおん (CD付)	中川 正文/文	かまた のぶこ/え	本願寺出版社
絵本	おしゃかさま	森下 等	加藤 義明	東本願寺出版
絵本	しんらんさま	やまだ みどり	やまだ みどり	東本願寺出版
絵本	れんによさま	佐賀枝 弘子	水野 二郎	東本願寺出版
絵本	心のともしび	田辺 和子	黒川 文子	世界聖典刊行協会
絵本	おしゃかさま1 おたんじょうからたびだちまで	豊原 大成	小西 恒光	自照社出版
絵本	おしゃかさま2 さとりとはじめてのおしえをとく	豊原 大成	小西 恒光	自照社出版
絵本	おしゃかさま3 おしえのたび	豊原 大成	小西 恒光	自照社出版
絵本	おしゃかさま4 いろんなおでしたち	豊原 大成	小西 恒光	自照社出版
絵本	おしゃかさま5 さまざまなじけん	豊原 大成	小西 恒光	自照社出版
絵本	雲水日記 一絵で見る禅の生活一	佐藤 義英 / 画・文		禅文化研究所
絵本	寒山さん拾得さん	松永 輝子/作	駒井 啓子	禅文化研究所
絵本	「地獄」のはなし	高橋 良和/文	那須 恵斉/絵	探求社
絵本	親鸞さま	羽生 透	伊藤 典子	永田文昌堂
絵本	しんらんさま	五雨 みな子	加藤 直	大道社
絵本	ゆうちゃんとおババ	たいら きく江		文芸社
絵本	鬼子母神のはなし	中村 真明/文	貝原 浩/絵	風濤社
絵本	絵本 地獄 (縮刷版)	宮 次男/監修		風濤社
絵物語	仏典童話	渡辺 愛子/文	畠中 光享	東本願寺出版
絵物語	仏典童話 II	渡辺 愛子/文	畠中 光享	東本願寺出版
絵物語	七高僧ものがたり - 仏陀から親鸞へ -	大内 文雄	畠中 光享	東本願寺出版
絵物語	民話風法華経童話その2 序品第一 場所はインドの靈鷲山	松本 光華		大和書房
絵物語	民話風法華経童話その11 法師品第十 佛さまの使者	松本 光華		大和書房
絵物語	民話風法華経童話その17 如来寿量品第十六 佛の寿命は永遠に	松本 光華	荘司 としお / カット	大和書房
絵物語	民話風法華経童話その25 妙音菩薩品第二十四 みんなの地球を救うには	松本 光華	荘司 としお / カット	ダイワアート
絵物語	民話風法華経童話その26 観世音菩薩普門品第二十五 全ての衆生を救うため	松本 光華	荘司 としお / カット	大和書房
絵物語	民話風法華経童話その30 勅使上行日蓮大菩薩 (完) 日蓮さまは心の平和の大導師	松本 光華	荘司 としお / カット	大和書房
童謡	うたのおくりもの 仏教童話名曲100選 I 春・夏	飛鳥 寛栗/編		法蔵館
童謡	うたのおくりもの 仏教童話名曲101選 II 秋・冬	飛鳥 寛栗/編		法蔵館
一般	絵本の力	河合 隼雄、松井 直、柳田 邦男		岩波書店
一般	声の力	河合 隼雄、阪田 寛夫、谷川 俊太郎、池田 直樹		岩波書店
一般	言葉の力、生きる力	柳田 邦男		新潮社

分類	資料名	著者	著者2	発行元
一般	砂漠で見つけた一冊の絵本	柳田 邦男		岩波書店
一般	「人生の答」の出し方	柳田 邦男		新潮社
一般	いのちの授業	金森 俊朗		角川書店
一般	性の授業 死の授業	金森 俊朗、村井 淳志		教育史料出版会
一般	ほとけさまといっしょー仏教児童文学目録	法楽寺くすのき文庫／編		朱鷺書房
一般	ほんとうはこんな本が読みたかった！	神宮 輝夫／監修		原書房
一般	「死」を学ぶ子どもたち	種村 エイ子		教育史料出版会
一般	シリーズ いのちの授業1巻 いのちがはじまるとき	種村 エイ子／監修		ポプラ社
一般	シリーズ いのちの授業2巻 いのちがおわるとき	種村 エイ子／監修		ポプラ社
一般	シリーズ いのちの授業3巻 いのちのおもみ	種村 エイ子／監修		ポプラ社
一般	シリーズ いのちの授業4巻 いのちをささえる	種村 エイ子／監修		ポプラ社
一般	シリーズ いのちの授業5巻 いのちの図書館	種村 エイ子／監修		ポプラ社
絵本	いきてる	中山 千夏／ぶん	ささめや ゆき／え	自由国民社
絵本	いのちのまつり	草場 一壽／作	平安座 資尚／絵	サンマーク出版
絵本	おおきな木	シェル・シルヴァンスタイン／さく・え	ほんだ きんいちろう／やく	篠崎書林
絵本	おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん	長谷川 義史		BL 出版
絵本	かたあしだちようのエルフ	おのが きく／文・絵		ポプラ社
絵本	岸辺のふたり Father and Daughter	マイケル・デュドクデュ・ウィット	うちだ ややこ／訳	くもん出版
絵本	さよならエルマおばあさん	大塚 敦子／写真・文		小学館
絵本	「さよなら」を大切な人にいうんだ	マージィ・ヒーガード／作	清水 恵美子／訳	法蔵館
絵本	スーホの白い馬	大塚 勇三／再話	赤羽 末吉／画	福音館書店
絵本	だいじょうぶ だいじょうぶ	いとう ひろし／作・絵		講談社
絵本	どんなに恐ろしかったかいいたいんだ	マージィ・ヒーガード／作	清水 恵美子／訳	法蔵館
絵本	永い夜	ミシェル・レミュー／作	森 絵都／訳	講談社
絵本	にじいろのさかな	マーカス・フィスター／作	谷川 俊太郎／訳	講談社
絵本	のにつき 一野日記ー	近藤 薫美子		アリス館
絵本	葉っぱのフレディ ーいのちの旅ー	レオ・バスカーリア／作	みらい なな／訳	童話屋
絵本	100万回生きたねこ	佐野 洋子／作・絵		講談社
絵本	藤城清治 影絵聖書画集	藤城 清治		フォレストブックス
絵本	ぼくのおばあちゃん	なかむら みつる		びあ
絵本	ポケットのなかのプレゼント	柳沢 恵美／文	柳沢 徹／絵	ラ・テール出版局
絵本	ミッピーのおばあちゃん	ディック・ブルーナ	かどの えいこ／訳	講談社

分類	資料名	著者	著者2	発行元
絵本	別れたパパとママに会いたいんだ	マージィ・ヒーガード/作	清水 恵美子/訳	法蔵館
絵本	わすれられないおくりもの	スーザン・パレイ/さく・え	小川 仁央/やく	評論社
詩集	電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ	すずらの会/編		角川書店
詩集	千の風になって	原詩/作者不明	新井 満/日本語詩	理論社
歌	釋教歌詠全集(全6巻)	常盤 大定、福井 久蔵、尾上 八郎/編		東方出版
歌	道歌大観 仏教和歌の集大成	松尾 茂/編		三宝出版会
歌	道歌教訓和歌辞典	大村 山治郎/編		東京堂出版

(基礎研究 布教的関連プロジェクト 現代布教資料研究)





Amitabha, so it would be inconsistent if they were the same Buddha in this case. Furthermore, the Sanskrit has Amitaskandha for Amitaketu, and the latter Mahaprabhasa does not occur in the Sanskrit at all.

<sup>20</sup> The Sanskrit has two more buddhas, Dundubhisvaranirghosa and Prabhakara, omitted from the Chinese text.

<sup>21</sup> The Sanskrit includes Indraketudivjaraja.

<sup>22</sup> According to the *Bodhisattvabhumi* sutra, the corruption of the age occurs when there is a change for the worse, such as the outbreak of famine, epidemic, and warfare (Skt. *kalpa-kasaya*; Jpn. *ko-joku*). The corruption of views occurs when views become based on unskillful teachings and wrong thinking (Skt. *drsti-kasaya*; Jpn. *ken-joku*). The corruption of public morality occurs when violence and fighting, and lies and fraud are accepted (Skt. *klesha-kasaya*; Jpn. *bonno-joku*). The corruption of human character occurs when there is loss of respect for seniors, no fear of punishment in the afterlife, virtues and almsgiving are not practiced, and the precepts and regulations are not obeyed (Skt. *sattva-kasaya*; Jpn. *shujo-joku*). The corruption of shortening lifespans occurs when the lifespan of human beings becomes limited to a hundred years (Skt. *ayus-kasaya*; Jpn. *myo-joku*).

<sup>23</sup> *Asura* demons are one type of the demi-gods who upon hearing the Buddha's sermon vowed to protect the Buddhist doctrine. Originally they were gods, and in later times were considered demons. In the Buddhist scriptures they often fight voraciously with other deities, but nevertheless consistently lose.

<sup>15</sup> A *kalpa*, in Sanskrit, according to one explanation is 4,320,000,000 years long. Metaphorically, it is said to be longer than it would take to empty an iron castle seven kilometers square full of poppy seeds by removing one poppy seed every hundred years, or longer than it would take to wear away a rock seven kilometers square by a heavenly maiden flying down once every hundred years to brush the rock with her robes.

<sup>16</sup> This phrase is added in the Japanese to bridge these two paragraphs and explain their relation.

<sup>17</sup> Only the names of many of these buddhas are known with little further information available. The conversion of their names into Sanskrit is based on the Sanskrit text found in Nakamura Hajime, et. al., *Jōdo Sanbukyō* vol. 2 (Tokyo: Iwanami Shoten, 2004 ed.), pp. 127-131 and 155-158.

<sup>18</sup> A vast tongue is one of the thirty-two physical attributes of a buddha. In ancient India, touching the tongue to the nose was a demonstration of the truth of one's words. A billion world systems in the Chinese text literally reads "three thousand great thousands" meaning one thousand to the third power. These Buddhist world systems are comprised of the "three realms": the realm of desire, the realm of form, and the realm of non-form. The Japanese version adds that the virtue of Amitabha is praised for establishing the *nenbutsu* for Birth and furthermore the Buddhas offer protective salvation because their hearts were moved by the *nenbutsu* practitioners.

<sup>19</sup> There is a long standing debate on whether Amitabha and Amitayus are the same buddha or not. However, here Amitayus is praising

In any case, it is imagined to be a white waterfowl with a long bill and is variously translated into English as egret, swan, or goose. A *sharika* is a mythological bird translated into Chinese as a “bird of a hundred tongues.” It is also interpreted to be a myna bird because it is supposed to be able to speak human languages. A *kalavinka* is a mythological small bird that sings with a lovely voice. In the traditional Japanese court dance form *gagaku*, there is a specific dance called *karyobin* (Skt: *kalavin*) performed by a young boy wearing a vermilion red costume with brightly colored feathers. A *jivamjivaka* is a mythical species of hawk or eagle with two heads. The “jiva, jiva” cry of the bird means “life” in Sanskrit, and so it is also referred to as “the bird of longevity.”

<sup>14</sup> The five roots of goodness are faith, endeavor, mindfulness, mental concentration, and wisdom. These eliminate hindrances and provide the motivating power to attain enlightenment. The five powers are the next step attained after practicing the five roots of goodness, and prevent bad practices: the power of faith which obstructs false teachings, the power of endeavor which keeps the mind and body alert, the power of mindfulness which prevents false thoughts, the power of mental concentration which prevents distraction, and the power of wisdom which destroys delusion. The seven factors provide mental conditioning for attaining enlightenment: mindfulness, investigation of phenomena, endeavor, rapture, serenity, concentration, and equanimity. The Noble Eightfold Path is the method of realizing enlightenment: right view, right intention, right speech, right action, right livelihood, right effort, right mindfulness, and right concentration.

<sup>7</sup> The Chinese says “in the western direction from here.” The Japanese translation adds an interpretation and description of where “here” is based on the Sanskrit term, *Saha*, which refers to the mundane world with the connotation of suffering. The Sanskrit term is also translated into Chinese as the “land of adversity.” Ten trillion buddha-worlds is literally “10 x 10,000 x 100,000,000.”

<sup>8</sup> These gauze curtains, called *ramō*, are decorated with beads that the Sanskrit version describes as small bells. The Japanese version adds that the curtains are hanging in the sky. For more on the Japanese interpretation of the position of the curtains see also the *Taima mandara kasetsu* by Shōdo (1642-1701) in *Nihon bukkyō Zenshū* v. 63, pp. 43-44.

<sup>9</sup> Neither the Chinese nor Japanese versions specify whether the pond is singular or plural, but the Sanskrit has it as plural.

<sup>10</sup> The eight good qualities of water: pure, cool, sweet, soft, never drying up, calm, healing, and energizing.

<sup>11</sup> The pavilions do not occur in the Sanskrit text; they have been pluralized here to match the ponds.

<sup>12</sup> These are petals of the *mandarava* flower, the meaning of which is “that which gladdens the hearts of those who see them,” and the name of the flower is also translated as “pleasing” or “agreeable.” The petals are imagined to look like honeysuckle flowers, a common motif in Buddhism imagery. The six times are usually listed in the Buddhist scriptures as morning, noon, afternoon, evening, midnight, and dawn.

<sup>13</sup> *Hamsa* is the name of the first bird as it occurs in the Sanskrit text, but the name of the bird in the Chinese text is not an exact equivalent.

for those who had renounced secular life. Despite having inherited the throne, he renounced secular life to follow Shakyamuni. Although having great spiritual powers, he nevertheless practiced meditation assiduously. Vakkula was Shakyamuni's disciple foremost in health and longevity (*mubyō daiichi*). Despite having practiced meditation in solitude, he was nursed on his deathbed even by those disciples he had never personally guided or taught. Aniruddha was Shakyamuni's disciple foremost in divine sight (*tengen daiichi*). After renouncing secular life, he was scolded by the Buddha for falling asleep during sermons; he then repented and vowed never to fall asleep again. Although he became blind as a result, he gained the spiritual power to see into the future and peoples' hearts, thus becoming known for his divine sight. When he was sewing his robe, the Buddha helped him thread his needle since he could not see to do so himself.

<sup>5</sup> Manjushri's name has also been translated as "Wonderful and Auspicious" and "Wonderful Virtue," and "Prince of Dharma", referring to his accomplished understanding of Shakyamuni's enlightenment. He explains core teachings in many scriptures, especially in the body of the *Prajna paramita* sutras. Ajita may be an alternative name for Maitreya. Gandhahastin is also translated as "Musky Elephant," the etymology of which refers to the virility of a male elephant. The etymology of Nityodyukta's name is "one who works with diligence to save all sentient beings."

<sup>6</sup> Indra was originally an Indian deity adopted as a guardian of Buddhism, having the characteristics of a god of thunder or a warrior god.

the *Miscellany of the Precious Treasury Sutra* (*Za baozang jing*, scroll four), Gavampati and his three brothers realized arhathood after renouncing secular life to receive the teaching from Shakyamuni, expressed as follows: all phenomenon is impermanent, all that arises becomes extinguished, and with the end of arising and ceasing, comes the bliss of nirvana (*shogyō mujō, zeshō meppō, shōmetsu metchi, jakumetsu iraku*). He is said to have saved the Buddha's disciples from a flood with his spiritual powers. His name literally means King of Bulls. Pindola Bharadvaja was Shakyamuni's disciple foremost in the "lion's roar" (*shishiku daiichi*), which proclaims the Buddha's teaching. He excelled at expounding the doctrine, but was reproved by Shakyamuni for showing off his spiritual powers before a lay audience. Due to his embarrassment, he left the fold to propagate Buddhism on his own. From ancient times in Japan, it became part of popular belief that rubbing the appropriate part of his image would heal the injury or ailment. Kalodayin was a childhood friend of Shakyamuni, who was born on the same day as Shakyamuni as the son of a minister in the Kapilavastu kingdom governed by the Shaka clan. The first portion of his name, *kalo*, is an appellation meaning black, whether because he was naturally dark complexioned or because his skin turned dark after having saved Shakyamuni from snake venom. There was another monk with the same name found in the Buddhist scriptures, who was repeatedly reproved by the Shakyamuni. Initially, he was not able to fully embrace his teaching, but finally was able to become an arhat due to Shakyamuni's guidance. Mahakapphina was Shakyamuni's disciple foremost in teaching and guidance (*kyōkai daiichi*), especially

s death. Mahakatyayana was Shakyamuni's disciple foremost in discourse (*rongi daiichi*), for explaining Shakyamuni's lectures in an easily understandable manner. Mahakausthila was Shakyamuni's disciple foremost in debating the Buddha's teachings (*mondō daiichi*), often held in unison with Shariputra. According to one explanation, he was an uncle of Shariputra. He was born in a wealthy Brahman family, and was highly cultured. Revata was Shakyamuni's disciple foremost in meditation (*zazen daiichi*) and believed to be a younger brother of Shariputra. He was praised by Shakyamuni himself for his "tranquility in austerity" (*shōyoku chisoku*) obtained through his practices. Suddhipanthaka followed his brother in becoming a disciple of Shakyamuni, but due to his bad memory, he could not remember even one teaching. However, under the guidance of Shakyamuni, he was able to rid his heart of desires and finally achieved arhathood during a moment of fervent cleaning. Nanda was Shakyamuni's disciple foremost in disciplining the faculties (*chōbuku shokon*). He was a child of Suddhodana, King of the Shaka clan, and a stepbrother of Shakyamuni. After Shakyamuni renounced secular life, Nanda was expected to become head of the Shaka clan, but following Shakyamuni's lead he also renounced secular life. It is said that because he was a handsome young man, he was burdened by passion finally eliminated through Shakyamuni's guidance. Rahula was Shakyamuni's disciple foremost in esoteric practices (*mitsugyō daiichi*). He was the son of Shakyamuni, born while Shakyamuni was still a prince, and followed Shakyamuni's lead in renouncing secular life. He performed solitary practices in emulation of Shakyamuni. According to one explanation,



the ten major disciples of Shakyamuni, each of whom is “foremost” in something. Ananda, a paternal cousin of Shakyamuni, was in constant attendance of Shakyamuni and heard a great number of his lectures. Hence, he was known among Shakyamuni’s disciples as “foremost in hearing the sermons” (*tamon daiichi*). The merchant Anathapindika donated to Shakyamuni a park of trees, and the monastery built there was called Jetavana Monastery. The merchant’s name means “he who generously gives alms” or “he who feeds the solitary,” for that reason he is called Anathapindika. According to tradition, the merchant Anathapindika bought the land of the park owned by Prince Jeta to donate it to the monks and Prince Jeta donated the trees, for that reason it is also called the Jeta-Anathapindika Grove. Shravasti was the capital of the kingdom of Koshala in ancient India, and was one of the regions in which Shakyamuni was active.

<sup>3</sup> The term “arhat” derives from “worthy of respect and offerings” and can also be translated simply as “worthy.” It refers to a practitioner who has attained the highest enlightenment.

<sup>4</sup> Shariputra was Shakyamuni’s disciple foremost in wisdom (*chie daiichi*). He was the leader of Shakyamuni’s disciples, although he died before Shakyamuni. Along with Shariputra, Mahamaudgalyayana was one of Shakyamuni’s leading disciples and was foremost in supernatural power (*jinzū daiichi*). Like Shariputra, he died before Shakyamuni. Mahakashyapa was Shakyamuni’s disciple known as foremost in ascetic practices (*zuda daiichi*) for eliminating desire. He had a large number of followers before becoming a disciple of Shakyamuni, and led the monastic community after Shakyamuni’

(Endnotes)

<sup>1</sup> This was a translation project sponsored by the government by order of an imperial edict. Kumarajiva (350-409) was a monk born in the Kucha region of Western China during the period of the Northern and Southern Dynasties. When the Kucha kingdom was taken over by the former Qin, he was compelled to live as a prisoner, but when that kingdom was then taken over in turn by the Later Qin, he was brought to Xian, the capital of China. After that he became a major translator of Buddhist sutras—translating the *Heart Sutra*, *Lotus Sutra*, and *Vimalakirti Sutra*, among others—and trained a large number of disciples. His achievements are highly regarded in the history of Buddhism. The Yao-Qin dynasty refers to the Later Qin kingdom (384-417), one of the kingdoms during the Sixteen Kingdoms period of ancient China. It is referred to as Yao-Qin because the kingdom was founded by Yao Chang. The term “Tripitaka” denotes those monks who are fully versed in the teachings of Buddhism. The Tripitaka (“three baskets”) refer to 1) the Sutras (the discourses of Shakyamuni), 2) the Vinaya (rules of conduct for the Buddhist clergy), and 3) the Abhidharma (treatises explaining the teachings of Shakyamuni)—hence, meaning someone who has mastered the entirety of the Buddhist teaching.

<sup>2</sup> The Japanese version, on which this English translation is based, is an interpretation of the Chinese sutra. Interpolations added in the Japanese version and not found in the Chinese will be signified in this translation by parentheses. Buddhist sutras often have as their basic format Ananda recounting a sermon by Shakyamuni. Ananda is one of

of public morality, the corruption of human character, and the corruption of shortening lifespans—you have attained supreme perfect enlightenment, and furthermore, you have explained this teaching (of Ultimate Bliss and Birth there through the *nenbutsu*), difficult to believe for being beyond the common understanding of this world, for the sake of sentient beings.<sup>22</sup>

“Shariputra, you should remember this. While being in this present world full of the five corruptions, I have accomplished this most difficult achievement and attained supreme perfect enlightenment. In addition, for the sake of the people of this world, I have explained this teaching (of Ultimate Bliss and Birth there through the *nenbutsu*), difficult to believe for being beyond the common understanding of this world. For that reason, all of the Buddhas praise me for this ‘most difficult achievement.’”

When Shakyamuni Buddha finished explaining this sutra, Shariputra and all the monks, the realms of celestial beings, people, and the *asura* demons,<sup>23</sup> having heard the words of the Buddha, rejoiced in these words, accepted them, and believed in them. They then paid homage to Shakyamuni and departed.

salvation.’

“Shariputra, why do you think this discourse was given the appellation *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation*? Shariputra, if good men and good women hear the name of this discourse and the name of Amitabha Buddha praised by all the Buddhas, these good men and good women will be protected by all the buddhas and all will (after Birth) attain supreme perfect enlightenment without veering from the Buddhist path. For that reason Shariputra, all of you take these words of mine and of all the Buddhas, accept them and believe in them.

“Shariputra, whosoever (contemplating Amitabha’s land of Ultimate Bliss) aspires to Birth in Amitabha’s land of Ultimate Bliss in the past, present, or future, they will all (after Birth) attain supreme perfect enlightenment without veering from the Buddhist path, having attained Birth in the past, present, or future. That is the reason, Shariputra, those among good men and good women who sincerely believe, if they vow to attain Birth in the land of Ultimate Bliss (and recite the *nenbutsu*) they should assuredly attain that Birth.

“Shariputra, in the same way I praise the inconceivable virtue of all the buddhas for their protective salvation (given because their hearts were moved by the *nenbutsu* practitioners), all the buddhas also praise my inconceivable virtues: ‘Shakyamuni Buddha, you have accomplished this most difficult and unprecedented achievement. While being in this present world full of the five corruptions—the corruption of the age, the corruption of views, the corruption

north such as Arciskandha Buddha, Vaishvanaranirghosa Buddha, Duspradharsa Buddha, Adityasambhava Buddha, and Jaliniprabha Buddha as numerous as the sands of the Ganges River.<sup>20</sup> Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation.*’

“Additionally, there are buddhas (with buddha-worlds) in the lower regions such as Simha Buddha, Yashas Buddha, Yashahprabhasa Buddha, Dharma Buddha, Dharmadhvaja Buddha, and Dharmadhara as numerous as the sands of the Ganges River. Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation.*’

“Also, there are buddhas with buddha-worlds in the upper regions such as Brahmaghosa Buddha, Naksatraraja Buddha, Gandhottama Buddha, Gandhaprabhasa Buddha, Maharciskandha Buddha, Ratnakusuma Sampuspitagatra Buddha, Salendraraja Buddha, Ratnotpalashri Buddha, Sarvarthadarsha Buddha, and Sumerukalpa Buddha as numerous as the sands of the Ganges River.<sup>21</sup> Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective*

buddhas (with buddha-worlds) to the east such as Akshobhya Buddha, Merudhvaja Buddha, Mahameru Buddha, Meruprabhasa Buddha, and Manjudhvaja Buddha as numerous as the sands of the Ganges River.<sup>17</sup> Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation.*’<sup>18</sup>

“In addition, there are buddhas (with buddha-worlds) to the south such as Candra Suryapradipa Buddha, Yashaprabha Buddha, Maharciskandha Buddha, Merupradipa Buddha, and Anantavirya Buddha as numerous as the sands of the Ganges River. Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation.*’

“Furthermore, there are buddhas (with buddha-worlds) to the west such as Amitayus Buddha, Amitaketu Buddha, Amitadhvaja Buddha, Mahaprabha Buddha, Mahaprabhasa Buddha, Ratnaketu Buddha, and Suddharasmiprabha Buddha as numerous as the sands of the Ganges River.<sup>19</sup> Each from their own lands, have extended their vast tongues encompassing a billion world systems, pronouncing these words of truth: ‘All of you should believe in *The Discourse that tells of all the buddhas who praise the inconceivable virtue of Amitabha and who offer protective salvation.*’

“Moreover, there are buddhas (with buddha-worlds) to the

Ultimate Bliss will never veer from the Buddhist path on their way to enlightenment. The vast majority have the virtue of becoming a buddha in their very next life. Their numbers are so vast as to be unknowable by calculation, and can only be explained in terms of counting for immeasurable incalculable aeons.

Shariputra, those sentient beings who now hear of this Pure Land should aspire to achieve Birth in this land of Ultimate Bliss because there they can join these virtuous beings. However, Shariputra, those that aspire to be born in this land cannot rely merely on the roots of goodness acquired through spiritual practices or the effects of virtuous merit. (Then what should they do to attain this Birth?)<sup>16</sup>

“Shariputra, should good men and good women hear of the teaching of Amitabha and assiduously recite the *nenbutsu* invocation, “Namu Amida Butsu” (Homage to Amitabha Buddha) for one day, two days, three, four, five, six, or seven days, or more, then at the end of their lives, Amitabha Buddha will appear before their very eyes with his entourage of bodhisattvas and saintly disciples from the land of Ultimate Bliss. For that reason, in their last moment they will be without anxiety and Amitabha will bring them forthwith to be born in Amitabha Buddha’s land of Ultimate Bliss.

“Shariputra, I clearly see the benefit of this (that Amitabha Buddha’s salvation is without fail) and therefore explain to you that sentient beings hearing this teaching should aspire to be born in Amitabha’s Pure Land (to assuredly attain Birth there).

“Shariputra, as I have now praised the sublime virtue of Amitabha, (who established the *nenbutsu* for Birth), so are there

not in fact exist? Amitabha Buddha manifested these birds in the hope that they would transmit these teachings with their songs.

“Shariputra, in the land of Ultimate Bliss, a pleasant breeze wafts, swaying the rows of trees colored with various jewels and waving the gauze curtains with little bells, stirring an exquisite melody. This is just as though hundreds of thousands of musical instruments were being played in unison. For all who hear this melody, their devotion to the Buddha, the Dharma, and the Sangha is spontaneously deepened. Shariputra, in this way the land of Ultimate Bliss is an ideal environment so that whatever one hears will bring about awakening.

“Shariputra, why do you suppose this Buddha is called Amitabha? Shariputra, this Buddha emits immeasurable light, shedding light upon all the worlds of the ten directions without obstruction. For that reason this Buddha is called Amitabha, the Buddha of Immeasurable Light. Also, Shariputra, the lifespan of this Buddha and those in the land of Ultimate Bliss is immeasurably long of incalculable aeons.<sup>15</sup> For that reason this Buddha is called Amitayus, the Buddha of Immeasurable Life. Shariputra, from the day Amitabha achieved enlightenment until the present day, an eternity of ten aeons has already passed. In addition, Shariputra, this Buddha has an immeasurable number of disciples, practitioners called arhats (who have eliminated their passions), whose numbers are incalculable. So are the numbers of the bodhisattvas also incalculable. Shariputra, in this way the land of Ultimate Bliss is an ideal environment for sentient beings to achieve enlightenment.

“Moreover, Shariputra, all sentient beings born in the land of



about awakening.

“Also, Shariputra, in Amitabha Buddha’s land of Ultimate Bliss, there is always heavenly music playing. Moreover, the ground is made of gold, and flower petals float down from the skies six times every day.<sup>12</sup> Early every morning, the people there gather the petals into their flower baskets and travel to ten trillion buddha-worlds to offer them in worship to the buddhas. Having become mealtime during this activity, they return in an instant to Ultimate Bliss, take their meal and then practice mindfulness by walking. Shariputra, the land of Ultimate Bliss is an ideal environment to follow the Buddha path and awaken to enlightenment.

“Furthermore, Shariputra, in the land of Ultimate Bliss there are various birds of brilliant coloring, such as white egrets, peacocks, parrots, *sharikas*, *kalavinkas*, and *jivamjivakas*.<sup>13</sup> The birds sing six times a day in exquisite voices. Their very singing expresses Amitabha’s teachings, such as the Five Roots of Goodness, the Five Powers, the Seven Factors of Enlightenment, and the Noble Eightfold Path.<sup>14</sup> When the people of the land of Ultimate Bliss hear the bird’s voices, all of their thoughts are dedicated to the Buddha, the Dharma, and the Sangha.

“Shariputra, do not assume that these were born as birds as a result of misdeeds in former lives. This is because in the land of Ultimate Bliss, the three unfortunate realms of hell, hungry ghosts, and animals do not exist. Shariputra, you will not even hear the names of these three realms in the land of Ultimate Bliss. How could it be said that one could fall into one of these unfortunate realms when they do

Then the Buddha Shakyamuni explained to the elder Shariputra: “To the far west of this world (of delusion), beyond as many as ten trillion buddha-worlds, there’s another world called Ultimate Bliss with a buddha whose name is Amitabha, who is there even now teaching the Dharma.<sup>7</sup> Shariputra, do you know why that buddha-world is called Ultimate Bliss? It is because the people who live there never experience suffering; they are mantled in multitude forms of happiness. For that reason it is called Ultimate Bliss.

“Also, Shariputra, the world is adorned with seven railings, with seven rows of gauze curtains with little bells, and surrounded by seven rows of trees.<sup>8</sup> All are set with four kinds of jewels, which adorn the world throughout. For that reason this world is called Ultimate Bliss.

“Again, Shariputra, in that world there are lotus ponds whose shores are decorated with seven kinds of jewels.<sup>9</sup> The ponds brim with waters of eight good qualities and the floor of the ponds are lined with sand of gold.<sup>10</sup> The ponds are surrounded by steps on their four sides made of gold, silver, lapis lazuli, and crystal. Above are pavilions lavishly adorned with the seven jewels of gold, silver, lapis lazuli, crystal, coral, red pearls, and agate.<sup>11</sup> There are lotuses blooming in the ponds, and their flowers are as large as the wheel of a cart. The blue flowers emit a blue light; the yellow flowers emit a yellow light; the red flowers emit a red light; and the white flowers emit a white light. Each of the lotus flowers glows, weaving an harmonic scene while emitting a subtle fragrance. Shariputra, this land of Ultimate Bliss is an ideal environment so that whatever one lays eyes upon will bring

# The Amida Sutra

(Skt. Smaller Sukhavativyuha Sutra)

(Ch. Amituo jing)

(Jp. Amida kyo)

*Based on the contemporary Japanese translation of the Jodo Shu Research Institute, published in Kyōka Kenkyū (Journal of Jōdo Shu Edification Studies), No. 14, 2003*

Translation by Imperial Edict of the Qin

Kumarajiva, Yao-Qin dynasty Dharma Priest of the *Tripitaka*<sup>1</sup>

I (Ananda) heard the following from the Buddha, Shakyamuni. At one time Shakyamuni was at the Jetavana garden in Shravasti.<sup>2</sup> As many as twelve hundred and fifty people assembled, and they were especially eminent monks. They were all illustrious practitioners known as arhats who had eliminated their delusions and were of great renown.<sup>3</sup> Among them, the elders Shariputra, Mahamaudgalyayana, Mahakashyapa, Mahakatyayana, Mahakausthila, Revata, Suddhipanthaka, Nanda, Ananda, Rahula, Gavampati, Pindola Bharadvaja, Kalodayin, Mahakapphina, Vakkula, and Aniruddha, were outstanding disciples.<sup>4</sup> There was also a vast number of bodhisattvas; the most excellent among them were the Dharma Prince Manjushri, the Bodhisattva Ajita, the Bodhisattva Gandhahastin, and the Bodhisattva Nityodyukta.<sup>5</sup> In addition, innumerable celestial deities such as Indra had gathered.<sup>6</sup>

# 研究ノート

# 浄土宗総合研究所所員・嘱託名簿

(平成17年7月1日現在)

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-5472-6571 (代表)

FAX 03-3438-4033

〈分室〉 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学内

電話 075-495-8143

FAX 075-495-8193

ホームページアドレス <http://www.jsri.jp/>

所長	石上善應
主任研究員(副所長)	福西賢兆
専任研究員(分室主事)	齋藤舜健
専任研究員	今岡達雄
	大蔵健司
	西城宗隆
	佐藤晴輝
	袖山榮輝
	武田道生
	戸松義晴
研究員	石川琢道
	伊藤茂樹
	上田千年
	後藤眞法
	斉藤隆尚
	坂上雅翁
	坂上典翁
	柴田泰山
	善裕昭
	曾田俊弘
	曾根宣雄
	林田康順
	和田典善

---

研究助手

石田一裕  
名和清隆  
宮入良光

---

常勤嘱託研究員

郡嶋昭示  
島 恭裕  
吉田淳雄  
米澤実江子

Jonathan Watts (ジョナサン・ワッツ)

---

嘱託研究員

井野周隆  
小澤憲雄  
熊井康雄  
佐藤良文  
清水秀浩  
竹内真道  
千古利恵子  
田中勝道  
中野隆英  
廣本榮康  
細田芳光  
真柄和人  
正村瑛明  
水谷浩志  
村田洋一  
山本晴雄  
鷲見定信

Karen Mack (カレン・マック)

客員教授

---

伊	藤	唯	真
梶	村		昇
田	丸	徳	善
長谷川		匡	俊
八	木	季	生

# 総合研究所運営委員会委員名簿

(平成17年7月1日現在)

---

## 委員（役職）

水谷幸正	（宗務総長）
岡本宣文	（教学局長）
曾和義雄	（財務局長）
松本眞岳	（社会国際局長）
入西勝彦	（文化局長）
石上善應	（総合研究所長）
福西賢兆	（総合研究所主任研究員）

---

## 委員（総長委嘱）

香川孝雄
梶村昇
中井眞孝
花園宗善
藤本浄彦
丸山博正
八木季生
山下法文



## 平成十六年度 活動報告

- 四月一日  
 ・総合研究所研修生入所式（宗務庁 東京）
- 四月五日  
 ・第一回所内連絡会（宗務庁 東京）  
 ・所員辞令伝達式於（宗務庁 東京）  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）  
 ・国際対応研究会（総合研究所）
- 四月十二日  
 ・第二回所内連絡会（総合研究所）
- 四月十四日  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）
- 四月十五日  
 ・海外開教研究会（総合研究所）
- 四月十六日  
 ・公開講座 『伝統聲明をきく』（大本山増上寺）
- 四月十九日  
 ・第三回所内連絡会（総合研究所）
- 四月二十日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）  
 ・国際対応研究会（宗務庁 東京）
- 四月二十一日  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）
- 四月二十三日  
 ・実践僧侶学（大正大学）
- 四月二十六日  
 ・浄土大辞典研究打合せ会（総合研究所）  
 ・現代布教研究会（総合研究所）
- 四月二十七日  
 ・第四回所内連絡会（総合研究所）
- 五月十日  
 ・専任研究員研究会（宗務庁 東京）  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）  
 ・国際対応研究会（宗務庁 東京）  
 ・葬祭仏教研究会（総合研究所）
- 五月十六日  
 ・現代布教研究会（総合研究所）
- 五月十七日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・国内開教研究会（総合研究所）  
 ・生命倫理研究会（京都分室）  
 ・第五回所内連絡会（総合研究所）  
 ・海外開教研究会（宗務庁 東京）
- 五月十二日  
 ・実践僧侶学（大正大学）
- 五月十三日  
 ・二十五霊場研究会（京都分室）
- 五月十七日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・浄土三部経研究会（総合研究所）  
 ・国際対応研究会（総合研究所）  
 ・第六回所内連絡会（総合研究所）  
 ・専任研究員研究会（総合研究所）
- 五月十九日  
 ・浄土教比較論研究会（総合研究所）
- 五月二十一日  
 ・法事讃研究研究会（総合研究所）
- 五月二十四日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・第七回所内連絡会
- 五月二十九日  
 ・実践僧侶学（大正大学）
- 五月三十一日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・第八回所内連絡会（総合研究所）
- 六月四日  
 ・現代布教研究会（総合研究所）
- 六月七日  
 ・浄土大辞典研究会（宗務庁 東京）  
 ・葬祭仏教研究会（総合研究所）
- 第九回所内連絡会（総合研究所）

- 六月八日
  - ・国内開教研究会（総合研究所）
- 六月九日
  - ・実践僧侶学（大正大学）
- 六月十日
  - ・開教研究会（総合研究所）
  - ・法事讃研究（総本山知恩院）
- 六月十四日
  - ・浄土宗大辞典研究会（宗務庁 東京）
  - ・浄土三部経研究会（総合研究所）
  - ・第十回所内連絡会（総合研究所）
  - ・各宗機関交流会打合せ（総合研究所）
  - ・専任研究員研究会（総合研究所）
  - ・葬祭仏教研究会（総合研究所）
- 六月十六日
  - ・国際対応研究会（総合研究所）
- 六月十八日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 六月二十一日
  - ・第二十四回各宗教化関係研究機関交流会（大本山 増上寺）
- 六月二十二日
  - ・国内開教研究会（総合研究所）
- 六月二十四日
  - ・国内開教研究会（総合研究所）
  - ・生命倫理研究会（総合研究所）

- 六月二十五日
  - ・現代布教研究会
- 六月二十八日
  - ・浄土宗大辞典研究会（宗務庁 東京）
  - ・浄土三部経研究会（総合研究所）
  - ・第十一回所内連絡会（総合研究所）
  - ・国際対応研究会（総合研究所）
  - ・葬祭仏教研究会（総合研究所）
- 六月二十九日
  - ・浄土三部経研究会（総合研究所）
- 七月一日
  - ・浄土宗大辞典編纂委員会（宗務庁 東京）
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 七月五日
  - ・浄土宗大辞典研究会（宗務庁 東京）
  - ・葬祭仏教研究会（宗務庁 東京）
  - ・第十二回所内連絡会（総合研究所）
  - ・各研究会進行状況報告会（宗務庁 東京）
  - ・仏教福祉研究会（宗務庁 東京）
- 七月九日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 七月十二日
  - ・浄土三部経研究会（総合研究所）
  - ・葬祭仏教研究会（宗務庁 東京）
  - ・国際対応研究会（総合研究所）
- 七月二十一日
  - ・葬祭仏教研究会（宗務庁 東京）

- 七月二十三日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 七月二十六日
  - ・葬祭仏教研究会（宗務庁 東京）
  - ・国際対応研究会（総合研究所）
  - ・生命倫理研究会（宗務庁 東京）
  - ・第十三回所内連絡会（総合研究所）
  - ・専任研究員研究会（総合研究所）
- 七月二十七日
  - ・葬祭仏教研究会（宗務庁 東京）
- 七月三十日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
  - ・浄土宗大辞典研究会（宗務庁 東京）
- 八月二日
  - ・第十四回所内連絡会（総合研究所）
- 八月四日
  - ・国際対応研究会（総合研究所）
- 八月六日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 八月九日
  - ・第十五回所内連絡会（総合研究所）
- 八月二十日
  - ・現代布教研究会（総合研究所）
- 八月二十三日
  - ・第十六回所内連絡会（総合研究所）
  - ・専任研究員研究会（宗務庁 東京）

八月二十三、二十四、二十五日

・国内開教沖繩調査(沖繩)

八月三十日

・第十七回所内連絡会(総合研究所)

・生命倫理研究会(総合研究所)

九月二日

・浄土教比較論勉強会(宗務庁 東京)

九月三日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

九月六日

・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)

・第十八回所内連絡会(総合研究所)

九月八日、九日

・総合学術大会(仏教大学)

九月十日

・現代布教研究会(総合研究所)

九月十三日

・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)

・第十九回所内連絡会(総合研究所)

・二十五霊場研究会(総合研究所)

・仏教福祉研究会(総合研究所)

九月十四日

・国際対応研究会(総合研究所)

九月十五日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

九月十七日

・現代布教研究会(総合研究所)

九月二十四日

・現代布教研究会(総合研究所)

九月二十七日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)

・国際対応研究会(総合研究所)

・第二十回所内連絡会(総合研究所)

・専任研究員研究会(宗務庁 東京)

九月二十八日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

・公開講座(大本山 増上寺)

『パネルシアターによる布教』

十月四日

・生命倫理研究会(宗務庁 東京)

・日常勤行式の現代語化研究

・浄土宗大辞典東西会議(宗務庁 東京)

・第二十一回所内連絡会(総合研究所)

十月六日

・運営委員会(宗務庁 東京)

十月八日

・現代布教研究会(総合研究所)

・国際対応研究会(総合研究所)

十月十五日

・現代布教研究会(総合研究所)

十月二十二日

・現代布教研究会(総合研究所)

十月十八日

・第二十二回所内連絡会(総合研究所)

十月二十二日

・現代布教研究会(総合研究所)

十月二十五日

・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)

・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)

・海外開教研究会(宗務庁 東京)

・第二十三回所内連絡会(総合研究所)

十月二十五日

・専任研究員研究会(総合研究所)

十月二十七日

・国際対応研究会(総合研究所)

十月二十八日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

十月二十九日

・浄土三部経研究会(総合研究所)

・現代布教研究会(総合研究所)

十一月一日

・浄土宗大辞典研究会(総合研究所)

・葬祭仏教研究会(総合研究所)

・第二十四回所内連絡会(総合研究所)

・生命倫理研究会(総合研究所)

・仏教福祉研究会(総合研究所)

十一月八日

・第二十五回所内連絡会(総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会(総合研究所)

- ・国内開教研究会 (総合研究所)
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- 十一月十五日
- ・第二十六回所内連絡会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会 (宗務庁 東京)
- 十一月十九日
- ・浄土教比較論研究会 (宗務庁 東京)
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 十一月二十二日
- ・仏教福祉シンポジウム (大本山 増上寺)
- 十一月二十四日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 十一月二十九日
- ・第二十八回所内連絡会 (総合研究所)
- ・専任研究員研究会 (総合研究所)
- ・国内開教研究会 (総合研究所)
- 十二月三日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 十二月四日
- ・善本叢書研究会 (知恩院)
- 十二月五日
- ・善本叢書研究会 (知恩院)
- 十二月六日
- ・善本叢書研究会 (知恩院)
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 研究議題 東西執筆者説明会打合せ

- ・国内開教研究会 (宗務庁 東京)
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・第二十九回所内連絡会 (総合研究所)
- ・仏教福祉アンケート集計作業 (宗務庁 東京)
- 十二月八日
- ・生命倫理研究会 (宗務庁 東京)
- 十二月十日
- ・浄土宗大辞典編集西部打合せ (宗務庁 京都)
- 十二月十日
- ・浄土宗大辞典編集東部打合せ (宗務庁 東京)
- 十二月十三日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・第三十回所内連絡会 (総合研究所)
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 十二月十四日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- 十二月十七日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 十二月十九日
- ・国内開教沖繩調査 (沖繩)
- 十二月二十日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・生命倫理研究会 (宗務庁 東京)
- ・第三十一回所内連絡会 (総合研究所)
- ・二十五霊場研究会 (分室)
- 十二月二十一日

- ・二十五霊場調査 (東部) (千葉教区)
- 十二月二十一日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- 十二月二十二日
- ・分室会議 (分室)
- ・二十五霊場研究会 (分室)
- 一月七日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 一月十日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 一月十一日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 一月十二日
- ・浄土宗大辞典作業 (宗務庁 東京)
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・法事讃撮影作業 (増上寺)
- 一月十三日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 一月十四日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 一月十七日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典作業 (宗務庁 東京)
- ・第三十二回所内連絡会 (総合研究所)
- 一月十八日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土教比較論研究会 (宗務庁 東京)

- 一月二十日
  - ・生命倫理研究会(総合研究所)
  - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)
- 一月二十四日
  - ・浄土三部経研究会(総合研究所)
  - ・国際対応研究会(総合研究所)
  - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)
  - ・第三十三回所内連絡会(総合研究所)
  - ・専任研究員研究会(宗務庁 東京)
- 一月二十五日
  - ・浄土三部経研究会(総合研究所)
  - ・二十五霊場調査(栃木教区)
- 一月二十八日
  - ・現代布教研究会(総合研究所)
- 一月三十一日
  - ・浄土三部経研究会(総合研究所)
  - ・浄土宗大辞典作業(宗務庁 東京)
  - ・第三十四回所内連絡会(総合研究所)
  - ・他教団交流研究会(宗務庁 東京)
- 二月四日
  - ・現代布教研究会(総合研究所)
- 二月七日
  - ・浄土宗大辞典作業(総合研究所)
  - ・国際対応研究会(総合研究所)
  - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)
  - ・第三十五回所内連絡会(総合研究所)
- 二月八日
  - ・葬祭仏教研究会(総合研究所)
- 二月十四日
  - ・浄土宗大辞典作業(総合研究所)
  - ・生命倫理研究会(総合研究所)
  - ・第三十六回所内連絡会(総合研究所)
- 二月十七日
  - ・国内開教(統計数理センター)
- 二月十八日
  - ・国内開教(総合研究所)
- 二月二十一日
  - ・国際対応研究会(総合研究所)
  - ・浄土宗大辞典作業(淑徳大学サテライトキャンパス)
- 二月二十五日
  - ・第三十七回所内連絡会(総合研究所)
  - ・国内開教(総合研究所)
- 二月二十八日
  - ・現代布教研究会(総合研究所)
  - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)
  - ・浄土宗大辞典作業(総合研究所)
  - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 東京)
- 三月二日
  - ・第三十八回所内連絡会(総合研究所)
- 三月四日
  - ・浄土宗大辞典編集打合せ(華頂短大)
  - ・現代布教研究会(総合研究所)
- 三月六日～九日
  - ・国内開教沖繩調査
- 三月七日
  - ・浄土教比較論研究会(宗務庁 東京)
  - ・仏教福祉研究会(宗務庁 東京)
  - ・第三十九回所内連絡会(総合研究所)
  - ・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)
  - ・三月十日～十一日
    - ・葬祭仏教研究会(宗務庁 京都)
  - 三月十日
    - ・海外開教研究会(総合研究所)
  - 三月十一日
    - ・現代布教研究会(総合研究所)
  - 三月十四日
    - ・三部経研究会(総合研究所)
    - ・専任研究員(宗務庁 東京)
    - ・第四十回所内連絡会(総合研究所)
  - 三月十五日
    - ・浄土宗大辞典研究会(総合研究所)
  - 三月十六日
    - ・運営委員会(宗務庁 東京)
  - 三月十七日
    - ・国際対応研究会(総合研究所)
  - 三月二十八日
    - ・浄土宗大辞典研究会(宗務庁 東京)
    - ・三部経研究会(総合研究所)
    - ・生命倫理研究会(総合研究所)
  - 第三十一回所内連絡会(総合研究所)
- 三月二十九日
  - ・三部経研究会(総合研究所)

平成 16 年研究課題一覧

【総合研究】	総合研究プロジェクト	1	開教
		2	仏教福祉
		3	生命倫理
		4	葬祭仏教
		5	国際対応
【基礎研究】	教学的関連プロジェクト	6	浄土教比較論
	法式的関連プロジェクト	7	法事讃研究
	布教的関連プロジェクト	8	現代布教資料研究
【経常的運営】	総合広報	9	編集 /HP 管理運営
	他研究機関連絡提携	10	他研究施設教団交流
【特別業務】	特別	11	浄土宗善本叢書
	大遠忌関連	12	浄土宗典籍・版木の研究
		13	法然上人二十五霊場研究
		14	法然上人展の調査研究
		15	浄土宗大辞典
		16	浄土三部経
	17	四十八巻伝	

研究課題別 スタッフ一覧

【総合研究】 総合研究プロジェクト	1 開教
主務	武田道生
研究員（助手含む）	福西賢兆・戸松義晴・名和清隆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕
嘱託研究員	水谷浩志・鷺見定信
研究スタッフ	江島尚俊・大沢広嗣・中村憲司

【総合研究】 総合研究プロジェクト	2 仏教福祉
研究代表／顧問	長谷川匡俊
主務	坂上雅翁
研究員（助手含む）	福西賢兆・上田千年・曾根宣雄
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕
研究スタッフ	鷺見宗信・藤森雄介・関 徳子

【総合研究】 総合研究プロジェクト	3 生命倫理
研究代表／顧問	石上善應
主務	今岡達雄
研究員（助手含む）	福西賢兆・武田道生・袖山榮輝 戸松義晴・林田康順・坂上雅翁
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕
研究スタッフ	水谷浩志

【総合研究】 総合研究プロジェクト	3 葬祭仏教
研究代表／顧問	伊藤唯真
主務	西城宗隆
研究員（助手含む）	福西賢兆・大蔵健司・武田道生 名和清隆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕
嘱託研究員	熊井康雄・細田芳光・鷺見定信

<b>【総合研究】 総合研究プロジェクト 5 国際対応</b>	
研究代表／顧問	田丸徳善
主務	戸松義晴
研究員（助手含む）	福西賢兆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕
嘱託研究員	ジョナサン ワッツ
研究スタッフ	生野善応・岩田斎肇・小林正道 佐藤良純・袖山榮眞・服部正稔 松涛弘道・松涛誠達・マーク ブラム マック カレン

<b>【基礎研究】 教学的関連プロジェクト 6 浄土教比較論</b>	
研究代表／顧問	梶村昇
主務	柴田泰山
研究員（助手含む）	福西賢兆・林田康順・和田典善
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示

<b>【基礎研究】 法式的関連プロジェクト 7 法事讃研究</b>	
研究代表／顧問	福西賢兆
主務	坂上典翁
研究員（助手含む）	福西賢兆・西城宗隆・柴田泰山
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示
研究スタッフ	熊井康雄・清水秀浩・田中勝道 廣本榮康・山本晴雄

<b>【基礎研究】 布教的関連プロジェクト 8 現代布教資料研究</b>	
主務	佐藤晴輝
研究員（助手含む）	福西賢兆・後藤眞法・宮入良光
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示
研究スタッフ	正村 瑛明

<b>【経常的運営】 総合広報 9 編集/HP 管理運営</b>	
主務	大蔵健司
研究員（助手含む）	斉藤隆尚・石川琢道
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕



<b>【経常的運営】 他研究機関連絡提携 10 他研究施設教団交流</b>	
主務	武田道生
研究員（助手含む）	福西賢兆・後藤眞法・戸松義晴 名和清隆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	島 恭裕

<b>【特別業務】 特別 11 浄土宗善本叢書（分室担当）</b>	
主務	善 裕昭
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子
研究スタッフ	伊藤真宏・松島吉和

<b>【特別業務】 特別 12 浄土宗典籍・版木の研究（分室担当）</b>	
研究代表／顧問	田丸徳善
主務	竹内真道
研究員（助手含む）	齋藤舜健・伊藤茂樹・曾田俊弘 井野周隆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子

<b>【特別業務】 大遠忌関連 13 法然上人二十五霊場研究</b>	
浄土宗総合研究所（東京）担当	
主務	斉藤隆尚
研究員（助手含む）	福西賢兆・佐藤晴輝・坂上典翁 宮入良光
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示

浄土宗総合研究所分室（京都）担当	
主務	竹内真道
研究員（助手含む）	齋藤舜健・伊藤茂樹・曾田俊弘 清水秀浩・井野周隆
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子

<b>【特別業務】 大遠忌関連 14 法然上人展の調査研究</b>	
主務	竹内真道
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子

<b>【特別業務】 大遠忌関連 15 浄土宗大辞典</b>	
浄土宗総合研究所 担当	
研究代表／顧問	石上善應
主務	林田康順

研究員（助手含む）	福西賢兆・大蔵健司・西城宗隆 袖山榮輝・石川琢道・柴田泰山 曾根宣雄・名和清隆・宮入良光 村田洋一・吉田淳雄・和田典善
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示

浄土宗総合研究所分室（分室）担当	
主務	竹内真道
研究員（助手含む）	安達俊英・清水秀浩・善 裕昭
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子
研究スタッフ	大沢亮我

【特別業務】 大遠忌関連 16 浄土三部経	
浄土宗総合研究所	
研究代表／顧問	石上善應
主務	袖山榮輝
研究員（助手含む）	福西賢兆・柴田泰山・林田康順 齋藤舜健（分室）
常勤嘱託研究員（研究会担当）	郡嶋昭示
研究スタッフ	石田 一裕

【特別業務】 大遠忌関連 16 四十八巻伝（分室担当）	
浄土宗総合研究所	
研究代表／顧問	伊藤唯真
主務	善 裕昭
研究員（助手含む）	真柄和人・千古理恵子
常勤嘱託研究員（研究会担当）	米澤実江子

編集後記

▽教化研究十六号をお届けする。

▽今回の成果報告は開教班の『沖繩本島都市部における浄土宗寺院の現状と展望②』である。通常では研究年度終了時に成果報告が提出される場合が多いが、今回は研究テーマは継続しつつその時点までの研究成果が発表された。今後このような形で研究成果が随時発表される予定である。

▽研究ノートは葬祭仏教班の『静岡教区調査結果』、浄土三部経班の『仏説無量寿経 卷下』、現代布教資料研究班の『現代布教資料』、国際対応班の『The Amida Sutra』を掲載した。

▽その他の研究については、研究継続中のものも含め、それぞれの概要・研究経過等を「研究活動報告」に記載した。

▽なお今回より研究員名簿の住所電話番号等の個人情報記載しないこととなった。ご質問等は研究所及び分室までご連絡頂きたい。(大)

教化研究 第16号

平成17年7月1日 発行

発行人 石上善應

編集・発行 浄土宗総合研究所

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
電話(03)5472-6571(代表) FAX(03)3438-4033

印刷所 株式会社共立社印刷所





**JOURNAL  
OF  
JODO SHU EDIFICATION STUDIES**

**(KYŌKA KENKYŪ)**

No.16, 2005

*Published by*  
**JODO SHU RESEARCH INSTITUTE**  
(Jōdo Shū Sōgō Kenkyūjo)  
**TOKYO, JAPAN**